

堺 利 彦 著

現代社會生活の不安と疑問

社會問題叢書 1

社 會 問 題 叢 書 の 序

□本叢書の目的が二つある。一つは、初めて社會問題に興味を持つ人々に對して、極めて平易な嚙んでくゝめる様な、そして最も滋養のある讀物を供給する事。例へば第一篇（現代社會生活の不安と疑問）がそれである。

□第二の目的は、既に社會問題の研究に足を踏み入れ、或は勞働運動、農民運動の實際にたづさはつてゐる人々に對し、極めて明晰な、虫眼鏡で物を見る様な、そして最も奥行のある智識を供給する事。例へば第二篇（勞農ロシアの勞働）がそれである。

□然し、第一種が平易であるからといつて、そこに深い智識がないではない。第二種に奥行があるから云つて、それが分り易くないではない。兩種に通じて、平易さ、明晰さ、そして徹底した智識さが、本叢書の特色である。

□本叢書の執筆者は、著名の大家である場合と、まだ無名の青年である場合に係らず、總て最も忠實なる努力を以て、飽くまで右の特色を發揮する事を第一義としてゐる。

はしがり

この本を読む人は、誰でも必ず、ウン成程さうだと、合點してくれる事と私は信じます。然し成程と合點はするが、それと同時に、ヘテ困つたものだ、必ず首をかしげるだらう。

つまり、この本を読むと世の中が本當に分つて来る。私は世の中のからくりを、可なり善く難にも見え透く様に、嘘や胡麻化しやお坐成の幕を取り去つて、御覽に入れた積りです。そこでこの本を読む人は、其からくりを見きわめると同時に、一體それをどうすればいゝのかと、心配になつて来るでせう。

この本は、世の中をどうすればいゝのか、といふ事を教へるものではないが、是非ともそれをどうかせねばならぬといふ事だけは、ヒシ／＼と感じさせたいのです。そして、誰がどうするか、私がどうしたいとか云ふよりも、むしろ自然に、どう成つて行きつゝあるかといふ事を示して居ります。

疑問があつて解決が生ずる。不安の後に安心が来る。そこでこの本は、最後の安心と解決を得

る爲に、先づ『疑問と不安』を擧げて見たのです。そして幾分か、其の安心と解決への方向を示したつもりです。

一九二四年十二月

堺 利彦

目次

(一)	人間一生の運命成行	二
(二)	男の一生	三
(三)	小學時代	六
(四)	少年時代	九
(五)	青年時代	一四
(六)	高等教育を受けた者	一五
(七)	中等教育を受けた者	一八
(八)	上中流の失業者	二二
(九)	労働者	二五
(一〇)	労働と資本	二六
(一一)	安い賃金と失業	三〇

(一二)	長い労働時間.....	三四
(一三)	價値の源.....	三六
(一四)	利潤の出どころ.....	三九
(一五)	ロハ労働、剩餘價値.....	四一
(一六)	資本の搾取力.....	四三
(一七)	階級闘争.....	四九
(一八)	改革運動の使命.....	五一
(一九)	職人、下級店員、小商人.....	五三
(二〇)	奴隸、百姓、労働者.....	五七
(二一)	農村の資本主義化.....	六一
(二二)	小作、自作、大地主.....	六五
(二三)	農業と工商業.....	六九
(二四)	地主の煩悶、小作の活動.....	七三

(二五)	富農Ⅱ對Ⅱ貧農の戰	一七
(二六)	農村改革の理想	一八
(二七)	兵役の事	一九
(二八)	結婚の事	二〇
(二九)	親子兄弟の間柄	二〇
(三〇)	中年時代(上流階級)	二一
(三一)	大財閥と政權	二二
(三二)	政治と經濟、新舊諸政黨	二三
(三三)	資本制度と帝國主義	二四
(三四)	財閥寡頭政治	二五
(三五)	行詰りと死物狂ひ	二六
(三六)	中年時代(中等と下層)	二七
(三七)	老年時代	二八

(三八)	失敗者	一五
(三九)	女の一生	一四
(四〇)	女性中心説	一四
(四一)	妻	一五
(四二)	職業婦人	一五
(四三)	労働婦人	一六
(四四)	賣淫婦人	一六
(四五)	残る婦人問題	一六
(四六)	最後の疑問	一六

現代社會生活の不安と疑問

(二) 人間一生の運命成行

讀者諸君！

私は此の本で、諸君と共に、現在の世の中に於ける、人間一生の運命成行を考へて見たいのです。それには、便利の爲、男の一生と、女の一生とを、別々にして考へて見る事にします。先づ男の方から始める。

然し男の一生と云つても、千差萬別で、ちよつと手軽に見本を示すわけに行かない。それをどんなふうな順序で、どんなふうな話し方にすればいいのか、そこが中々六かしい。そこを十分手際よくやつてのけて、諸君にアツと感心して貰ふのが著者の腕前なのだけれども、扱その腕前がおほつかない。然し一體、話といふものは、半分は其の時のヘズミ次第のもので、どうも思ふ様に出來ない時もあるし、又存外、面白くズン／＼運んで行く時もある。だから私は今、別だんに深い腹案も立てず、思ひつき次第、行當りバツタリで、先づ男の一生を考へて見る事にします。諸君もどうか其のお積りで、本を讀むといふ程の堅くろしい心持でなく、氣をラクウにして私の

話を聞いて見て下さい。そうすれば自然、成程なアと、諸君が合點して下さるだけの事は必ずあると信じます。

(二) 男の一生

赤ん坊が首尾よく生れ落ちる。その兩股の間に可愛らしい突出物が見えると、それが男の子だと分る。これは人間の身分とか地位とか能力とかいふものに關係のない、自然の運命の定めである。大體に於いて、男の數と女の數とが同じだといふ事はあるが、何處にいつ男が生れるか、女が生れるかは、丸で見當がつかない。女ばかり産む人もあれば、男ばかり産む人もある。それが公平であつても、不公平であつても、こればかりは人間の力で、今のところ何んともする事の出來ない運命である。

そこで厭でも應でも男の赤ん坊が生れた。所が、其の赤ん坊が、男といふ自然の運命と共に、賢愚強弱といふ自然の運命を持つてゐる。即ち體質の遺傳、性質の遺傳がある。遺傳といふものは、父母からも、祖父母からも、遠い多數の先祖からも、色々に傳はつて來るものと云ふから、

それを受けついで赤ん坊の體質や性質は、自然の運命と云ふより外はない。尤も、大酒飲みの子に白癩が出来たとか、結核患者の子に弱々しいのが生れたとか、氣ちがひの子が同じく氣ちがひだとかいふのは、どうも自然の運命とばかり考へにくい場合がある。人力の如何ともすべからざる所とばかりは云へない。多少は、或は大部分は、人力でどうにかなりそうである。つまり人間が、色々に世の中を改善して、甚だしい賢愚強弱の差別を無くする事に努めて行けば、産まれる子供も自然に皆な、大體に於いて、賢い丈夫な者ばかりになる筈である。然しそこまで考へて行くと話が少し面倒になるから、産れ落ちるまでの事は、總て避くべからざる自然の運命だとしておく。

そこで體質や性質の遺傳は仕方がないとして、その外に、赤ん坊の境遇の差異がある。赤ん坊の境遇は、即ち其の親の身分や地位や能力に依つて（或は親の有無に依つて）差異を生ずるのだが、それも赤ん坊の立場から見ると、矢張り自然の運命と考へられる。貧富とか貴賤とかいふ事が、體質や性質の遺傳と同じ様に、赤ん坊に取つて、生れながらの資格になる。そして、其の結果として、せつかくの賢い子や丈夫な子が、營養不良の爲に續々と早死にをしたり、薄のろ

の子や半きちがひの子が馬鹿々々しいほど大切に育てあげられたりする。

こゝにいふ事は、人間社會の全體から考へると、甚だしい不經濟であり、それ／＼の赤ん坊について考へると、甚だしい不公平である。現代の世の中には、毎日産まれ落ちる赤ん坊について、先づこゝとした甚だしい不公平と不經濟とがある。それを自然の運命として放つて置かずに、何とか人力で救済する方法はないものか。貧富貴賤といふ事が、男女の差別のような動かすべからざる運命でない以上、何處かに救済法がありさうに考へられる。

鬼にかく斯うして産まれる子供が、今ま日本に毎年二百萬人ばかりある。その半分の百萬人ばかりが男の子である。その百萬人の男の子が、三つになり五つになり十になり十五になり二十になるまでには、段々に其の數が減つて、大てい最初の半分(五十萬人)くらいになつてしまふ。日本では殊に幼児の死亡率が高い。凡そ死亡率の高いと云ふほど不經濟な事はないわけだが、それは一體、何から起るのかと云ふに、營養の不足、衛生の不行届、病氣の流行など、要するに大體、貧乏から起る事である。然らば其の貧乏を何とか退治して、せつかく産まれて來るものを、成るべく皆な育てあげるわけに行かないものか。産んでは殺し、産んでは殺しでは、犬や猫と餘り遠

ひがない様な氣がする。若し又、それほど澤山な人口は不用だと云ふのなら、入用なだけ産む事にする方法がありそうなものぢやないか。然しその事は猶ほ後の『女の一生』の處で話す。

何しろ此の百萬から五十萬までくらしいの男の子が、或は『若様』となり『坊ちゃん』となり、或は『小僧』となり『餓鬼』となつて、色々に育つて行く。

(三) 小學校時代

滿七歳から十四歳までの八年が學齡として、義務教育といふ事になつてゐる。そして政府の統計表を見ると、學齡兒童の九歩九厘までが就學してゐる。大正九年度の小學卒業者は百四十餘萬人(男の子は其の半數の七十萬人)である。此の點に於いては、日本は非常な好成绩だと云はれてゐる。實際には、尋常小學を本統に卒業しない兒童が可なりにある事と思はるれし、又それほど普通教育の行届いた時節に、たとへ全國で何萬人といふ少數であるにしろ、全く就學し得ない兒童のあるといふ事は、誠になさけない次第であるが、然しここでは先づ、小學教育だけは、總ての兒童が(生き残つてゐる限り)公平に受けてゐるものとしておく。

所が、學校の課業だけは全體公平であるとしても、それ／＼の家庭の生活の相違が、兒童の身の發育に大へんな影響を與へる。流行の洋服を着てゐる生徒と、袴の一着もおほつかない生徒とが並んで居たり、おいしい辨當を持つて來たのと、朝飯も食はずに來たのとが隣りあつたりしてゐる。人力車や自動車で送り迎へされてゐる子もあれば、赤ん坊の守りや親の仕事の手傳ひに寸暇もなく追ひ使はれてゐる子もある。朝飯前に納豆賣の役を務めてゐる子さへある。そしてそれらが皆な同じように、『公平』に學校を卒業させられる。

罪もない、小さいな子供達に、一方には威張る事を教へ、一方には卑屈な心を持たせ、一方にはサゲスミ、一方にはソネミ・ヒガミを覚えさせる。そして小學教育だけ鬼にかく公平に授けられるのを、大變な有難い事として感謝せねばならぬ。それが文明社會に於ける子供の境遇なのである。

或る貧民部落の學校で、數日間、生徒に「營養食」といふ物を與へた結果、其の生徒の多くは頓に體量を増加した。所が、その營養食とはどんな物かと云ふに、中流の家庭の惣茶に遠く及ばないくらいである。特に貧民部落と云ふのでなくとも、一般農村の食物はすいぶん營養不足に相

違ない。又、都會の子供達は、たま／＼數日間、林間學校などといふ様な處に連れて行かれると、忽ち顔色が善くなり、元氣になつて歸つて来る。それほど平生は悪い空氣の中に生活してゐるのである。そんな子供達を、皆な同じように清潔な空氣の中に置いて、可なりな着物を着せ、可なりな食物をたべさせて、そして八年の義務教育を授ける位の事が、日本といふ國家の力、國民の力で、どうしても出来ないのだらうか。

男の一生は力量次第、勉強次第、心掛次第だと云はれてゐる。だから立身するのも、零落するのも、其の人々として總て當り前だと云ふ事になつてゐる。それが果して當り前であるか、どうかは、これから後に追々話して行くが、假りにそれを當り前として、そつといふ競争のスタートを切らうとする何十萬の子供達は、是非とも正しく一列に並んで、足を揃へて立つて居るべき筈ではないか。然るにそれが、十間も二十間も先になつたり後になつたりしてゐるのでは、後の者がやりきれない。若し又その場合、或者は重い石をしようされて居り、或者は自轉車に乗つて居るとしたら、どうだらう。そつといふ競争の勝負を見て、力量次第だ、勉強次第だ、心掛次第だと云ふのは、あんまり可愛そつに思はれる。然し世の中の實際は正に其の通りです。

（四）少年時代

小學時代が終つてから丁年に達するくらいまでを、假りに少年時代と稱して置く。重い石をしよわされた者と、自由な身輕な者と、自轉車に乗つた者との競争が、これからいよいよ烈しくなつて行く。

先づ中學校にはいるか、はいらぬかが、差當りの問題になる。誰しも中學教育は受けたいに極まつてゐる。けれどもそれが容易でない。大正九年度の統計に依ると、中學校入學志願者が十二萬三千餘人、入學者が四萬八千餘人、卒業者が二萬二千餘人である。前の計算に依つて、小學校を卒業する男の子は七十萬人であるから、僅かにその二割弱が中學に志願し、其の志願者の半分足らず（四割）が入學し、其の入學者の又半分足らず（五割弱）が卒業するわけである。外に實業學校の卒業者が三萬二千餘人、師範學校の卒業者（男子）が七千人ばかりある。それらを全部合算した所で、小學以上の教育を受ける者は、小學卒業者の五分の一か、十分の一かである。まだ其の外に、諸種の私立學校で多少の教育を受ける者はあるだらうが、それも全體から見ても大した數

にはならない。

こゝが男の一生の、最初の大きな別れ道である。尤も、中學校や實業學校を卒業したからと云つて、それで立身の階段に登りかけたわけでもないが、然しそれだけの準備のある者と無い者とは、行々の競争力に大變な相違が生ずる。生れつき特に優秀な、強健な男であるならば、正式の中等教育など受けなくても、何とか獨力で相當な智識を作り、見んごと競争場裡に頭をあげて行く事も出来るが、多數の者について大體の上から云ふ時には、矢張り中等教育を受けた者が勝を制する事になる。師範學校を卒業したのでは、小學教員になるだけの事で、立身といふわけには勿論行かないが、それでも差當り生活に困らないだけの便宜が得られる。

所で、この別れ道に於いて、中等教育道に進む者と、横にそれて行く者との違ひは、何から起るか云ふに、それは無論、金のあると無いに依る事である。即ち中等教育は、相當餘裕のある家の子供だけが受けるのである。師範學校では、學費を給與されるだけに、それだけ割がわるく出来てゐる。つまり、金のある者は、それだけ餘計の便宜を持つて世の中に立つ事になるのである。

そこで中學教育の受けられぬ多數の少年は、農家なり商家なりそれ／＼の家業を手傳はされるか、さもなれば商店の小僧、會社の給仕、工場の労働者などになる。家業の手傳ひと云ふのも、つまり、親の家に使はれる小僧、給仕、労働者である。それから若し小僧にも給仕にも労働者にも成らないし、親の家にも居つかないしする者は、謂ゆる不良少年となる。不良少年の中には中流以上の身分の者もすいぶんある様で、それは家庭の甚だしい紊亂とか、性質上、體質上の特殊の缺陷とかに依るのだらうが、兎にかくそれは例外であつて、多數の者は矢張り、不自然な貧乏生活の結果である。或者は餘りに意志の弱い爲に、ついで／＼そこまで落入るといふのであるだらうし、或者は又、反抗心の強すぎる爲に、それでもせずに居られないといふ事情もあるだらうが、いづれにせよ、彼等は貧しき少年に對する、甚しい社會の壓迫に堪へ得ないのである。

斯くて重石をしよわされた數十萬の少年(小僧、給仕、少年工など)と、身輕な自由な數萬の少年(中學生など)と、自轉車に乗つた極少數の少年(大金持の子供など)とが、恐ろしい不公平な競走をやらされる事になる。一方では、まだ將來の競争の準備だけに没頭して、只だ一生懸命に學校に通つたり、或は運動とか競技とかいふ遊び事で身體を鍛へたりしてゐるのに、一方では、早

既に親の生活を助けたり、甚だしきは弟や妹を養つたり、それでなくても自分だけの衣食の料を稼いだしたりして、將來の準備をする餘力などは迎もない。それを力量次第、勉強次第、心掛次第の競争だと云ふから堪らない。然し、前にも云ふ通り、特別の力量を持つて生れた奴は、そういう重い石をしよわされながら、非常な心掛と無理な勉強とで、自轉車に乗つた奴をさへ追ひ越す場合もあるが、多數の者としては、そういうわけに行かない。矢張り餘計準備をした奴等が、それだけ勝を制する事になる。私は決してそういう好運な境遇に居る少數者が憎いと云ふのではないが、あゝいふ不運な境遇に在つて猶ほ競走を試みてゐる多數者がいぢらしいのです。そして只だ憎らしいのは、それを公平な競走であるかの様に云ひはやす人達です。

私は又、『小僧さん入用』『小商店員歓迎』『少年工募集』などいふ張札や廣告を見て、何だか胸の痛いような氣のする時がある。少年労働者は斯様に社會から要求されてゐる。『小僧さん』といふ呼方には、サモ人をいたわるような響きがある。『小商店員』といふ新らしい名稱は、如何にも少年の自負心をそそるに足る用語である。『少年工』といふ言葉にも、矢張り『小商店員』と同じ感じがある。更に『入用』が『歓迎』と進んだ所に意味がある。少年労働者はなぜ斯様に要求されて

るのか。つまり安い給金で便利に追ひ使へるからである。そうして見ると、少年労働者が歓迎されるのは、彼等が虐待に甘んずるからだと言ふ事になる。實質上の歓迎をせずに済むといふ點が、即ち彼等の歓迎される所以である。小店員、少年工、小僧さんなど、云つて、名稱が體裁よくなつたり、呼方が柔しくなつたりするのも、つまりみじめな實質をロハで少しなりと塗り隠さとする、小さいな術策である。

要するに、今の世の中は、こんなにして少年労働者を釣らないでは立行かないのである。少年工がなくては工業が成り立たないし、小僧がなくては商業が引き合はないし、給仕がなくては事務所の經營が出来ない。斯くて少年労働者は、飽くまで安い給金で最も便利に追ひ使はれる。彼等が親の家業を手傳はせられる場合も、實質上では全く同じ事である。一方には遊び半分の、少數の中學生を作り、一方には、こうしたみじめな、多數の少年労働者を作るのが、今の社會のノツビキならぬ必要である。そういう社會を我々は、いつまで此のまゝにして置かねばならないのでせうか。

(五) 青年時代

大體、二十歳くらいから三十歳くらいまでを、青年時代として、男の一生の第四期と目しておく。

この第四期に於いて、中等教育を受けた連中が第二の大きな別れ道に立つ。即ち彼等の中の少數者は、大學その他の専門學校、若しくは高等學校に入り、残る多數者は何かそれらの職業に就く事になる。前の計算に依ると、中等教育を受ける者が、大積りにして八萬人ばかりあると見ていゝらしい。そして其の中から更に進んで専門學校を卒業するのは、凡そ二萬人ばかりである。其の二萬人は何と云つても、最上の便宜を持つて世の中に出る者である。前にも云つた通り、生れつき特別の力量を持つてゐる者は、既に中學校でも卒業した以上、専門學校などに行かないでも、見んごとそれ以上の働きを示すものもあるにはある。然し大體から云へば、この世の中は矢張り高等教育を受けた者の天下である。

そこで、最初の同年男子百萬人の中、約半数は丁年以前に死亡し、残る五十萬人の中、八萬人

が中等教育を受け、更に其の中の二萬人が高等教育を受け、それで青年の三階段が出来るのである。即ち上流が二萬人、中流が八萬人、下層が四十萬人と云つたような勘定になる。

斯くて大體、二萬人ばかりは自轉車に乗り、八萬人ばかりは身輕であり、四十萬人ばかりは重い石をしよつてゐて、それが世の中の運動場で競走をやるのです。先づ自轉車組の身の上を少し委しく考へて見る。

(六) 中等教育を受けた者

中等教育を受けた者の間からすぐりだされた二萬人は、幾回も幾回もの試験を通過して來たのだから、非常に優秀な人物ばかりの筈だ。所が實際は必ずしもそうでない。なぜだらう。

元來、中學にはいるかはいらぬかの時が、既に本人の能力に依つて決定されたのでなく、親に相當の餘裕があるか否かに依つて決定されたのである。次に高等の専門學校に志願するか否かが一層多く、金のあるなしに依つて決定されてゐる。だから幾回もの試験は只、有産階級の子弟の間の方に於いて、比較的優秀な者をすぐるに過ぎない。無産階級の子弟は幾ら能力があつても、

初から其の選に入る資格が無いのである。そこで、非常に頭腦の明晰な、才氣の潑刺たる、極めて優秀な素質を持つた奴が、何處かの工場の隅で朝から晩までハンマーを揮つてゐたり、或は夜ふけの町に人力車を引張つてゐたりするのに、少々薄ほんやりの坊ちゃんやんが、勿體らしく大學で講義を聽いてゐたり、わざ／＼ヨーロッパまで學問に行つたりしてゐる場合がある。高等學校まではヤツトはいつたが、どうしても卒業が出来そうにないと云ふので、とう／＼自殺した人さへある。これらは、能力の不足な青年を、金の力で無理やり學問させようとした、虚榮虚飾から生じた悲劇である。

若し學校といふものがモット公平な制度であつて、例へば總ての少年に中等教育だけは必ず受けさせ、其の卒業者の中から本統に優秀な者ばかりをすぐつて、それを各種の専門學校に入れるといふ仕組であつたら、どんなに善いだらう。それでこそ初めて本統に、最も優秀な、そしてそれ／＼の専門に最も適切な、人物が得られる事になる。それでこそ初めて本統に、教育の効果が經濟的に擧がる事になる。今日のような、有産階級の子弟ばかりに高等教育を授けるといふ制度は、餘りに不公平でもあり、不經濟でもある。然しそれが金の世の中の有様だと云ふのだから是

非もない。然し又、如何に金の世の中だと云つても、そんな馬鹿々々しい制度を、只だ是非もない、是非もないで、いつまでも放つて置くべきものかどうか。

それに對する答は兎にかくとして、實際、有産階級の子弟の中から毎年二萬人づゝすぐりだされて、高等教育を受けさせられる。彼等は必ずしも、國民中の最も優秀な人物ではないが、それでも、比較的には優秀な素質を持ち、そして高等の教育を受けるのだから、矢張り大體に於いて最も有力な青年になる。そして彼等は學校を卒業すると、社會の各方面に乗りだして、それ／＼高級の職業に就き、重要な地位を占める事になる。官吏、會社員、銀行員、事務員、教員、新聞記者など、稍や高級の椅子は總て彼等の領分である。醫士、辯護士、技師などの類も亦た同じ。何か獨力で事業を起す者も、少しシツカリしたのは大抵みな彼等の連中である。要するに、社會に於ける中以上の地位は、悉く彼等の爲に占有されるのである。

勿論、彼等の中にも等級がある。例へば、専門學校は大學に及ばず、私立大學は帝國大學に及ばぬ。そして高等官の大部分は帝大出の法學士であり、實業界の主なる椅子は商科大學、慶應大學などの卒業生に占められ、教育界には高等師範出が最も多く幅を利かせ、新聞記者には早稻田

大學出身が非常に多いと云ふような、それ／＼の分野があるが、大體から見ても、帝大卒業が最も強大な勢力を揮つてゐる。

右に話したまでの所では、高等教育を受ける者を總て一樣に有産階級と目して來たが、それは只だ無産階級に對しての言葉であつて、有産階級の中に大きな上下の差別がある事は勿論である。富豪とか資本家とか大地主とか云はれる階級と、少しばかりの資産家とか、少しばかり高い地位の家に生れたとかいふ人々とは、大へんな相違である。その邊の事については、猶ほ後の章でいろ／＼話す。

又、有産階級の子弟でなく、無産階級もしくはそれに近い身分の者で、苦學生とか貸費生とか云ふのがある。まだその外にも、有力者の補助に依つて高等教育を受ける人達がある。然しそれらは、學校卒業後の資格なり便宜なりに於いて、又それに伴ふ本人の心持に於いても、正に有産階級の一部、若しくは其の附屬と目すべきものである。

(七) 中等教育を受けた者

高等教育を受けた二萬人の上流青年が社會各方面の重要な椅子に坐る間、中等教育を受けた八萬人の中流青年は、總て前者の下廻りを務める事になる。即ち高等官に對する判任官、高級事務に對する下級事務員、技師に對する技手、中等教員以上に對する小學教員と云つた様な關係である。要するに、彼等は安月給取である。

勿論、中流青年が總て月給取になるわけではない。相當の農家なり商家なりの息子で、これといふ職業に就かず、只ブラリとしてゐるものもある。或は親に代つて家業を經營して行くものもある。そういふのは上流青年の中にも勿論ある。そして、そういふ種類の中流青年は、丁度矢張り同種類の上流青年の下廻りを務めるような地位に立たせられてゐる。

斯様に、青年を上流、中流、下層の三階段に分けて見たが、これを社會の全體から見ると、上流青年を必ずしも總て上流階級と目するわけには行かない。本統の上流階級は其の中の少數者に過ぎない。其の多數者は實際上、中流階級である。そこで右の謂ゆる中流青年の大部分は、その實、本統の中流階級ではなく、中の下階級と云つた方が適切である。中の下階級、若しくは安月給取、これが大體、彼等の正當な名稱である。

前に、中等教育を受ける者と受け得ぬ者とを區別した時には、其の區別方を大へん重要なものに見て置いたが、こゝになつて見ると、中等教育くらいの事は大して有りがたいものではない。中等教育が特に有りがたいのは、それが更に高等教育を受ける資格になるといふ點に在る。或は又、特に優秀な才力を持つた男が、専門學校には入り得ないでも、獨學で専門的な智識を作りあげようとする場合には、中等教育の準備が大へんな役に立つ。然しそんなのは極少數の例外で、大多數について云へば、高等教育連をすぐりぬかれた跡の中流青年は、下廻り役、中の下階級、安月給取として、初から相場が極まつてゐる。前々から競争々々と云つて來たが、實は競争にも何も成りはしない。そこが氣の毒な所である。

然し、上を向いて見れば其の通りだが、下を向いて見れば、矢張り彼等も相應な特權（と云ふほどではなくても、相應な便宜）を得てゐる。小學教育きりで突き放された者に比べると、どれだけ幸福だか分らない。殊に三十以下の青年時代に在つては、彼等と高等教育連中との差異がまだそんなに甚だしくない。將來の立身の希望から云へば、逆も比べ物にならないけれども、現在では、高等連中もまだ大した金が取れるわけでもなし、下廻り連中の方が比較的に好い月給を取

つたりする場合もある。然し又、次のような別の情勢がある。

ハ) 上中流の失業者

高等教育を受けた有産階級の青年が、總て社會各方面の重要な椅子を占めると前に云つた。それは其の通りに相違ないが、椅子の數は人間の數より少ない。高等教育は立派に受けたが、職業はまだ見つからない。大學はチャンと卒業したが、自活はまだ出来ない。そういう連中が次第に多くなつて來た。中等教育を受けた連中の間でも、失業者の増加する傾向は全く同じである。

一體、今の世の中では、筋肉的の勞働は賤しいものと認められて、賃金も其他の勞働條件も、精神的の職業者に比べて甚だ悪い。即ち下層階級の者は筋肉的の勞働者となり、中流以上の者は精神的の職業に従事するといふ事になつてゐる。そこで中流以上の青年は、前にも云ふ通り、稍や低能の連中ですら、筋肉勞働の苦痛と耻辱とを免れる爲、そして中流たる身分の面目を保つ爲、どうしてもして高等教育を受けようともがいてゐる。こゝにいふ情勢が一般に動いてゐるのだから中流以下の青年でも、若し出来る事なら、どうにかして少しでも程度の高い教育を受けたいと考

へる。すいぶんヒドイ無理をしても、何かの學校にはいらうとする。斯くて諸學校に於ける、入學志願者に對する實際入學者の數が、中學校でも三四割に過ぎず、高等學校では二割、實業專門學校では二割五歩といふ割合になつてゐる。斯様に入學志願者が多いので、學校はドシ／＼新設され、擴張され、従つて卒業者も年々増加して行く。そこで卒業生の供給過多が起り、多數失業者の現出となる。

斯様にして多數の失業者が現出する結果、其の失業者は自然に下の階段に落ちて行く。即ち高等教育を受けて居りながら下廻りの連中に加はり、中等教育を受けて居りながら労働者の列に入る事になる。又、斯様に失業者が現出するに連れて、在職者の地位が當然に下落する。即ち收入の割合も次第に悪くなり、立身の機會が少なくなつて失業の機會が多くなる。それらの結果としてこゝにいふ事態が発生する。

(一) 高等教育を受けた連中の間に、大いなる不平を抱く者が出来る。彼等は社會の支配者となる筈であつたのだが、それが一轉して社會の反抗者となる。彼等は支配階級(權力階級)の一部として働く筈であつたのだが、それが一轉して下層階級(勞働階級)の爲に働く事になる。現に、勞

働運動、農民運動、社會運動の中に、大學卒業生などが少なからず立ち交つてゐるのが、即ちそれである。然らば、大學卒業生の中の、賣れ口の無いのだけがそんな運動に加はるのかと云ふに、決してそうではない。相當な賣れ口のどうしても見つからない程の人物は、滅多に反抗者にはならない。それらは大抵、不平をこぼしながら(前に云つた通り)下の階段に落ちて行く。さすがに彼等は高等教育を受けてゐるのだから、一つ下の階段に落ちて、それに甘じさへすれば、まだどうにかなつて行くのである。然るに、そういふ情勢に憤慨して、大なる不平を抱き、反抗的の態度を取るの、寧ろ頗る優秀な連中である。彼等は、自分一身としては、可なりな地位が逆も見つからないと云ふのではない。けれども、大體に於いて、自分等の地位の下落を感じた以上、それを徹底させて見ると、一般下層階級に對する同情となる。そこで彼等は、下層階級の爲に義憤を發して、敢て其の代表者、指導者、援助者として活動する事になるのである。

(二)中等教育を受けた連中が、自分の地位に對する自惚を消滅させる事になる。從來では、彼等は中流階級といふ自惚を持つてゐた。上流階級に登る事は見込がないとしても、少なくとも筋肉勞動者などは全く違つた立場に在るものだといふ、自尊心を持つてゐた。彼等は紳士であつ

た。大紳士では無いとしても、小紳士であつた。彼等は假りに労働者であるとしても、精神労働者であつた。従つて彼等は、労働者と違つた生活様式を持つてゐた。然るに、社會の情勢が次第に變つて來た。彼等の相場が段々に下落した。収入は減少した。失業者は増加した。自分なり、自分の同輩なりが、餘りにミジメに見えだした。自分等の月給は筋肉労働者に及ばない場合すらある。自分等の生活は、様式だけは多少違つてゐるにもせよ、其の苦しい哀れな有様が労働者と同じである。斯くて彼等は今、安月給取として、中の下階級として、小紳士といふ昔の幻想を消滅させた。彼等は今、精神的労働者として、筋肉労働者から自らを區別するよりも、自分も同じく労働者だと感ずるようになりかけてゐる。即ち彼等は、中流階級に屬すると考へるよりも、無産階級に屬すると感じかけてゐる。但し彼等の全體がそうだと云はれない。彼等の中の稍や上方に屬する部分は、矢張り中流階級として小紳士たるの自惚を有してゐる。けれども、彼等の中の下方に屬する部分は、今や次第に多く無産階級化しつゝある。洋服細民といふ言葉などは、最も善く彼等の地位を現はしてゐる。

又、小商人、小地主などの階級も、右と同じ情勢の下に在る。彼等の中、既に目ざめかけてゐる

る連中は、小商人が獨立の企業者でなく、矢張り一種の労働者に過ぎない事を感じ、小地主も亦た小作人と同じ運命をたどらねばならぬ事を知つてゐる。

斯くて洋服細民の中からも社會運動者が現はれ、小商人も無産運動に加はり、小地主も小作運動に加はるといふ現象を呈してゐる。

(三) 多少とも中等教育を受けて、労働界に落ちる連中が、労働界の實質を高める。高等教育を受けて下廻りに落ちる連中には、反抗心を持つほどの氣力がないと前に云つたが、今この場合はそれと趣きが違ふ。前者の場合は、只だ一段下に落ちたのであつて、それに甘んじさへすれば、まだどうやらやつて行けるのだが、後者の場合は、最下層に落ちたのであつて、浮みあがる見込みもない。そこで彼等は、本來の労働者の水準以上の、多少の智識を以て、労働運動に力を與へる事になる。これは丁度、小地主から小作人に落ちて來た連中が、小作運動の有力者になると同じである。

(九) 労働者

高等教育連と、中等教育連とを除いて、その下の下層青年を一口に云ふと、其の總てが労働者である。彼等の多數は既に少年時代から筋肉労働をやつて來た連中である。彼等の中の一部分は、巡查とか、雇吏とか、その外それに似たような事務員などになつて、下廻りの又下廻りとして安月給取の仲間に入り、中の下階級に屬してゐる者もある。然し大體から見ても、彼等は總て筋肉労働者である。

筋肉労働者を大別すると、新式の謂ゆる労働者と、農民との二つになる。その外、舊式の職人や、下級店員や、小商人などがある。先づ新式の労働者について考へて見る。

新式の労働者を更に種類別にして見ると、工場労働者、運轉労働者（汽車、電車などの労働者）、鑛山労働者、海上労働者などがある。まだその外に自由労働者（土方、人足の類）がある。

此の新式の労働者が即ち、今の世の中で『労働者』『労働者』とやかましく云はれてゐる人達である。一體、今の世の中は、金のある資本家が、工場を建てたり、機械を据ゑつけたり、鐵道を敷いたり、船を拵へたり、鑛山を開いたりして、そこにそれらの労働者を雇ひこんで働かせ、そして色々な商品をドシ／＼製造したり運搬したりして、それに依つて盛んに金もうけをやる

いふ世の中である。それが文明社會に於ける事業の中心である。その他の事は總て、そうした産業の經營を守り立て、行く手傳ひ仕事に過ぎない様に見える。それで資本家、富豪、金持といふ者がエライ威勢を持ち、丁度むかしの大名のような地位に坐つてゐる。これを資本制度の社會と云ふのである。所が、其の資本家が資本をつぎこんで、紡績事業をやるにしても、養蠶製絲をやるにしても、石炭や銅を掘りだすにしても、その他いろいろの製造事業をやるにしても、労働者を雇つて働らかせるより外に、利潤を産みだす方法がない。機械と原料とだけでは商品は出来ない。是非とも労働者の労働をそれに加へなければならぬ。そこで労働者が大持てになる。つまり資本家の經營する産業が発生するにつれて、労働者が發生し、其の産業が發達するにつれて、それだけ労働者も發達する。だから大正十二年末の社會局調に依ると、日本全國に四百萬人からの労働者が居る事になつてゐる。そして其の多數の労働者が、工場なり、鑛山なり、鐵道なり、其他なりに於いて、群集して働らいて居るのだから、自然彼等は團結しはじめ。現に彼等は既に労働組合を作つてゐる。多數が團結すれば強大な力になる。労働者の力が資本家の力と對立する事になる。彼等が『労働者』『労働者』と云ひはやされる理由は、即ちそこに在る。

こう云ふと、労働者は馬鹿に景氣がいふようだが、彼等の生活は實にみじめである。労働者が大持てになると前に云つたが、それは矢張、少年労働者が歓迎されるのと同じわけで、労働者が安い賃金で働らいて、資本家の爲に利潤を産みだしてやるから、それで大持てになるのである。

労働者には安い賃金と失業とが付きものである。

全體、ナゼそんな事になるのか。少しユツクリ考へて見よう。

(一〇) 労働と資本

労働者は自分の手足を働らせて自分の衣食を支へようとする。若し彼等に土地があるなら、彼等は耕作をやらだらう。若し彼等に機械と原料とがあつたら、彼等はそれを使つて何かの製造をやらだらう。所が、彼等には土地も機械も原料も無い。今の世の中では、可なり大仕掛の設備でなくては、仕事らしい仕事は到底出来ない。そこで彼等はどうしても、獨立して生活する事が出来ない。彼等の持つてゐるものは二本の腕ばかりである。彼等は其の腕の力を他人に賣るより外はない。即ち、金のある資本家に雇はれて、其の工場、其の機械、其の設備に依つて自分の腕

を働かせ、そして其の代りに賃金を貰ふより外はない。

其の關係を資本家の方から見ると斯ういふ事になる。例へば資本家が靴を製造しようと計畫する。彼は先づ工場を建築して機械を据えつける。それから原料の皮を買入れる。最後に労働者(即ち靴工)を雇ひ入れる。工場の建築、機械の据付、原料の買入、労働者の雇入、それらは總て、資本家の立場から見ると、只だ資本の支出である。工場に千圓、機械に千圓、原料に千圓、賃金に千圓、合計四千圓の資本をかけて、それで靴が千足出来あがると云つたようなわけである。だから資本家が労働者を雇ふと云ふのは、つまり二本の腕の働きを買ふのである。

こんな云ひ方をすると、人間の労働を商品扱ひにして怪しからんと、ヤツキになつて憤慨する人がある。然し私が労働を商品扱ひにするのではない。資本家がそうやつて居るのである。資本家に對して憤慨するのは宜しいが、私に對して憤慨したつて仕方がない。私は只、資本家のやつてゐる事實を其まゝ話してゐるだけの事です。

資本家と労働者との關係は、双方が對等の立場に立つて、自由に契約をするのだといふ説がある。即ち賃金が安いとか高いとか云ふのも、労働者がそれを承知するからである。厭なもの無

理に引捕へて働かせるのではない。それを承知するも、承知せぬも、労働者の自由の意志である。これは大へん労働者の權式を認めてくれた、有りがたい説の様に聞える。然し實際は正反對だ。労働者は腹が減つてゐる。そして働かうにも働く仕事がない。資本家に雇はれるより外はない。ひもじい、ひもじいと云つてあはれまわる腹の虫に追ひ立てられて、厭でも應でも二本の腕を賣りに行く。自由の意志なんぞあつたもんぢやない。だが、そうは云ふものゝ、苟くも人間だ、餘りひどい目に會へば腹が立つ。ブン／＼おこつて飛びだして來る場合もある。その時は如何にも自由の意志がある様に見える。然し直ぐに又、ひもじいと云つてあはれる腹の虫に追立てられる。そして又、何處か外の資本家に雇はれに行く。労働者は昔しの奴隸と違つて、或一人の主人に屬してはゐない。けれども、労働者といふ階級として、資本家といふ階級に屬してゐる。だから矢張り一種の奴隸で、賃金奴隸とも呼ばれてゐる。

(二) 安い賃金と失業

そこで資本家は労働者の腕の力を買ふ。即ち労働力を買ふ。労働者としては、それより外に賣

る物が無いから、それを賣つて衣食の料にする。斯くて労働力は、機械や原料と同じ様に、商品として賣買される。所が、總て商品の値段といふものは、それを拵へる費用(即ち生産費)に依つて定まるのだから、労働力といふ商品の値段も、矢張り其の生産費に依つて定まるわけである。労働力の生産と云へば、一人前の労働者を相應に生活させて行くだけの費用が、即ちそれである。然し労働者が働らけるだけ働らいて、そして死んでしまふのでは、労働者の跡繼がなくて困る。そこで労働者の種を絶やさないう様にする爲には、労働者に女房を持たせ、子供を産ませ、そしてそれを相應に育てさせる必要がある。だから労働力といふ商品の値段は、一人前の労働者が女房を持ち、子供を持つて、相應に生活して行くだけの費用と云ふ事になる。然し其の相應とは、労働者としての相應であつて、決してそれ以上のものではない。従つて労働者の値段(即ち賃金)は、彼等の一家族がカツク生活して行けるだけの金額と極まつてゐる。決してそれ以上には成り得ない。

尤も、労働者にも色々ある。相當の年季を入れ、相當の熟練を積んだ労働者もあり、ほんの生れたまゝの腕で働らいてゐる労働者もある。そんな事からして自然、『相應』といふ生活の程度が

違つて来る。従つて賃金にも差等が生じて来る。然し、少しばかり高いと云ひ、安いと云つても、要するに労働者の賃金は高の知れたものである。

又、賃金は右の通り、大體に於いて高の知れた金額に極まつてゐるのだが、然しそれも時と場合とに依つて、多少の増減がある。經濟界の景氣がよくて、資本家達が色々の事業を始めだし、労働者の需要が多くなると、賃金は自然に騰貴する。どうかすると、可なりに大きな騰貴をして、労働者がウケに入る時節がある。然し、それから間もなくして、不景氣時代になると、賃金は直ぐに下落してしまふ。それを平均すると、大體やはり、お極まりどほりといふ事になる。又、色々な事情で賃金が可なりに高くなつても、それと同時に物價が騰貴するので、實際上には何んの役にも立たないといふ場合が屢々ある。否、多くの場合、賃金の騰貴は物價の騰貴に追ツつかないのである。

こんなわけで、労働者は安い賃金で働らくものと運命が極まつてゐるのだが、その安い賃金すら取れない場合が、又すいぶん多い。即ち失業といふ事が、矢張り労働者の運命の一つである。前に云つたように、景氣の好い時分には、労働者は幾らでも雇ひ入れられる。労働力は羽が生え

て飛ぶ様に賣れて行く。所が、好景氣の後には必ず不景氣がやつて来る。無暗に品物を拵へすぎ
るから、それがバツタリ賣れなくなる。經濟界に恐慌が起る。總ての事業が中止され、若しくは
縮少される。そして勞働者がドシ／＼解雇される。何千、何萬、何十萬といふ失業者が出来る。
此の時、社會には勞働者の拵へた品物が多過ぎて、何處の倉庫もはちぎれるほど一パイになつて
ゐる。そして勞働者は賃金が取れなくなつて、その有り餘る品物を買ふ事が出来ない。つまり勞
働者は、自分が餘り澤山の品物を拵へたから、その罰で、其の品物を分けて貰ふ事が出来ないとい
いふわけだ。何んといふ馬鹿々々しい、無理な、無茶な、不都合千萬な世の中だらう。と憤慨し
て見ても仕方がない。それが經濟界の法則なのだ。

資本家が經濟界を切りまわして、利益を得て行く爲には、多數の勞働者の必要がある。そして
それを、入用な時には驅り集めて使ひ、不用になれば突きはなす、それで經濟界が立つて行くの
である。平生、失業者が澤山にあるからこそ、イザ好景氣といふ場合に、それを驅り集める事が
出来るのである。又、平生、失業者が澤山にあるからこそ、働らいてる勞働者の賃金を安く安く
押しさける事が出来るのである。失業者は資本家に取つて是非とも必要な、大切なものである。

失業者の事を『産業界の豫備軍』と云ふが、如何にも其の通りで、戦争の爲には豫備軍が必要なのである。

斯様に労働者は、安い賃金と失業とを必然の運命にして、資本階級の金もうけの道具に使はれてゐる。

(三) 長い労働時間

斯くて資本家は労働者を雇入れた。既に労働者を雇ひ入れて働らかせる以上、毎日、成るべく長い時間、働らかせるが得である。

然し、幾ら長いと云つても、一日二十四時間働らかせるわけには行かない。相當の睡眠時間と休息時間とがなくては、人間は程なく死んでしまふ。労働者の死ぬるのが氣の毒だとか、可愛うだとか云ふのではないが、労働者が不足しては困る。労働者はせめて廿年くらい働らかせて、代りの子供が一人前になつてから死なせる事にしないと、どうも都合がよくない。代りが出来ればモウ死んでも構はない。資本家の立場から労働者を見ると、先づこゝう云つたわけになる。そこ

で労働者が廿年くらい相當健康に働らけるだけの、可なりの休養を與へる事は必要になる。尤も、労働豫備軍の數が非常に多い場合には、五年で仆れようが、三年で行きつかうが、そんな事に頓着なく、殆んど不眠不休の状態に働かせたりする事にもなる。實際、廿四時間アツとほして働らかされてゐる労働者もある。

所で、先づ大體から云つて、資本家は労働者を、餘り早く死なせない程度に於いて、出来るだけ長く働らかせる。少しでも長く働らかせれば、それだけ資本家の利潤が多くなるのである。然しそれには労働者の反抗運動もあり、人道問題など、云つて一般社會から騒がれる恐れもあり、餘り甚だしい事は出来にくくなつてゐる。現に『八時間労働』といふ標語が來て、成るべくそれに近い労働時間にするのが正當だと云ふ事になつてゐる。

そこで今度は資本家が、同じ時間の中に、出来るだけ烈しく労働力を使はせる事を考へだした。それには、機械をますます精巧にするとか、作業の方法を改良するとか、能率増進法を行ふとか、いろ／＼の事をやるのだが、兎にかく資本家は、有らゆる方法手段に依つて、労働者の労働の中から、出来るだけ多くの利潤を搾り取らうとするのである。

(三) 價値の源

一體、利潤といふものがどうして勞働の中から搾り出されるのか。それを少し考へて見ておく必要がある。

元來、物の値打とは、其の物の中に含まれてゐる勞働の分量の事である。空氣や水は人間の生活に無くてならぬ大切なものだけれども、それには値打といふものがない。空氣や水は自然に幾らでもあつて、それを吸つたり飲んだりするのに、勞働を加へる必要が無いからである。尤も、水は空氣と違つて、勞働の加はつてゐる場合が少なくない。水道の水などが即ちそれで、色々な勞働が其の中に含まれてゐる。そこで水道の水には値打がある。即ちそれを使ふには金が入る。

凡そ物と物とを交換する時、例へば酒一升が石鹼一ダースに相當すると云ふ。其の割合は一體どこから出て來るのか。石鹼で垢を落す心持の善さと、酒の酔ひ加減とが比べられるものではない。そんな心持などいふボンヤリした物でなく、何かモツトはつきりした物が、酒と石鹼とに共通してゐて、その比較に依つて双方の値打が極まるのに相違ない。其の共通した物は何かと

云ふに、それが即ち人間の労働である。一升の酒を製造するに費した労働と、一ダースの石鹼を製造するに費した労働とが、同じ分量である場合に、それが同じ値打の物として交換されるのである。今の世の中では、物と物とを直接に交換する事は減多になく、總て金錢を仲立として交換をしてゐるのだが、金錢(即ち貨幣)といふ物も、矢張り一つの商品であつて、酒一升を二圓で買ふと云ふのは、即ち酒一升と黄金二圓分とを交換するのである。紙幣は便宜の爲、黄金の代用になつてゐるので、何時でも黄金に引換へらるべき善の物である。前に値段といふ言葉を使つたが、それはこゝに云ふ値打を金錢で見積つた言葉である。

こゝにいふ話をする時、いつでも直ぐに次のような疑問が起る。労働の分量で物の値打が極まるのなら、不器用な職人が一日掛つて拵へた品物は、器用な職人が半日掛つて拵へた同じ品物に比べて、倍の値打がある筈ではないか。成程、一應尤もな疑問です。然しこゝで労働と云ふのは、其の時、其の土地での、普通の労働、平均の労働を指すのです。例へば大正十三年の日本に於ける酒造業としては、一石の酒を作るに何程の労働を要するかといふ事が分つてゐる。労働の平均量が極まつてゐる。その平均より少なくて作る者は得をし、それより多くて作る者は損をするわけだ

が、世間に賣りだす時の値打としては、其の平均労働で極まるのである。だから、つまるところ、こゝに労働と云ふのは、労働者の銘々個々の労働を指すのでなく、當時に於ける世間並の労働を指すのである。

サアこれでいよく、労働が物の値打の源だといふ事が分つた。この値打といふ言葉を少し六かしく云へば『價值』であるが、それにつき猶すこし説明しておかねばならぬ。

鯛は安つほい魚だと目されてゐるけれども、實は鯛にもまざる營養價值があると云ふ。そんな云ひ方からすれば、石鹼には垢を落す點に價值があり、酒には人を酔はす點に價值がある。空氣には人を呼吸させる點に於いて最も大なる價值がある。そういふのは總て使用價值（即ち、人がそれを使用する時に生ずる價值）であつて、交換價值ではない。交換價值とは、物と物とを交換する時の價值であつて、それが即ちこゝで云ふ價值（即ち値打）である。鯛の營養價值（即ち使用價值）は鯛にまさるとしても、其の交換價值は遙かに鯛より低い。それはなぜかと云ふに、鯛を捕るには人間の労働を費す事が甚だ多いが、鯛は非常の多數が一時に捕れるので、一疋あたりの労働は極く僅かで済むからである。換言すれば、鯛一疋に含まれた労働量は、鯛一疋に含まれた

労働量より、遙かに少ないのである。

(一四) 利潤の出どころ

扱、労働が總て價値の源である。労働より外に價値を作り出すものはない。そこが労働者の大持てになる、根本の理由である。

然し労働者は、價値を作りだしはするけれども、それが總て自分の物になるわけではない。前に云つた通り、労働者は自分で自分の物を作るのではなく、只だ自分の腕の力(即ち労働力)を賣つてゐるのである。そして其の労働力の値段を賃金として貰ふのである。値段とは物の値打を金錢で見積つたのだと前に云つた。それを少し大かしく云へば『價格』である。そこで價格とは價値を貨幣で言ひ現はしたのだと云ふ事になる。そうすると、労働者の貰ふ賃金は、自分の労働力の價格であつて、其の價格を定めるものは労働力の價値である。然るに労働力の價値とは、労働力の中に含まれてゐる労働量である。即ち労働力を生産する爲に費された労働量である。それをモ一つ云ひかへれば、労働力を生産するに必要な材料、即ち労働者の生活に必要な衣食住の中に

含まれてゐる労働量である。前に、労働力の値段は其の生産費に依つて定まると云つたのも、同じ意味である。又、その同じ處に、労働力の生産費とは一人前の労働者を相應に生活させて行くだけの費用だと云つたのも、矢張り同じ意味である。

斯くて労働者は、自分の労働力の價格として、自分の衣食住のかつゝの費用だけに當る賃金を貰ふのだが、彼れの一日の労働、彼れの一日の働らき高、彼れの一日に作りだす價值は、それとは全く別物である。即ち労働者は、自分の賣つた價值よりも遙かに多くの新價值を作りだして、それを資本家にやるのである。

そこを資本家の側から考へて見る。資本家は工場を建て、機械を据ゑつけ、原料を買ひこみ、労働者を雇ひ入れて、或る商品を製造する。出来あがつた商品は、原料の變形したものと云つていふだらうが、その變形する爲には、労働者の労働が加はつて居り、工場と機械とが何程か消耗してゐる。そこで其の出来あがつた商品の價值を調べて見る。若し千圓の原料を費したのならば其の製品の上に千圓だけの價值が残つてゐる。工場と機械との消耗は、それ／＼計算して見れば明らかに分る筈であるから、それだけの價值が製品の上に移つたものと認めて宜しいわけである。

例へば、千圓の工場が十年持つとすれば、一年分が百圓である。そして一年に千足の靴を製造するとすれば、工場の消耗から生ずる價値の移轉は、一足十錢となるわけである。

然し右の二つの場合は、元の價値が其のまゝ製品の上に現はれるだけの事で、それに依つて資本家が利潤を得るわけに行かない。工場も機械も原料も、總て過去に於ける労働の蓄積、労働の結晶であつて其の含んでゐる労働量だけの價値を持つてゐる。そして工場と機械とが消耗し、原料が變形する間に、其の價値が新しい製品の上に移轉して行くのだが、それは只だ移轉するだけである。再現するだけである。決して利潤の源にはならない。利潤の出どころは只だ新しい労働に在る。

こゝで一つ念の爲に善く説明して置かねばならぬ事がある。資本家なり商人なりが利潤を得るのは、品物を其の價値以上に賣るからだといふ考へ方が世間にある。然し、それは無茶な話である。或る利口な資本家なり、或る狡猾な商人なりが、そういふ方法で大もうけをするといふ事は勿論あり得るだらうが、全社會の資本家なり商人なりが、總てそれでモウけるといふ事はあり得ない。總ての人は賣手であると同時に、買手である。資本家も商人も、買つては賣り、賣つては買ひしてゐるのである。總ての人が賣る時に必ず得をするとすれば、買ふ時に必ず損をする筈で、

つまり損得差引である。又、狡猾な商人の場合を考へて見ると、こゝいふ事になる。甲助といふ奴が八十圓の値打しかない酒を百圓で乙助に賣り、更に其の百圓で、百二十圓の値打のある麥を丙助から買ったとすれば、甲助は正に四十圓の利潤を得てゐる。然し此の交換の前と後とに於ける三人の所有額を調べて見るに、交換前には、甲助が八十圓の酒、乙助が百圓の金、丙助が百二十圓の麥を持つてゐた。その合計三百圓。所が交換後には、甲助が百二十圓の麥、乙助が八十圓の酒、丙助が百圓の金を持つてゐる。その合計同じく三百圓。この交換の爲に、商品の價値は一錢も増加してゐない。只だ三人の間の分配が違つただけである。だから利潤が、商品を價値以上に賣る事に依つて得られると云ふのは、全くの間違ひである。利潤は只だ、勞働力を買つて、それを使用する事に依つてのみ得られるのである。

(一五) 〇八勞働、剩餘價値

そこで資本家は、買ったビールを飲み、買ったパンを食ふと同じ様に、買った勞働力を使ふ。それが賃金を出して勞働者を雇つた者の權利である。勞働力を使ふとは、勞働者を働らかせる事

である。

そこで労働者は毎日セツセと資本家の爲に働らく。彼は資本家の爲に働らきたいのではない。彼は賃金の爲に、即ち賃金ほしさに働らいてゐる。所が、それが自然、資本家の爲になるのである。彼が働らけば働らくだけ、新しい價値を作りだす。そして其の價値は、製造された商品の中にこもつてゐる。そして其の商品は資本家の所有である。斯くて資本家は、労働者に支拂つた賃金を其の商品の價値で回収する。然し、支拂つたものを回収するだけでは、資本家は詰らないと考へる。彼は更にそれ以上の價値を作り出させようとする。

例へば、賃金を回収する爲に、六時間の労働が必要であるとすれば、資本家は更にそれ以上、八時間、十時間、或は十二時間も働らかせようとする。労働者は一日分の労働力を賣つたのであるから、賃金分だけの價値を償へばそれでいゝといふわけに行かない。八時間にせよ、十時間にせよ、或は十二時間にせよ、兎にかく一日働らかねばならぬ。假りに其の労働時間が十二時間であるとする。そうすれば、労働者は六時間分の價値をロハで資本家にやる事になる。前の六時間分に對しては賃金を受取るが、後の六時間分に對しては何んの支拂ひをも受けない。だから其の

六時間分はロハ労働である、無拂労働である。賃金を償ふだけの分は、自分の生活の爲なのだから、必要労働であるが、それ以上の分はヨケイな労働である、剩餘労働である。其の剩餘労働の作りだす價值が、謂ゆる『剩餘價值』である。

資本家は機械や原料を買ひ入れると同じように、労働力を商品として買ひ入れたが、此の労働力といふ商品には、一種特別の性質があつた。外の商品は、從來持つてゐた價值を、新しい製造品の上に移すだけの事だが、労働力といふ奴は、自分の價值を再現した以上に、更に餘計な剩餘價值を作りだす。誠に都合のいい商品である。これがあるからこそ資本家はモウかるのである。資本家はその爲にこそ労働者を雇ふのである。資本家が利潤を得ると云ふのは、即ち此の剩餘價值をせしめる事である。労働者が今の世の中で大持てに持てるのは、彼等が人善しであつて、ぬくぬくと、この剩餘價值（即ちロハ労働）を搾り取られるからである。

そこで前にも云ふ通り、資本家は出来るだけ長い時間、労働者を働らかせようとする。即ち出来るだけ多くの剩餘價值を搾り取らうとする。然し労働者の方では、餘りにそれが馬鹿くさいので、成るべくロハ労働を少なくしようとする。資本と労働とは斯様に利害が正反對をしてゐる。

労働時間の長短、賃金の大小、總てそれが、一方の得になれば一方の損になる。そこで兩方の間に烈しい争ひが起る。そしていつまで立つても其の争ひの解ける時がない。

(一六) 資本の擄取力

一體、どうして資本家はそんな都合のいい地位に立ち、どうして労働者はそんな馬鹿々々しい地位に立つてゐるのだらう。外ではない、資本家は金を持ち、土地を持ち、工場を持ち、機械を持ち、原料を持つてゐるのに、労働者は何も持たないからである。資本家は其の持つてゐる物を資本として、労働者を雇つて働かせ、労働者は其の資本にすがつて働らくより外に生活の方法が無いからである。

昔しは、労働者が(即ち職人が)自分の家の職場で、自分の所有してゐる道具で、自分の買ひ入れた原料を使つて、色々の商品を製造した時代があつた。所が、今の世の中はそれと違ふ。總ての産業が大仕掛になつて、大工場と大機械とで大製造をやる事になつてゐる。それは産業の進歩發達に相違ない。然しそれと同時に、昔しの職人が今の労働者になつた。獨立自營の職人であつ

たのが、自分の職場と離れ、自分の道具と別れ、人に雇はれて賃金を取る労働者になつた。大機械と大工場との前には、小さいな獨立自營の職人は皆な亡びてしまつた。そして、其の大機械と大工場を所有する金持が資本家になつた。

資本とは、労働者を使つて金もうけをさせる力である。金は必ずしも資本ではない。其の金でパンを買つて自分が食うた時、それは決して資本ではない。機械や原料は必ずしも資本ではない。自分の糸と、自分の機はたきとで、自分の着物を拵へて着る時、其の糸と機はたきとは決して資本ではない。原料にせよ、機械にせよ、金にせよ、それが他人を使ふ力になつた時、初めて資本といふ性質を持つのである。原料も機械も金も持たぬ労働者が働らく爲には、是非とも其の原料なり機械なり金なりの持主にすがらねばならぬ。その時、其の原料なり機械なり金なりの力が資本になるのである。そして其の資本の持主（即ち資本家）が、前に話したようなわけで、其の労働者の労働の中から利潤を得るのである。

今、世間普通に行はれてゐる言葉としては、兎かく此の資本の意味が間違へられてゐる。俺は夜店出しをやりたいたいんだけど、資本が無くて困つてるなど、いふ話がある。或は又、僕は一年

ばかり掛つてミツシ、あの事を研究して見たいんだけど、其の一年の間を食ひつなく資本が無
い、などと云ふ場合がある。そういふのは、本當の意味からすれば、決して資本ではない。そう
いふのは只、過去の勞働の貯へである。人間の生活に過去の勞働の貯へが無かつたら、それはミ
ジメなものである。過去の勞働の貯へがあるからこそ、人間の社會が動物の生活と違ふのだと云
つてもいい。動物にも多少の貯へをするにはあるが、逆も人間の貯への大きさと比べ物
にはならない。即ち人間は、家屋を持ち、道路を持ち、田畑を持ち、鐵道を持ち、船舶を持ち、
機械を持ち、道具を持ち、食物を持ち、衣服を持ち、金銀を持ち、貨幣を持ち、猶その他いろい
ろの物品を持つてゐる。そしてそれらが繼つて過去の勞働であり、蓄積された勞働であり、物體に
結晶した勞働である。然るに、其の過去の勞働が全社會の所有であつて、總ての人間が自由に使
ふ事が出来るのだつたら、何等の文句もないし而倒もないのだが、少數の人だけの手に全部それ
が所有されて、多數の人は二本の腕より外に何も持たぬと云ふ事になつて居るので、世の中が大
へん六かしいのである。即ち其の少數の人が、其の持つてゐる『過去の勞働』を『資本』にして、
他の多數の人を雇ひ、其の雇はれ人の働らきに依つて利潤を得る事になる。これが本當の『資本』

の意味である。過去の勞働を自分で使ひ、自分で費すのなら、それは決して『資本』ではなく、只だ『勞働の貯へ』であり、『蓄積された勞働』であり、『結晶した勞働』である。

だから『資本』の働らきは、過去の勞働が現在の勞働を支配する事であり、物體に結晶された勞働が生きた勞働を追ひ使ふ事である。それが即ち資本と勞働との關係であり、従つて又、資本家と勞働者との關係である。

そこで資本とは、要するに、勞働を支配する力であり、勞働を搾取する力である。即ち勞働を使つて其の中から剩餘價值(即ち利潤)を搾り取る力である。と云つて、資本家は何も法律上に不正な事をしてゐるわけではない。彼等は正當に資本を所有し、正當に勞働者を使用し、正當に商品を製造し、そして正當に利潤を得てゐる。つまり今の世の中では、資本の搾取力が正當に行はれてゐる。それが即ち『資本制度』の社會である。

但し資本制度の社會に於いて、利潤を取る者は資本家ばかりでない。大體から見れば右に話す通りであるが、右の通りにして搾り取られた剩餘價值が、まだ色々の人に分配される。即ち、資本家の外に地主があれば、其の地主は地代として、其の剩餘價值の一部分を取る。又、資本家が

銀行から金を借りれば、其の銀行は利子として、其の剩餘價値の一部分を取る。又、資本家が其の商品を商人に渡して販賣して貰ふ時、其の商人は矢張り販賣上の利潤として其の剩餘價値の一部分を取る。そこで商人、銀行家、地主をも、總て一くろめにして資本階級と見ていゝわけである。(農民の事、地主の事などは別に後の章で話す。)

斯くて今の日本の世の中は資本制度の社會である。日本の資本制度は、日清戦争、日露戦争、世界大戦争などを経て、可なりに著るしい發達を遂げてゐる。資本は非常に増大した。産業は大いに興隆した。従つて労働者の數も亦大いに増加した。然し、それは即ち、資本の支配力が増大した事、資本に支配される人民の増大した事を意味するものである。従つて労働と資本との對立、即ち労働階級と資本階級との闘争が、最も目ざましい社會の現象になつてゐる。

(一七) 階級闘争

以上、これで大體、労働者の立場が分つた。前々から話して來た上中流の青年と、労働青年との差異も、これでよく分つた。然し今一應、労働青年の目から上中流の青年を見上げて見る。

假りに矢張り、前からの話しつゝきの、同年者だけの關係として考へて見る。前に四十萬と算出した下層青年の中、新式の勞働者が其の半分(即ち二十萬)あるとする。そうすると、例へばこゝに三十歳の勞働者が二十萬人、首をあげて上中流の同年者を見あげて居る事になる。

すると、一萬人ばかりの同年者が社會の上流にズラリと並んでゐる。彼等は皆な有産階級の子弟である。そして皆な高等教育を受けた連中である。工場に行けば、工場の上段に彼等がある。會社に行けば、會社の上段に彼等がある。鐵道に行き、鑛山に行き、官廳に行けば、總てその上段に彼等がある。勿論、彼等のうしろに(まだ其の上段に)多くの有力な人達が控へてゐる。(其事はまだ後に話す。)三十歳の青年はまだ最上段の地位を占めてゐない。然し、勞働者から見あげた時、彼等は總て社會の上段に坐つてゐる。彼等は支配階級に屬してゐる。搾取階級に屬してゐる。勞働者とは全く違つた立場に立つてゐる。

次に中等教育程度の同年者が四萬人ばかりゐる。そして彼等は總て、上段者の次の段に坐つてゐる。彼等は餘り羨ましい程の地位ではないが、それで矢張り支配階級の附屬として、勞働者を見下してゐる。その裾廻りの連中は、前にも云つた通り、近來よほど無産化しかけてゐるが、

それでも矢張り労働者以上だと考へるような馬鹿が少なくない。

此の本では、初めから、總ての同年者が立身の競争をしてゐるものと考へて來た。そして其の競争が甚だ不公平で、上の方の者は自轉車に乗り、中の方の者は身輕であり、下の方の者は重い石をしよつて居ると云つて置いたが、實際、こゝまで話して來て見ると、競争どころの話ではない。上の階級と下の階級、支配する階級と支配される階級、搾り取る階級と搾り取られる階級、その二つの間には、どうしても越える事の出来ない大きな溝がある。只だ其の二つの中間に、半ばは明らかに上に屬し、半ばは稍や下に傾くといふ、中間階級があるだけの事である。

そこで労働者から見ると、彼等自身は初めから競争の埒外にはねだされ、只だ社會の下積として踏みつけられてゐるのである。然し彼等は數の多いといふ強味を持つてゐる。其の多數が團結すれば一層の強味になる。即ち彼等は其の強味を利用しかけてゐる。労働組合が續々として起り非常な力を以て發達しつゝある。賃金値上の要求、或はその値下に對する反抗、労働時間の短縮、その他、いろいろ待遇改善の要求の爲、ストライキ、サボタージュ(怠業)などいふ戦術が、資本階級に向けられてゐる。それが謂ゆる階級闘争である。

彼等は此の勞資の階級闘争に於いて、いよくますます自分の力を自覺する。資本家なり、それを保護する官憲なりが、彼等を壓迫すればするほど、彼等の憤慨は増して来る。彼等はいよくますます多數團結の必要を感じ、組織と訓練との必要を感じて来る。彼等は(前に云つた通り)中の下階級から落ちて来る有力な分子をも吸収する。彼等は又、(同じく前に云つた通り)、上中流から援助に來る義勇兵をも歓迎する。そして次第に全勞働軍の戰鬥力を強めて行く。そうする中に遂に彼等の間から、非常に有力な、非常に勇敢な、非常に卓越した多くの戰士が、頻々として輩出する。元來、優秀な素質を持つて生れて來ながら、中等高等の教育を受ける機會もなく、少年時代から勞働界に沈んでゐた或る人達が、勞働運動の勃興に新たな機會を得て、其の勞働者たる地位がモツケの幸ひとなり、其の勞働の體驗から得た反抗の氣象と、其の運動上の經驗から得た戰術上の智識とに依り、勞働運動の首領として、指導者として、先鋒として、自然に重大な任務を果す事になつて來る。

(一八) 改革運動の使命

こゝにいふ人達、即ち勞働運動の先鋒たる人達は、勞働者出身のも、或は上中流から落ちて來たり、援助に來たりしたので、矢張り皆な立身の競争をやつてゐるのだと考へる事も出來る。立身の競争上、變則な勝利を得ようとしてゐるのだとも考へられる。可なりな力量がありながら或は優秀な素質を持つてゐながら、順當に上流階級の重要な地位に立つ機會を失つたので、然らばそれに反抗する事に依つて自分の地位を作らうと云ふので、自然に勞働運動、社會運動のチャムピオンになるのだと、考へられない事もない。人間には皆な相當な野心があり、名譽心があり成功慾があるのだから、右の人達の心の中を解剖して見たなら、或はそうした氣持が無いではあるまいとも考へられる。

　　然し彼等は、それと同時に、段々と自分の重大な任務を自覺して來る。そうした個人的野心や名譽心や成功慾などいふ、ケチな氣持を外にして、勞働階級全體の運命の爲に、其の支配され搾取されてゐる地位境遇を改革する爲に、是非とも自分達が有らん限りの力を盡さねばならぬといふ責任を感じて來る。自分達は、社會の進歩に伴ふ自然の勢ひとして、そうした改革運動に一身を捧げ、立派にそれを成し遂げるといふ役目を、此の社會から負はされてゐるのだと痛切に感

じて來る。少し六かしい言葉で云へば、それが即ち自分達の社會的使命だ、歴史的使命だと悟る事になる。既にそういふ任務を負はされ、そういふ役目を仰せつかつた以上、如何なる困難、如何なる苦痛にも打勝つて進まうといふ犠牲の熱情が、彼等の胸の中に湧いて來る。そして彼等の眼中には、此の改革運動の成し遂げられた後の社會に於ける、美しい理想の光りが燦然として映つて來るので、彼等はそれに對する切ないアコガレの爲に、甘んじて其の困難苦痛に堪へ得る事になる。

こうした心持の變化は、最初は先づ(右に云ふ通り)先鋒たる人達の上のみに起るのだが、それが次第に多くの労働者の氣分となり精神となる。そこで労働軍の氣勢がますます擧り、其の實力がいよ／＼強大となる。すると資本家側では、勿論、それに對して種々様々の壓迫を加へる。労働軍はそれが爲、散々に蹴散らされる場合もある。然し、幾ら蹴散らされても亡びはしない。階級闘争は何處までも最後の解決を見るまで續いて行く。

(一九) 職人、下級店員、小商人

新式の勞働者の地位は大體これで分つたが、下層青年の中の他の分子の事を、少しばかり考へて置く必要がある。

資本と勞働との關係が今日の社會組織の中心である事、従つて資本を中心とした上流階級と、勞働を中心とした下層階級とが對立してゐる事、及びそうした階級鬭争の間に、色々な中流階級中間階級が存在して、或は上に付き、或は下に傾いてゐる事、それらは總て前に話した通りである。所で、新式勞働階級の周圍にある、下層階級の連中、即ち舊式の職人、下級の店員、小商人などいふ人達は、一體どういふ事になつてゐるのか。

先づ舊式の職人。例へば大工、指物師などがある。彼等は獨立自營でやつて來た昔しの職人の名残で、新式の勞働者とは違つた氣風を持つてゐる。實際、彼等はまだ自分の道具を持つて働らいてゐる。彼等は資本家に雇はれるのではなく、得意先を持つて働らいてゐる。彼等はまた獨立自營の面影を存してゐる。従つて彼等は、多數團結して資本階級に反抗するといふ様な、新式勞働者の態度を取る事が出來ない。彼等は孤立してゐる。戦はうにもチョツト目當がない。けれども彼等の生活は苦しい。彼等は直接に雇主から搾られてはゐないけれども、商人、金貸し、親方、

請負師などから搾られてゐる。つまり資本階級から間接に搾られてゐるか、或は新式労働者と違つた形式で搾られてゐるかである。搾られてゐる事に相違はない。そこで彼等もそうく多少の反抗運動を起しかけてゐる。大工の組合が出来かけてゐるのなどが、其の一つの現はれである。然し其の大工の組合が、親方なり請負師なりと手を切る事が出来ないで、寧ろ請負師に利用されてゐるらしいのが、即ち彼等の舊式なる所以である。然し又、そういふ組合が遠からずして、請負師に反抗する運動となり、新式労働運動の一部となるまいものでもない。現に舊式の職人中で早く目の覺めた青年は、新式の労働組合にはいつて、熱心に運動してゐる者もある。

理髮師、人力車夫などいふ職業は、矢張り舊式の職人の一種だと思つてしまつたらう。理髮師の中には自分の店を持つてゐるのと、親方に雇はれてゐるのがある。親方の中には、小さいな資本家になりかけてゐるものもある。店持の床屋が新式労働者の氣分になれないのはチヨツト無理もないが、雇はれ職人の理髮労働者は、親方に對する反抗運動として、組合でも持へる時が來そうに考へられる。親方がかりの車夫、抱え車夫なども、其の點は同じ事情である。その他の車夫君等は誰と目ざす戦闘の相手もないわけだが、矢張り自由労働者の一部として、大きな労働軍に参加す

る時が来るだらう。

次に下級店員。これには本来、中の下階級に属する連中も含まれるのだらうが、いづれにせよ新式労働者とは大ぶん違つた境遇であるけれども、追々、店員組合、事務員組合などを拵へて労働軍に参加する可能性が無いでもない。然し彼等の中の或る部分は、拔擢の功名で多少の立身をする事を目的にして、労働者氣分に成り得ないかも知れない。

それから小商人。これが難物です。彼等は兎にかく獨立自營の形式を持つてゐる。それで彼等の中、中の下階級に属する部分は勿論、それよりズツト低い地位に在る連中でも、兎かく労働者としての自覺を持たない場合が多い。彼等はまた、何かのひようしにウントもうけださうといふ夢を見てゐる。然し彼等も金貸しに責められ、問屋にはたられ、大きな同業者に追ひまくられ、逆もウダツのあがる時のない事がもう、大てい知れて來た筈である。彼等もいつかは労働軍の後援隊くらいには成りそうなものだ。

(二〇) 奴隸、百姓、労働者

現在の日本は資本制度の社會である。大きな工業の金もうけを中心にした世の中である。そこに資本と労働との對立がある。その邊の事を右の數章に話した。然しそれは、都會の經濟についての事であつて、農村の經濟は全く別です。資本制度の社會では、都會の工業が主であつて、地方の農業は従であるに相違ないが、何しろ農業は食料品の供給といふ重大な任務を帯びてゐるし、それに従事する農氏の數は非常に多いし、實際上、農村の經濟は極めて大切な問題になる。それを之から少し話して見ます。

日本でも、どこの國でも、歴史の變遷は大體おなじ事だと云へる。即ち最初に奴隸制度がある。其の制度の下では、奴隸と自由民との區別があつて、自由民の中の富者は、牛馬と同じように奴隸を飼つてゐた。其の奴隸に生産させて、其の生産物を全部取りあけるのが、其の社會の經濟であつた。國に依つては、其の奴隸の腰に鐵の鎖がついてゐた。今日の労働者はそれと違ひ、或る一人の主人に飼はれてはゐないが、實は矢張り資本階級に附屬してゐる。又、今日の労働者は、鐵の鎖をつけられてはゐないが、實は矢張り賃金の鎖に縛られてゐる。だから（前にも云つた通り）彼等は賃金奴隸とも呼ばれてゐる。

奴隸制度がすたれてから、奴隸が農奴になつた。貧しい自由民も農奴の地位に落ちた。其の社會では、上に大名小名などいふ領主があり、下に其の土地を耕す農奴があつた。農奴(即ち百姓)は奴隸と違つて、半ば自由な土着民であつたが、只だ領主の爲に、其の耕作物の一部分(或は大一部分)を貢き物(即ち年貢)として捧げ、或は自分の土地を耕作する傍ら、領主専屬の土地をもロハて耕作するのであつた。即ち例へば、百姓は毎年、其の收穫米の半分を領主に捧げるとか、或は毎月、自分の土地に半月働き、領主の土地に半月働らくとか云ふのであつた。彼等は奴隸とは違つてゐるけれども、其の働らきを搾られる事は同じであつた。此の時代の事を封建制度と云ふ。今日の勞働者は、こんな半自由の土着民とは餘ほど違つてゐるようだが、實は矢張り同じ事である。勞働者が毎日、自分の爲に六時間働らき、更に雇主の爲に六時間働らくのは、百姓が半月づゝロハ働らきをするのと同じではないか。又、勞働者が自分の賃金以上に作りだした剩餘價値を資本家に取り込まふのは、矢張り百姓の年貢と同じわけではない。

日本の徳川時代は即ち此の封建制度で、國民の全部が士農工商の四つに別たれてゐた。四つと云つても、其の初め工商は寧ろ附屬で、土農の二つが主なる國民であつた。即ち農民が米を作り、

大名武士がそれを取りあけるのであつた。所が、初め附屬であつた工商が次第に發達して大なる金力を養ひ、それが遂に新社會の中心になつた。即ち大名武士が亡びて明治の世の中になつた。明治の世の中は工商中心の社會、即ち資本制度の社會である。

然し、資本制度の社會にも農業は残つてゐる。工業商業は都會の經濟であつて、農村には矢張り百姓が働らいてゐる。そして、大名武士といふ者は亡びたけれども、それに代つて多くの百姓を搾る者が残つてゐる。即ち昔し大名武士と百姓との中間に立つてゐた、郷士とか、名主とか、庄屋とかいふ者（一口に云へば大百姓）が、地主として残つてゐる。（その外、元の大名や、新しい金持などで、地主となつてゐるものもある。）そして、都會に於いて資本家と勞働者との對立を生じたと同じ様に、農村には地主と小作人との對立を生じた。

こゝにいふ譯であるので、昔から今日まで、奴隸が引續いて存在してゐる。或は百姓となり、或は勞働者となり、名前や形は色々に變つたけれども、少數の權力者に搾られる多數の國民といふ實質には變りがない。そして今日では、新しい奴隸の勞働者と、古い奴隸の百姓とが、都會と農村とに別れて、相並んで存在してゐるのである。

(三) 農村の資本主義化

昔しは、大體に於いて、大名の城下が即ち都會であつた。大名が城を築いて武士を其の中に養つてゐると、其の周圍に工商が集まつて來て、自然にそれが都會になつた。所が今では、其の工商が都會の主人である。工商が發達して富豪となり資本家となつた。富豪資本家は即ち今日の名である。此の金力大名は城の代りに工場を建て、銀行會社を起し、大商店を作つた。斯くて金力大名の城下が非常に發達した。昔しの都市が膨脹したばかりでなく、新しい大都市が幾つも起つた。

此の發展する都市に對して、農業は昔しの儘であつた。都市には新しい工業が續々として起つてゐるのに、農村には只だ昔しの儘の農業があつた。都市が社會の中心、産業の中心、經濟の中心となるに連れて、農村は只だ都會の附屬物になつてしまつた。然し、農村の經濟狀態は決して昔のまゝではなく、資本制度の下に於ける農村として、種々なる變化を生じてゐる。

諸君は恐らく農村の資本主義化といふ言葉を聞いた事があるでせう。それは即ち、資本制度の

社會、資本主義の社會に在つては、農業も其の影響を受けて資本主義的に變化すると云ふ意味です。資本主義の工業は、大資本を以て大設備を整へ、大機械を使用し、賃金労働者を雇ひ入れて、商品の生産を大仕掛にやるのであるから、農業が資本主義的に變化すると云へば、矢張りそれに似た形にならねばならぬ筈である。即ち先づ第一に土地が少數の大地主の手に集中され、自作だの小作だのといふ者が全く無くなつて、それらの總てが賃金で働らく農業労働者となり、そこで大地主が出来るだけ大きな機械をたくさん備へつけて、それらの農業労働者を雇ひ入れて賃金を拂ひ、そして出来るだけ大仕掛に米穀などの生産をやり、そして其の收穫を全部地主が自分の物にするといふ事になる筈である。然し實際は、まだ中々容易にそこまでは行かない。只その方向に向つて進みつゝあるといふだけの事です。農村が都市の附屬になつたと云ふのも、矢張り或る程度まで資本主義化されたと云ふ意味です。

然らば現在までの間に於いて、我國の農業はどの程度まで資本主義化されてゐるか。先づそれから考へて見る。

農村の經濟は其の昔し自足經濟であつたと云はれてゐる。自足經濟とは、總ての物を自分の手

で生産して、自分の手で消費すると云ふ意味である。例へば、自分で米を作つてそれを食ひ、自分で布を織つてそれを着、自分で家を作つてそれに住むといふわけである。然し一人もしくは一家族だけで衣食住の總ての事をやるわけに行かず、もつと大ぜいの人が手分をして分業でやる事になつて來たが、それでも大體、分業は一村内(もしくは一地方内)の事であつて、其の村、其の地方を一つの單位として見れば、矢張り自分で生産して自分で消費してゐるのである。只だ其の生産物の中から、大名や領主に年貢を出すだけの事である。それが即ち自足經濟の農村である。然るに都會が次第に發達するに従ひ、賣買交換が次第に盛んになり、農村の産物が次第に商品(即ち賣り物)の性質を帯びて來た。然しそれでもまだ、農村は自然に餘つた農産物を都會に送り、その代り、都會で出来る工業品を受取るといふわけで、農村と都會との關係が都合よく助け合つて行くといふ事になつてゐた。所が、いよく資本制度が發達して來ると、農村で生産する食料が全く商品になつてしまつた。百姓が米を作るのは、初めから賣る爲めに作るといふ事になつて來た。そこで米相場といふ事が起つて來て、農業が投機事業になつてしまつた。その結果は、豊年で米はどつさり出來ても、米價が下落すれば何んの役にも立たぬと云つて、農民が豊作を喜ば

ぬといふ、變な事にさへなつて來た。つまり、農民が都會の商人の爲に利用され搾取されるのである。然し搾取するのは都會の商人ばかりではない。農村の地主が矢張り一種の商人、或は米相場をやる投機師の様なものになつて、それが小作人を搾れるだけ搾るのである。こゝういふ形勢は、徳川時代から既に發生してゐたのだが、明治以後の資本主義時代に於いて、いよゝ本物に發達したのである。

又、資本制度が發達するに連れて、農村の家内工業が亡びた。例へば、大仕掛の紡績事業が發達した爲に、農家で木綿を織る事が亡びた。印度やアメリカから安い綿花が輸入される事になつたので、綿作その者も亡びてしまつた。そして養蠶その外、今日行はれてゐる農家の副業なるものは、總て獨立の事業でなく、只だ資本家的の大工業に搾取される勞働に過ぎない。

斯くて農民は、生産者、勞働者として、地主および資本家から搾取され、壓迫されてゐるが、更に彼等は又、消費者として資本家から搾取されてゐる。農村は都會で製造される商品の販賣市場である。つまり農民は、工商業者から色々な物(衣類、日用品、肥料など)を賣りつけられて、それで又、ウンと搾られてゐるのである。猶ほ其の外に、農民は資本家から多大の資金を貸しつ

けられて、高い利子を搾り取られてゐる。

そこで之を要するに、資本制度の下に於ける貧農は、二重の搾取を受けてゐるわけである。小作人としては地主から搾取され、一般農民としては資本家から搾取されてゐる。之を別の言葉で云へば、一面には農村の内部に於て搾取され、一面には都會から搾取されるといふ事になる。そうすると自作農は、地主からは搾取されないのだから、只だ都會の資本家だけから搾取されると云ふ事になる。然し地主が必ずしも資本家と別な者でなく、地主兼資本家、地主兼銀行家である場合が多いのだから、其の見方からすると、自作農も矢張り農村の内部で搾取されてゐる事になる。だから、つまり、貧農たる者は、自作でも、小作でも、總て有らゆる方面に於いて農村資本主義化の犠牲になつてゐるのである。

(三) 小作、自作、大地主

斯様にして農村は次第に、大地主と小作人との二階級に分れつゝある。先づ左の表を見よ。

年 度

自作農

小作農

自作兼小作

大正元年	一、八二二、二一二	一、五〇五、九三八	二、一九二、八四四
同 二年	一、八〇五、〇五九	一、五二七、七四二	二、一九四、三八七
同 三年	一、七九〇、二〇〇	一、五二八、〇一三	二、二二一、〇一三
同 四年	一、七七九、〇五七	一、五二〇、四二三	二、二二五、五七八
同 五年	一、七五七、一六〇	一、五三二、三八五	二、二五二、三七九
同 六年	一、七五五、二〇三	一、四五一、四〇八	二、二五五、〇四七
同 七年	一、七五六、六二九	一、五五八、〇五四	二、二四六、三六一
同 八年	一、七六〇、二〇九	一、五五三、五二四	二、二五二、六六八
同 九年	一、七三二、二九二	一、五六六、〇四四	二、二六四、七六一

此の表を平均して見ると、毎年、自作農は七八千戸ばかり減少し、小作農は五六千戸ばかり増加し、自作兼小作は一萬戸近くも増加してゐる。大正九年以後に於いては、此の傾向が一層いぢるしくなつてゐると云ふ。これはつまり、自作農が段々と自作兼小作に落ち、自作兼小作が純小作に落ちて行く事を示してゐる。然るに、一方に於いては、大地主の戸數がメソメソ増加して

る。即ち左表の如し。

年 度	十町以上	五十町以上
大正元年	四一、二四九	二、九三二
同 二 年	四〇、七六二	二、九六三
同 三 年	四一、四二八	二、三九九
同 四 年	四〇、九九八	三、三〇七
同 五 年	四一、三八二	三、四八二
同 六 年	四二、六〇一	三、四九五
同 七 年	四三、九一三	三、五八八
同 八 年	四六、〇六二	四、二二八
同 九 年	四七、〇四八	四、二五一

此の表で見ると、大地主といふ中でも、五十町以下のは増加率が少なく、五十町以上のが著るしく増加してゐる。土地の集中が可なり烈しく行はれてゐる事がこれで善く分る。要するに、

大農はますます大農となり、小農はますます小農となるのが、一般の傾向なのである。

次に農家の負債の統計を見るに、大正三年に三億五千餘萬圓であつたのが、大正九年には十億圓以上に登つてゐる。即ち七年間に借金が三倍にふえてゐる。そしてこれは勿論、九歩九厘まで自作農と小作農との借金である。彼等の農業が如何に困難であるかと、これで善く察しられる。自作が小作に落ちて行くのも、皆この借金の結果である。

斯く農村の貧民が困難に沈んで行く間に、人口は遠慮なく増加する。貧民は村を出るより外はない。そこで或者は海外に出稼したりするが、大部分の者は都會の労働者になる。都會では大工業が段々發達して多數の労働者を必要としてゐる折柄だから、丁度それを歓迎する。其の結果は、農村で増加するより以上の人口が農村を去り、都會で必要とするより以上の人口が都會に集まる。都會では失業者が夥だしくなり、農村では人力が不足する事になる。現に近來では、農村の戸數が次第に減少し、荒地が次第に多くなりつゝある。

昔シイギリスでは、毛織事業が盛んになりかけた時、農村の大地主が耕地をつぶして牧場を作り、小作人を追ひだして其の跡に羊を飼つた。それで農民は土地を離れて都會に出で、或は乞食

になり、或は浮浪人になつた。すると、都會の紡績者などは、丁度それを待ち受けてゐて、工場に連れて行つて、安い賃金で働らかせた。日本の事情はそれと少し違つてゐるけれども、それでも矢張り、土地から離された農村のあふれ者を、都會の工業家が引取つて搾取するといふ成行は、善く似てゐる。

兎にかく、こんなわけあひで、都會が膨脹し繁昌するにつれて、農村は寂れ衰へて行くのである。

(三) 農業と工業

右の通り、農村の疲弊は大體の勢ひであるが、然し又、一面に於いては、資本制度の發達につれて、多少一時は農村の賑ふべき理由もある。都會が膨脹して食料品の需要が増大すれば、食料品の價格は自然騰貴するから、それだけ農村は賑ふ筈である。但し、農村と云つても、それは主として中農以上の事であつて、食農の疲弊がそれで救はれるわけではない。けれども、小作自作の食農と雖も、米價が高ければ幾分かはラクになる筈であり、又工業が繁昌すれば、農村を出

て賃金勞働者になるといふ方法もあり、又賃金勞働者になつてしまはなくても、折々賃金勞働で小使取をするといふ多少の抜道もあるので、つまり幾分か、資本制度發達のお蔭を蒙るわけである。それで農村が疲弊すると云ひながら、一面にはまだ容易に最後の没落までは到達しなかつたのである。

然し、そういふ好都合な狀況が永くは續かない。内國米の生産が不足すれば、外國米がドシドシ輸入される。そうすればズン／＼米價は下落する。そこで輸入米に關稅を掛ける事になつた。これは明かに米價の下落を拒ぐ方法であつて、農民(殊に地主)を保護する政策であつた。若しそれでも米價が餘りに下落する場合には、政府は特に買上米をして、米價の釣上を計つたりした。然しそれにも限度があつて、そう／＼無理に米價を釣り上げるわけに行かない。米價が高ければ勞働賃金が従つて高くなるので、それでは都會の工商業家が困る。政府や政黨としては、それにも遠慮をしなければならぬので、農民ばかりを保護するわけには行かない。そこでいよいよ農民が立ち行きにくくなつて來た。自作や小作が困るはかりでなく、地主の懷も大變に割が悪くなつて來た。銀行家や工商業家の懷に入れる利潤に比べると、地主の利潤は甚だ少なくて詰らない

といふ事になつて來た。

そこに世界戦争が起つた。農産物は一齊に暴騰した。とう／＼一方には米騒動まで引き起したが、農村はそれが爲め大景氣になつた。中農、小農までが相場をやつたり、株を買つたりする程の有頂天になつた。然し其の暖かい夢は、戦争が終ると共に忽ちにして覺めはてた。そして元來の農村疲弊が一層痛切に感じられて來た。暖かつたあとの冷たさは、一層冷たく感じられる筈である。

殊に戦争中に大發展をした工商業が、もはやいよく農業を道連にする事を拒絶しだした。資本制度の初期の發達時代に在つては、工商業は主として内地を販路にしてゐた。其の間は、工商業が農業と相並んで搾取の道連になつてゐた。即ち農業の方で、外國米に輸入税をかけて貰つて、米價を高くして多大の利潤を搾り取れば、工商業の方でも矢張り、輸入の工業品に税をかけて貰つて、それで外國品との競争を拒ぎ、そして自分の高い品物を内地に賣りつけて、それで多大の利潤を搾り取つてゐた。所が、資本制度が更に發達して、商品の販路を主として外國に求める事になると、關税は何んの役にも立たない。實際、安い品を輸出するより外に勝利の道はない。日

本では初め労働者の賃金が安かつたので、それで外國品と競争する事が出来たのだが、近來のよ
うに賃金が高くなつて來ては、生産費が掛りすぎて外國品に壓倒される。然らば労働者の賃金は
どうして高くなつたかと云ふに、主として米價が高いからである。そこで工商業と農業との衝突
が始まつた。工商業の資本家としては、外國米の輸入税などを撤廢して、安い米を労働者に供給
したい。そして賃金を安くして、生産費の低い商品を生産したい。そして外國品と競争して、外
國市場に販路を廣げたいのである。

昔しイギリスに穀物條例廢止運動といふ有名な大運動の起つた事がある。穀物條例とは、穀物
の輸入に對して關稅を掛ける事を規定した法律で、つまり貴族の大地主を保護して、穀物の價を
高くさせたものである。然るに、新たに勃興した工商資本家としては、労働者の賃金を安くする
爲に是非とも穀物の價を安くしたい。それには穀物に對する輸入税を無くするより外はない。そ
こで穀物條例廢止運動が盛んに起つて來た。所が、其の運動者の絶叫したモットーを聞くと、曰
く、我々は労働者に安價な食料を供給しようとする。曰く、關稅を以て人爲的に穀價を高くする
は食民を苦しめる非人道な惡法である。如何にも聞えがよい。そこで此の自由貿易運動のチャン

ピオンであつた所の、コブデンだのブライトだのといふ、ちやきくのブルジョア政治家は、世にも稀なる仁人義士の様に祭りあげられた。日本で今丁度その時代に到達してゐる。實業家として紡績家として有名な武藤山治君が、先頃から實業同志會といふ政黨を組織して、關稅撤廢などを叫んでゐるのは、正にコブデン、ブライトに比すべき仁人義士の格である。

こゝにいふ形勢の間に、農村は(前に云ふ通り)戰時中に於ける好景氣の反動として、甚だしい不景氣に落ち入つた。米價は、消費者の目から見れば、高いけれども、農民の目から見れば、他の諸物價との比較上、甚だ安い。政府が買上だの何だのと多少の世話はしてくれるけれども、目に立つ程の効果はない。そこで農村が遣りきれないでモガキだした。其モガキを全體から見ると、都會に對する農村のモガキ、即ち工商業に對する農業のモガキであるが、其の内面に立入つて見ると、資本家に對する地主のモガキと、地主に對する小作人のモガキと、二つのモガキがある。

(四二) 地主の煩悶、小作の活動

地主としては、從來久しく自分の武器として政黨を持つて居るのだから、それを使つて出来る

がけ自分の利益を盛り返さうと勉めた。米價の釣上、關稅の維持、地租の輕減、地租の委讓など、謂ゆる農村保護の政策は色々ある。然るに、從來の政黨は、政友會にしても、憲政會にしても、地主の利益と資本家の利益とを一くろめにして代表してゐるのだから、斯様に農業と工商業とが衝突する段になると、思ひ切つてどちらの味方をするわけにも行かない。彼等は一面に於いて農民黨であるのだから、頻りに農村振興を唱へ、出来るだけ農村の利益を計らうとするのだけれども、さればと云つて、資本家を敵に廻してまで、徹底的に地主を保護するわけに行かない。彼等は又一面に於いて資本家黨であるのだから、頻りに産業の興隆、貿易の發展を計つてゐるのだが、さればと云つて、地主を敵に廻して、關稅を撤廢したりする所までは行き得ない。

そこで純粹の商工黨が組織された事は前に記す通りで、彼等は頭から地主の利益を無視して、大膽に資本家の利益を主張してゐる。そこで地主側では又、從來の政黨にばかり頼つてゐられないので、新たに純粹の農民黨(實は地主黨)を作らうとしてゐる。彼等は工商業に對する農業の利益を計ると稱して、農村を一體の物に考へてゐる。或はそう考へさせようとしてゐる。即ち地主も自作も小作も、皆な合併して一つの敵に當るべきだとしてゐる。然し小作人としては、そんな

事に胡麻化されない。彼等は、地主が資本家と對抗してゐる時、其の背後を衝きにかゝつた。

小作人としては、都會の工業から搾られるよりも、地主から搾られるのが直接であり多大である。現に彼等は、自分の作つた米の半分、若しくはそれ以上を地主に取られてゐる。何んと考へても餘りに馬鹿々々しい。米價を少々くらい高くして貰ふよりも、その外、如何なる救済策を講じて貰ふよりも、其の年貢米を出さぬ事にするのが一番の得であり、一番の早道である。そこで彼等は先づそれに取り掛つた。そこで小作争議が頻々として勃發した。

一體、百姓は牛の様にのろい。百姓と胡麻は搾るほど出ると云はれた様に、昔しからずいぶんひどく搾られてゐる。百姓は死なせぬ様、生かさぬ様、といふ有名な武家政治の諺があるほど、ずいぶんひどく馬鹿にされてゐた。然し、いよ／＼上の者の無理がかさなつて、いよ／＼堪へきれないほど苦しくなつて來れば、彼等と雖も遂に竹槍席旗の百姓一揆を起した前例がある。牛にも角のある事を思ひ知らせる場合があるのだ。それで先年來、工業地に於いて盛んに勞働運動が起り、勞働者が資本家に反抗しだした時でも、牛のような農村の小作人等は、まだ永いあいだ知らん顔をしてゐた。けれども、世界戦争の後になつて、いよ／＼彼等の苦しみがドン底まで突き

つめて來た時、その時はじめて彼等の目の中に、ヨーロッパの色々な面白い有様や、都會の勞働者の勇ましい運動振が映つて來た。そこで彼等もとう／＼遣りだした。小作爭議が頻々として勃發し、小作組合が續々として組織された。農民運動と勞働運動とが相並んで、一對のプロレタリア運動になつて來た。

(二五) 富農對貧農の戰

こゝで又例の如く、各階級それ／＼の青年の立場を少し考へて見る。

大地主の青年達は大體に於いて高等教育を受けてゐるだらう。彼等の或者は社會各方面の種々なる職業に於いて、相當の地位を占めてゐるだらう。又彼等の或者は、地方の有志家として、政黨員として、或は種々の公吏や議員として、相當有力な地位を占めてゐるだらう。その外、只ぶら／＼して遊んでゐるものもあるだらう。この階級に屬するものが約五萬戸ある。

小地主(五町内外と云つた様な處)の青年は極めて難儀な立場に立つてゐるだらう。彼等は多分、中學教育を受けてゐるだらう。二男三男以下は恐らく總て村を離れてゐるだらう。長男でも、親

の達者なものは、恐らく何處かに出てゐるだらう。そして何か下廻りの役を務めてゐるだらう。それらは先づそれでいゝとして、親の跡を繼いだ者、若しくは親の手傳をしてゐる者がみじめだ。彼等には多少の體面があるだらう。自作小作と同じ様に働らく事も出来ないし、さりとて地主らしい眞似も出来ないだらう。彼等は中流階級の誇りを持つて、それが爲に苦しみながら、猶いつまでもそれを棄て得ないで、徒らにブラ／＼してゐるだらう。そして結局は、破産して逃亡するくらいが落だらう。そうすれば、其の土地が自然、大地主に兼併されるだらう。統計で見ると、此の階級は漸次に減少しつゝある。

自作農の青年中には、中學校を卒業した者もあるだらうし、卒業してゐない者も多いだらう。彼等の或者は矢張り村を離れて種々の下廻り職業に就いてゐるだらう。下廻りの下廻りくらない處が多いかも知れない。外國や植民地に出稼した者も少なくないだらう。都會の労働者になつた者もすいぶんあるだらう。彼等の中、村に残つてゐる者は、毎日毎晩セツセと働らいて、そして借金ばかり、かさませてゐるだらう。彼等は小作のように、年貢米を取られるといふ事はないが、租税の負擔は地主に比べてズツト割が重い。彼等は自分の持地を少しづつ手放して行くより外に

仕方がない。そこで彼等の或者は、年々ジリ／＼と小作に落ちて行く事になる。この階級に屬する者が百七八十萬戸あつて、漸次に減少しつゝある事は前の表に示す通りである。

そこで自作兼小作が年々著るしく増加してゐる。この階級が二百二十三十萬戸ある。こゝの青年中にも、出稼した者や勞働者になつた者がすいぶん多いだらう。そして村に残つた連中は、恐らく小作運動の中堅になつてゐるだらう。この連中は、さすがに純小作よりは智識もあり氣力もあるだらう。

純小作も矢張り年々少しづゝ増加してゐる。自作兼小作から落ちて來るものがあるのだ。この階級が今、百五六十萬戸ある。こゝの青年中にも、出稼した者や勞働者になつた者の多い事は勿論だらう。村に残つてゐる者でも、一時的に賃金勞働をやつてゐる者もあるだらう。こゝの青年連には、失敬な言分だけれども、すいぶん無智な人が多いだらう。

扱、こゝう並べて見た所で、大地主と小作とがハツキリ對立する。前者は五萬戸であり、後者は四百萬戸に近い。その中間に百五六十萬戸の自作と小地主とがある。然し其の中で姑らく小地主を別にして考へると、小作と自作と兼作とは、貧農といふ一階級と見る事が出来る。自作の中に

は、小作と同じ色別に入れられる事を厭がる人もあるだらうが、現に彼等は年々續々として小作に落ちつゝある。若し彼等が明日の運命を考へるならば、小作以上といふ自惚は持てない筈である。そこで彼等の中、目先の早い人達は、既に全く小作の立場に立つて物事を考へてゐる。すると、地主五萬戸と、貧農五百萬戸といふ對立になつて來る。一對百の割合である。青年の數もザツトその割合になつてゐる筈である。即ち百人の青年の中、九十九人が貧農の子で、只つた一人だけが大地主の子だといふ事になる。

斯くて地主||對||小作人と云ふばかりでなく、富農—對—貧農といふ、一人||對||九十九人の戰ひになる。富農側では、青年はまだ實權を握る地位に立つてゐないだらうが、貧農側では青年が中心人物だらう。尤も、勞働運動が殆んど青年ばかりの働らきであるのとは違つて、農民運動には可なりに中年老年の勢力が強いだらう。然しそれも矢張り遠からずして、青年の勢力を中心とする運動になるだらう。少なくとも、青年が智識の源、氣力の源となる事は無論だらう。要するに貧農の青年が、其の多數の力を以て、將來に於ける農村の運命を決する事になるのである。

然し富農側では、都會||對||農村、商業||對||農業といふ立場からして、貧農を味方につけよう

といふ計略を圖らしてゐる事は、前に記す通りである。そして恐らく今の所、小地主がそれに釣られるであらうし、自作の中にもそれに胡麻化される者が多いだらうが、それも矢張り遠からずして、富農―對―貧農といふ立場に歸着するだらう。

又、一時の現象として斯ういふ事もあり得る。地主と資本家とが衝突して、商工黨と農民黨との對立になりそうな形勢も見えてゐるのだから、貧農が富農と對抗する策略上、暫らく資本家と提携する事が無いとは限らない。又、資本家側としても、地主と對抗する策略上、貧農を味方に引入れようと勉める事もあるだらう。そこで商工黨、若しくはそれに類似した様な、稍や進歩的なブルジョア政黨が、貧農を抱きこもうとする運動が起るかも知れない。然し、結局の所、地主と資本家と同じ有産階級として、(内部では互ひに利益の奪ひ合ひをやりながら)、團結して無産階級を抑へつけにかゝる事は明白なのだから、貧農と労働者と同じ無産階級として、直接に提携せねばならぬ事も亦極めて明白である。農民は自作でも小作でも、他人に雇はれて賃金を取るのではなく、自分が獨立して農業を經營するのだから、彼等は労働者でなくて一個の企業者である、なご、云つて貧農を労働者から遠ざけようとする議論がある。然し、何と云つても、貧農が労働者

(或はそれ以下)であり、少なくとも半プロレタリアである事は争はれない。貧農と労働者は搾られ兄弟である。従つて彼等が、反抗の兄弟でなくてどうするものか。

斯くて、労働青年の間に労働運動の有力な首領が續出すると同じ様に、貧農青年の間からも、矢張り有力な指導者が多數に現はれて来るだらう。場合に依つては、地主側の陣営内から貧農側に來り投ずる者も無いとは限らない。又謂ゆる智識階級の社會運動者の間から、種々なる援兵を送つて來る事もあるだらう。そして現在では無智なと云はれる、多數の小作人達も、遂には目がさめて來て、組合の組織もいよく強大になつて來ると、そこに戦鬪の希望が生じ、熱情が湧き、遂に農村改革の理想も生じて來るだらう。

(二六) 農村改革の理想

然らば其の農村改革の理想とは、一體どんなものかと云ふ疑問が出る。私は今、究極の疑問に答へる事は出來ない。只だ現在の有様から推して、考へられる所まで考へて見る。

農村の形勢が前記の通りになつて來たので、差當り色々な改革案が提出されてゐる。第一には

地主側からの土地分譲案がある。これは小作争議を持ってあました地主が、年賦で土地を小作人に賣りつけようとする方法である。小作人の中には、どうでもして自作になりたいと考へ、自作になる事を天にでも登る様に嬉しがる人達もあつたらしいので、この『分譲』といふ美名に釣られる者が無いでも無いらしい。然し、普通の小作料すら拂へないのに、其うへに土地買入代の年賦を拂つて行く事の出来る筈がない。

第二には、政府筋でやりかけてゐる自作創成案がある。然しこれも大體、分譲案と同じ事で、小作人が其の負擔に堪へられない。低利の金を貸して長期の年賦で返済させると云へばチョット聞えはいゝが、低利と云つても七歩や八歩は取られるのだから、矢張り逆も拂ひきれない。若しそれが拂ひきれ程なら、現在の自作が困りはしない筈である。現在、多くの自作が次第に借金の淵に沈んで、遂に小作に落ちて往くのを見れば、小作を自作に引上げて、それに利子を拂はせるといふ算段は大きな無理である。又假りにそこには無理がないとしても、政府が年々何百萬圓づゝかの豫算で此の自作創成案を實行して行くと、三百年かの後に全國の小作が總て自作になる筈だそうで、誠に氣の永い話です。

第三には土地國有案がある。これはすいぶん思ひ切つた方案の様に聞える。社會主義者などの主張してゐる事を其まゝ實行しようとするかの如くにも考へられる。所が、内實は決してそんなわけでない。地主としては、小作争議がこれ以上面倒にならない前に、早く土地を手放したいのである。つまり可なりの値段で土地を國家に賣りつけ、今までの小作料を公債の利子として取りたいのである。一方には又、工商業者の側からの米專賣案もある。これは米價を安くしようとする算段である。いづれにしても、貧農の爲になる改革案ではない。

そこで要するに、今の所では、物の役に立つ改革案は無いといふ事になる。そして地主と小作との争ひは荒れ次第に荒れてゐる。政府は小作争議調停法を拵へたけれども、そんな調停で争議の根本が解決される筈がない。現に小作の方で地主いぢめの爲に土地を返還してゐる所もあり、或は又、地主の方から小作いぢめの爲にドシ／＼土地を取返してゐる所もあり、それらの結果として、今までの米麥の耕作地が竹藪や桐畑に變じてゐる處もある。又、地主が大いに憤慨して、種々の新機械を設備して、賃金労働者を雇つて米作をやりだした處もあるそうだが、それも今の所では、まだ逆も旨く行かないらしい。結局の處、これがどんな事に歸着するものか、殆んど見

當がつかない。

有島武郎氏は有名な人道主義の文士で、親ゆづりの田畑を數百町歩、北海道に持つてゐるが、そんな物を持つてゐて、それから小作料を取つたりする事が不愉快になつたと云ふので、ツイ先年全く其の所有權を放棄してしまつた。そして其の跡には從來の小作人の組合を拵へさせて、其の組合に所有權を移し、共同經營をさせる事にした。其の組合が其まゝで旨く發達するかどうかは疑問だが、兎にかく此の土地放棄事件は何かを暗示するものとして、多くの人の心を強く打つた。小作爭議が様々にもつれあつて、いよく行詰りに達した其の末は、何等かの方法、何等かの形式に於ける『放棄』になりはしないだらうか。そんな事がボンヤリと考へられる。

何しろ地主といふ者が、どうかして無くなる時がありそうに考へられる。そうして、其あとに、一村の農民が總て組合の様なものを作るかどうかして、いろ／＼新發明の大機械を應用したりして、謂ゆる電化などいふ事も次第に實行したりして、大仕掛な共同耕作をやると云ふ様な時節が、いつかは來そうにも考へられる。然しそんな事になるまでには、都會との關係、工商業との關係も、どうか變化せずには居ないだらうし、それには一般の勞働運動、社會運動の行きつく

所も考へて見なくてはならぬ事になるが、そこまでは今チヨット分りかねる。

二七 兵役の事

以上、大體、男の一生の第四期、即ち廿歳から卅歳までぐらいの青年時代について、それ／＼の階級、それ／＼の地位に於ける、一般生活上の問題、即ち主として經濟上の問題を考へて見た。然しまだ、此の時代に於いて總ての青年がブツつかる所の大切な問題が、三個條ばかり残つてゐる。兵役の事、結婚の事、親兄弟との間柄がそれです。先づ兵役の事。

青年の身に取つて、兵役は第一最初の大事件です。ヤット一人前の男に成つて、これからミツシリ働かうと思つてゐると、満廿歳、徴兵適齡といふ事になる。總ての事をウツちやつて置いて、何んでもかでも二年の勤めをして來なければならぬ。然しそれが國家を護るお役目で、國民一般の義務であるとするれば、迷惑だの、厄介だのと考へるは飛んでもない大間違で、苟くも青年たるもの、只だ喜び勇んで此の名譽あり光榮ある兵役の服務を果すべきである。それは申すまでもない事、無論の事、當り前の事、當然の事である。

昔し徴兵制度が初めて定められた時、兵役は血税だと云ふ言葉があつたので、それが大變な誤解を興へて、處々に騒動の起つた事がある。血税と云ふのは、米や金を税として取り立てる様に、人間の生血を税として搾り取るのだらうと考へて、そんな無茶な事があるものではないと云ふので、舊弊すぎの保守黨が新制度に反對したのである。勿論それは根もない誤解で、舊弊連の無理解、滑稽も亦た極まれりであるが、然し二年なり三年なり、若さかりの青年、働きさかりの青年が、其のからだを引き上げて行かれるのは、成るほど一種の税の様なものであつて、勿論それが國民の當然の義務には相違ないが、一家の經濟、一身の始末から考へると、すいぶん困難な事情があるに相違ない。

昔しは武士といふものがあつて、それが戦争の事を専門に扱つてゐた。農、工、商、一般の人民は、そんな高貴な事業にたづさわる光榮を持たなかつた。それが今日では、勞働者でも、水呑百姓でも、皆な齊しく軍人になれるのだから、深くそれを光榮と感ずべきわけである。然し、昔の武士は、大なり小なり總て祿扶持を主君から頂戴して、一身一家の生活を保證されてゐた。今の軍人にも若しそれと同じ様な事があつたら、など、考へるのは、それは時勢の差異を知らぬ

不心得者である。現に今日でも、將校下士官にはそれ／＼相當の給料が與へられて、軍人としての地位名譽が保護されてある。兵卒は僅が二年かそこらの服役に過ぎないのだから、その邊の事は辛抱するより外はない事になつてゐる。

それで軍事の當局に於いても、よく／＼困難な事情のある者に對しては、特別な處置をしないと
いふ方法も立て、無いではない。現に此ごろ新聞などに書いてある話に依れば、兵隊さんの中に、
日曜毎に自分の宅に歸つて、セツセと家業に働らいてゐるのがある。一週間に一度、外の人の休
息してゐる時に、一人だけは働らいて親兄弟の生活を助けるとは、何たる奇つた殊勝な事であら
うか。又、兵役といふ大切な國家のお勤めをしてゐる人に、まだ其の上に、そんな事までさせね
ばならぬかと思ふと、ほんとに涙の出るほど氣の毒になるではありませんか。そこで其の人に對
しては、特に除隊にする様、目下その筋で詮議中だと新聞には書いてあつた。又、私が活動寫眞
じ見た話ですが、或る百姓出の兵隊さんが、自分の宅には年寄と女手ばかりで、田植が出來ぬと
云つて、ひどく心配して沈んでゐたので、仲間の兵隊さん達が氣の毒がつて、或る日曜日に、大
ぜいで出かけて行つて、皆で一緒に田植をしてやつた。これは近頃の美談だとして、大評判にな

つてゐるのだそうさ。

成るほど、こんな話を聞くと、陸軍も大へんサバケがよくなつた、よくそれだけ思ひやりのある計らひをしてくれると、大ぶ感心する人達もある。然し又一方では、せめてそれ位の事をしないで、世間一般が承知しなくなつたのだ。幾ら政府でも、幾ら陸軍でも、そうく無理な事はかり押しつけては居られなくなつたのだと、そんな風に批評してゐる人達もある。それはいづれにしても、喜んで兵役に服しながら、然し實際には非常に困つてゐる人のすいぶん多い事は確かである。そして幾分なりそれを緩和する爲、多少の方法が講じられてゐる事は確かである。けれども、日曜のたびに、そこでもこゝでも、日本全國を通じて、軍隊で田植をするわけには行かない。又、親兄弟の生活の助けをする必要のある者を、片はしから一々除隊にしてゐては、兵營はカヲツポになつてしまふかも知れない。だから緩和する方法と云つても、ほんとに『幾分』の事であつて、全體から見ると氣休めくらいに過ぎない。

若しそつといふのに對して一々遠慮をするとか、保護を加へるとかする位なら、いつそ初から總ての兵卒に相當の給料を支拂へばいゝ筈である。然しそんな事は、國家の財政上、到底許さるべ

きでない。だから其の邊は(前に云つた通り)總て辛抱するより外はない事になつてゐる。

そこで兵役に服する多くの青年の中には、すいぶん不平不満を持つ者が出来るらしい。兵役その者に對しての不平などは勿論ない筈だが、自分達はこうして一身を投げだして國家に奉公してゐるのに、そしてそれを名譽であり光榮であるとして居るのに、世間の金持はナゼもつと澤山、その持金を投げだして奉公しないのか。そしてそれを大いなる名譽とし、大いなる光榮としないのか。財産の幾分を投げだすくらいな事は、身體からだを何年間もソツクリ投げだすのに比べると、話にならないほどラクな事ではないか。若し又、兵士が戰死する場合を考へるなら、金持連は財産の全部を投げだしてもいゝわけではないか。若しこんな不平が多くの青年の胸に宿るとしたら、どうだらう。それはヒガんだ考へ方だ、とばかり叱りつけて居られるだらうか。財産の所有權は神聖であるから濫りに取り立てるわけに行くものでないと云つて聞かせて、それで皆が直ぐに得心するだらうか。

それに又、こゝういふ不平があるかも知れない。兵役は國民の名譽ある義務だから、それに對しては固より不平も苦情もないが、それならばナゼ金持の息子さん達も貧乏人の子供等と同じ様に

取られないのか。

そんな馬鹿な事を云ふものではない。金持の息子さんだからと云つて、それ故に兵役を免除するの何んのといふ事は決してない。お上のする事に、そんな不公平は決してない。成るほど、一應は其の通りです。けれども、實際上、金持の息子で普通の兵卒になつてゐるのは殆んどない。金持の息子、——金持と云ふほどでなくても、可なりに高い身分の人の息子——が徴兵適齢に達した頃には、彼等は大抵、大學か専門學校か、或は其の豫備校かにはいつてゐる。それで無ければ陸軍士官學校か、海軍兵學校かにはいつてゐる。それで無ければ外國に飛んで行つてゐる。だから彼等の中、大部分は徴兵を猶豫され、一部分は陸海軍の將校になる。

尤も、猶豫は免除でない。彼等は學校を卒業してから取られるのだから、別だん不公平ではないといふ理屈もつけられる。然し彼等に限つてなぜ猶豫といふ事があるのか。それは、其の人達が皆な國家に有用な學術技藝を修めつゝあるからだと云ふ。そんなら俺達も國家に有用な學術技藝が修めたいと、外の連中は云ひだすだらう。それが修めたくても修められないで直ぐに徴兵される者と、ゆる／＼それを修めて猶豫される者との差別は何から生ずるのか。云ふまでもなく、

金のある者と、無い者との違ひだ。現に餘り評判の善くもない私立の大學などが繁昌するのは、全く徴兵よけの爲だと云はれてゐる位ではないか。そうすると矢張り、あんまり公平ではない事になる。

然しそれはまだいゝとして、いよゝ學校卒業後はどうだ。五年も七年も猶豫されてゐる間には、適齡當時とは違つて、身體に申分の出来る者がすいぶん多い。その結果、自然、兵役を免除された事になるのも少くない。又、そんな故障もなく入營するとしても、一年志願といふ特典がある。何程か金を出しさへすれば、服役が一年で済まされる。如何にも金の世中だといふ感じが強くなる。つまり金持は、何のかのと云つて、殆んど全く兵役を逃れてゐる形である。如何なお人善しの貧乏人の子弟でも、少しくらい不平を抱くに無理はないわけになる。

然しそれもまだ我慢するとして、軍人は戦争に行けば負傷したり戦死したりするが、其のあとが又問題になる。負傷その者、戦死その者は、決して問題とするわけに行かない。どうせ戦争に行つた以上、それは覺悟の前である筈だ。又、將校の命は何千圓、兵卒の命は何百圓と云つた様に、命を金に替へて多いの少いのと勘定したりするのは、誰しも不愉快の至りである。けれども、

國家の爲に名譽の戦死を遂げた忠勇な兵士の親などが、食ふ食はずで居るのを見せられたりすると、實に堪らない氣持がする。又、手足を無くしたり、目を悪くしたりしてゐる不自由な癩兵が、僅かな年金だけでは食へないで、乞食みたいなザマをしてゐるのに出くわしたりすると、これがまた見て居られない氣持になる。これらも國家の財政上、どうにも仕方のない事だらうと、萬々その邊は推察するとしても、戰爭を種にしてウント金もうけをしたりする奴があり、政府の役人やエライ軍人達も、そんな商賣人と仲善しでゐる場合が無いでもないと聞かされたりすると、何が何だかサツパリ譯がわからなくなつて來る。

それからまだこんな話もある。先年シベリヤに出征してゐた或る兵士の話に、敵のバルチザンか何かゞ攻め寄せて來た時、我々の一隊は日本の領事館と有名な大富豪のXX商會とを防衛した。領事館を防衛するのは善く分つてゐる。又、XX商會も日本人の經營であるから、日本人たる同胞を保護するのに不思議はない。然し、それが大富豪であるだけに、少し變な氣持がした。我々がこうしてシベリヤの雪の中まで出征するのは、あゝした大富豪がそこでポロイ金もうけをするのを保護する爲なのだらうかと云つた様な疑念を、ツイ起したりする不心得な奴等もあつた。そ

んな疑念を起したりするのは、もちろん大間違に相違ないが、然し其の大間違の料見を持つ奴等が幾らかあるといふ事だけは確かであつて、誠に困つた次第である。

まだこんな話もある。或る兵士は何處かの鑛山か何かのストライキの時、その鎮撫に派遣されて變な氣持がした。國家の爲に外國の敵と戦ふか、或は國內の謀叛人しはんじんを叩きつけるかするのが、軍人の務めだと信じてゐるのに、これでは、坑夫とか労働者とか云ふ人達を相手にして、鑛山の持主を保護する爲に使はれてゐるわけではないかと云つた様な氣持がした。これも勿論、其の兵士の大きな考へ違ひであつて、そんな場合、政府が慥と坑夫を敵にする筈もなく、特に鑛山主を保護する筈もない。そして實際、坑夫達のストライキが謀叛らしく見えたからの事だらう。若しそうとすれば、ストライキに軍隊を出す事も止むを得ないわけになる。だから、右の兵士の云ふ事は天で取るに足らぬ話だと云ふ事にもなるが、然し其の兵士として見れば、坑夫の中に自分の親や兄弟が交つて居たりすると、それがストライキをやつたからと云つて、直ぐに謀叛人だとは考へられないだらうし、従つて『變な氣持』がするのは實際また止むを得ないかも知れない。

こんな様な話をいろ／＼聞かされたりすると、兵隊に行く青年の心の中には、すいぶん種々な

疑問が湧いて来るだらうと想像される。何とかして、雪に熱湯をかける様に、そんな疑問を一時に解かしてやる法はないものか。

二八 結婚の事

人間が成年に達すると、自然に男は女を求め、女は男を求める事になる。そこで色々な男女の關係を生ずる。昔しの事、大昔しの事を聞いて見ると、男女の關係は歴史的にも一定したものでなく、色々に変遷して來てゐる。

例へば、極々の大昔しには、夫婦といふ形が全く無く、親子といふのは只だ母と子との間の事で、父といふものは分らなかつた時代もあるらしい。それから、夫婦らしい關係が生じても、總て男の方から女の家に通つて行つて、生れた子供は皆な女の家の子供になると云つた様な時代もあつたといふ事です。又、少し上流階級の男子は、必ず數人の（場合に依つては十數人、或は數十人の）妻妾を持つてゐたといふ時代もある。現に支那あたりでは、今日でも、第二夫人、第三夫人などいふものがある。然し今日の文明國としては、先づ大體、少なくとも表面上、一夫一婦

がお定まりであつて、而も男が妻を養ふといふ經濟上の責任を持つ事が、普通の習慣、普通の道徳になつてゐる。そして妻になれない女は賣淫婦になり、妻の持てない男(或は妻を持つ前の男)は賣淫婦を買ふといふのが、又普通の習慣になつてゐる。然し、男女關係の色々な問題は、後の『女の一生』の處で委しく話す事として、こゝでは只、男の立場から、一と通りの關係を考へて見る。

先づ上流階級の高等教育を受けた青年男子を、更に上と下との二階段に分けて見る。そうすると、上の上の部は、學校生活を終ると直ぐに妻を迎へる。彼等も學校を出ると、何かの職業には就くだらうか、必ずしも直接それに依つて衣食するわけではない。彼等の衣食は家の財産(若しくは父の收入)に依つて支辨される。従つて彼等は、自分が直接に妻を養ふわけではない。妻は彼等自身と同じく、其の家から養はれる。そこで其の妻は、彼等自身が迎へると云ふよりは、寧ろ其の家から迎へられるのである。そこで其の妻を選ぶ標準も、家柄とか、身分とか、身代とか云ふ事が主になつて、愛とか情とかは殆んど問題にならない。従つて、すいぶん虚偽な、政略的な、形式的な夫婦が多い。そして其の裏面に、妾とか、お手つきとか、藝妓買とかいふ事實がクツつい

てゐる。だから此の階段に於ける男子の戀愛は、(遊戯的のにもせよ、純情的のにもせよ)、寧ろ其の裏面の方に在つて、表面の妻に對しては少ない事になる。そこらからして、後に色々面倒な事件が発生してゐる。

次に上の下の階段になる。彼等は學校を出て何かの職業に就くと、矢張り直ぐに妻を迎へる。『學士様なら娘をやるか』といふ諺すらあるのだから、帝大卒業生なら細君の候補者は降るほどあると云はれたものだ。今では學士様の相場も大ぶん下落して、それほどウマイわけには行かないかも知れないが、それでもまだ相手が無くて困るほどの氣遣ひはない。若い將校なども、軍縮風以來、結婚界に於いて羽が生えて飛ぶほどの勢ひは無くなつたそうだけれども、それでも矢張り相當なのを探し出すに困難はしないだらう。それから私立大學や、専門學校の卒業生達も、何かそれ〴〵の職業に就いて、安いとは云つても先づ可なりの月給にありつけば、それ相應の細君候補は必ずあるに極まつてゐる。斯くて幾百組、幾千組、幾萬組の『花嫁、花婿』が出来る。然しそれは要するに、可なりな月給(若しくは收入)の上に咲いた花であつて、必ずしも清い美しい戀の花、愛の花ではない。上の上の場合には、家が妻を迎へたのであつたが、上の下の場合も

矢張り地位身分が妻を迎へるのである。

彼等卒業生の中、殊に秀才、若しくは敏腕家たる者は、一擧にして妻と地位とを併せ得ようとする努力があるのである。或は半ば偶然に、そういふ當り籤を引くのである。即ち富豪、大官などの婿になる場合がそれです。こんな場合、男の方から見れば、大きな緋鯉でも釣りあげた様に思はれるが、實は女の方からも、金や權勢の餌で秀才を釣つたわけである。どちらにしても餘り香ばしい話ではない。

又彼等の中には、學生時代に、ツイ出来合つたのを棄てる事が出来ないで、卒業後の身分には少々不似合でも、迷惑ながら(或は殊勝にも)、それを我慢して行くものもある。或は又、そんなわけで永らく苦勞させた女を、無情にも振り棄て、平氣でゐる連中もある。或は又、學資の不足に苦しんだ餘り、大して有り難くない女から多少の助けを得て、ヤツト卒業するものもある。それは寧ろ女から捕へられた形である。

又彼等の中には、いつまでも職業らしい職業にありつき得ないで、従つて永く女房らしい者にありつき得ないものもある。

次に中等教育を受けた連中。その中でも、早く相當な（下廻りの中でも割合にみいりのいゝ）職業に就いた者とか、或は可なり収入のある小商人とか、職人とか、小資産家とかであるならば、早速、相當な（それ相當な）嫁を貰ふ事が出来る。然し中の下の連中で、ヤツト獨り口をぬらして行くといふ人達や、失業、半失業、間歇的失業などに苦しめられたりする人達になると、容易に女房を持つ運びに至らない。三十面をさけて居ながら、薄ぎたない、ジジムサイ恰好で、意氣銷沈してゐる獨身男子を見るのは、餘り感じのいゝものではない。然し見る人よりも本人の方が何倍が強くて、そうした恰好をして居たくはないのだけれど、それがどうにも成らないのだから仕方がない。つまり世の中の辛さがそれで身にしみるわけだ。

然し、世の中は又よくしたもので、いつか破れ鍋が綴ぢ蓋にめぐりあふ時節もある。そして、存外それで、苦しいながら睦まじく、面白おかしく、やつて行くのも無いではない。然し又、そんな事をやつてゐる中、失業があまり永く續いて、先づ當分見込が無いとなつて、いよゝゝ仕方がないので今度は細君が奮發して、何か外出の職業に就く事になると、御亭主は仕方なく、内で子守をしたり、飯を炊いたり、洗濯をしたりといふ、世間普通の有様とは全く反對な、悲慘

な滑稽な光景を現出したりする。

最後に下層階級の青年。この中には、却つて早くから共稼で夫婦暮しをしてゐるのがある。彼等は早くから職業に就いて、早くから略ぼ一人前の労働者になるので、自然早くから結婚生活に入る事が出来るわけである。そして生活の標準が初めから低いので、中の下階級の者より却つて暮しのラクな場合もある。然し労働者に失業のない筈はないのだから、前に云つた様な、御亭主が子守をして、おかみさんが工場に通ふと云つた様な場面は、こゝにもすいぶん多いだらう。そして年を取るにつれて収入のふえるといふ事が幾許もないのだから、そしてさういふ境遇に鬼かく子供の多い傾向があるのだから、三十にもなる頃には、もう随分の大家内で、非常に苦しい生活に落ち入る場合も多いだらう。

然し又、年が年中、あちらこちらと渡りあるいたり、木賃宿や合宿所を経めぐつたりして、全く夫婦生活を知らず、家庭生活を知らない人達もすいぶんあるだらう。同時に又、如何なる境遇、如何なる事情の下に在つても、男女の相引くは自然の本能であるのだから、謂ゆる貧民窟の餓と凍えとの間にも、矢張り夫婦があり親子がある。そして其の爲にこそ、生活の悲慘が一層悲慘に

なる。

農村には又一つ別の事情がある。農村の生活の苦しい結果として、そして都會地に於ける女工や女中の需要の多い結果として、農村の娘達は大抵みんな出拂つてしまふ。そこで農村に残つてゐる青年男子に取つては、女房に貰はうにも、遊び相手にしようにも、似合つたらしい女の子は殆んどゐないといふ、困つた有様になつてゐる。それでいよく青年が農村に落ちつかないといふ譯合もあるそうだ。

各階級の青年に取つての結婚の問題は、先づザツトこんな風に解決されて（或は解決されないで）ゐる。美しくかるべき男女の関係、戀といひ愛といふ人生の花を、どうかしてモット清い、モットうるわしいものにする事は出来ないものか。勿論それには、生活の全體、社會の全體を、モット根本からどうかして掛らないでは駄目な事だらうが。

（二九） 親子兄弟の間柄

親子の間柄を、こゝでは主として子の方から見ておく。（親の方から見た處は、後に話す機會が

あるだらう。

先づ下層階級について考へる。子供は大體、親から育てられるに相違ない。可愛がられるのと、打たれるのと、ひもじい目や寒い目を見せられるのと、餘りそれを見せられないのとの相違はあつても、兎にかく小學校だけぐらひは親のお蔭でやらされるとする。そしてそれから先、自分で自分の衣食を稼いだす爲に、何かの仕事に働らかされるのは當り前だとする。前に云つた様に、安い便利な少年労働は何處でも歓迎される。これだけの事なら、何も親子の間に文句はない。今まで育て、貰つたのに對して相當な禮を云つて、そして今後は獨立の生活をすればいい。

所が、そうばかりは行かない。親は子供を自活させる爲ばかりに働らかせるのではなく、一家の生活を助けさせる爲に働らかせる。そこで其の少年は、自分の衣食を稼いだすと共に、何程か親の生活をも助け、弟や妹の生活をも助けねばならぬ事になる。つまり其の少年は、雇主から搾取されると同時に、親からも搾取される事になる。若し親が病氣になつたり、死んだりした場合には、少年の負擔は大變なものになる。場合に依つては、丸で親の代りになつて弟妹を養はねばならぬ事になる。それを親兄弟に對する當然の義務として、一生懸命、喜んで働らいてゐる殊勝

な少年も多いだらうが、餘りの負擔に堪へきれないで、内々不平を抱いてスネだしたり、或は其の重荷を投げ棄てて逃けだしたりするのもある。

少年ばかりでなく、一人前の青年になつても、親兄弟の重荷をしよわされた場合は、全く右と同じ事である。重荷を投げ棄てて逃けださないまでも、大なり小なりそれを邪魔にする心持になるのは、免がれ難い成行である。それを一がいに不孝者、不人情者と批難するわけには行かない。子を搾る親の多い世の中に、親を邪魔にする子の多いのは止むを得ない。若し又それが出來のよい青年であつて、子として親に對し、兄として弟妹に對する自然の人情から、自分一身の事は殆んど忘れて、女房の持てない事も怨みとせず、酒の一杯飲めない事も苦にせず、毎日セツセと働らいて、いつも機嫌よく親兄弟を世話してやるとしても、それが永く續いてゐる間には、親兄弟に對する直接の不平は無くても、何處かに寂しさや物足りなさを感じて來るに相違ない。そして結局それが、矢張り何とも知れぬ不平になるだらう。そんな不平は一體、どこに持つて行つてアチまければいゝのか。

それから中の下階級も略ぼ右と同じ事だらう。中等教育まで受けさせられた者とすれば、少年

の時、親の世話になつた事が少し多いわけであり、親に搾取されたといふ不快な事情は無いわけであるが、青年時代に於ける重荷の感には少しの變りもないだらう。この人達になると、幾らか地位が高いと目されてゐるだけに、世間がそれに道徳を責める事も強く、自分の心中の道徳感もそれだけ強いわけであるが、そういうものが強ければ強いだけ、重荷の苦痛は一層せつない事になる。それにも係はらず、現にこゝいふ話がある。或る時、或る老婆が人力車に乗せられて、數人の息子や娘の家を、先から先へと順次に送られて行つた。つまり大ぜいの子供達が、只つた一人の親を、何とか斯とか云つて、互ひになすくりつけあつたのである。それには色々こみいつた事情もある事だらうが、鬼にかく、自分が餘りに苦しくなれば親も邪魔になる事だけは明らかだ。兄弟が他人の始まりである事も、もちろんだ。

上流階級を前の通り更に上下に分けて考へて見る、上の下では、多くの親達は、商賣に資本をつぎこむ様な心持で子供に學資をつぎこんでゐる。そこで卒業の腕きには、その資本に對する元利の支拂を受けようとする心持がある。子供の方では其の心持を迷惑に感ずる事になる。そして親の方では、どうも思ふ程に善くしてくれぬとか、思ふほどの者になつてくれぬとかいふ不満足

が生じて来る事になる。又こゝでは、兄だけの教育に力を用いて、弟を疎略にしたとか、兄だけに財産を相続させて、弟に幾らも分配せぬとかいふ、兄弟間の争ひの起る場合が多い。それから上の上になると、子供は皆な親の死を待つと云ふ怪しからぬ事が決して稀でない。親は只の親でなく、財産の占有者である。自分が早く財産を握る爲には、親は正に邪魔者である。こゝでは前と違つた意味で親が邪魔にされてゐる。又、長男一人が其の大きな財産の大部分を相続するので、弟妹の嫉妬を受ける事は勿論だらうが、その弟妹達の間にも、矢張り又、分配の争ひがある。待ちに待つた親の死が来た時、それを悲しむ事などは全く忘れて、兄弟姉妹が血眼になつて、互ひに術策を回らしつゝ、分配の争ひにヤキモキするといふ話は、我々のよく傳へ聞く所である。

一體、財産はナゼ長男に相続させねばならぬのだらうか。同じ親の同じ子供であるのだから、兄弟の間に平分したら善さそうなものではないか。或人はそう云ふ。然しナゼ子供だけに分配して、兄弟やオイメイには分配しないのか。或人は又そう云ふかも知れない。然し、そんなに廣く分配する程なら、親しい友人にも、近所の人達にも、分配するがいゝぢやないか。そう云ふ人も出て来るか知れない。然し、そんな事を云ふ程なら、いつその事、全社会に分配したらいゝぢや

ないか。元來、富といふ者は社會全體の力で出来てゐるのだから、それを社會に返すのが當り前だ。全社會に分配したつて一人前いくらになるのでもないから、いつそ分配といふ事をやめて、その總額を社會の物として保管し利用するがいゝぢやないか。そうすれば長男と弟妹との争ひも無くなり、親戚も隣人も一般人も皆な同じ様に親しく交はれるわけで、大變おもしろい事になるぢやないか。こゝにいふ議論も出て來ないとは限らない。そこで結局、そんな話になつては事面倒だから、矢張り現在のまゝ、長男相續が正當だとしておく。

以上、少しく言ひ過ぎた點があるとは思ふが、何しろ戀愛の花と相並んで、最も美しくなければならぬ筈の、親子兄弟の間柄を、モット何とか濁りのない、暖かいものにするわけに行かないものか。總ての汚ない厭な事は皆な生活の苦しさから(或は財産の争ひから)來てゐる様だが、その生活の苦しさを何とかする方法はないものでせうか。

(三〇) 中年時代(上流階級)

擬これて青年時代が過ぎたとして、次に男の一生の第五期、即ち中年時代に移る。然し實はも

う青年時代の所で、社會の内面の事情について、大抵の事は話してしまつたのだから、こゝに中年時代と云ふのは、三十歳から五十歳以上まで、總て男の働ける間の事を、一とくるめにして考へて見る事にします。

例に依つて先づ上流階級から始める。如何に高等教育を受けた人でも、前に云ふ通り、二十臺ではまだ本當に有力な地位には据れない。三十以上、四十五になつて、彼等は初めて本當に社會の實權を握る。最高の地位に立つ人々は、六十、七十、或はそれ以上までも權勢を揮つてゐる。前から話しつゞけて來た同年者の一列について考へるなら、假りにそれを二萬人ぐらいの一列として、彼等は三十臺、四十臺、五十臺と、年齢の進むにつれて、次第々々に其の數を減じながら次第々々にヨリ高い地位に登り、ヨリ重要な地位に進んで行く。其の數の次第々々に減ずるのは、第一に死亡がある、第二に衰弱がある、第三に失敗がある。假りに五十歳の時を取つて見るならば、最初の二萬人は一萬人となり、五千となり、更にそれ以下となつてゐるだらう。そして其の原因の中、死亡が一ばん多いだらう。衰弱には肉體的と精神的との二方面があるだらう。肉體的には大いに衰弱しても、精神的には大いに活動してゐる人もあり、肉體的には衰弱しないでも、

精神的には四五十で著るしく老衰の徴を示す人もあるが、いづれにしても衰弱に依つて落伍する者が随分多いだらう。又、別だん衰弱といふ程ではなくても、或る程度まで地位を高めた以上、もうそれから上にはどうしても登れない人物がある。それは主として金の力で學校を卒業したりした、素質の不十分な連中だらうが、それも發達力の衰弱と見なして置いてい、だらう。それから失敗や蹉躓は色々あるが、それは後に他の部分のと取りまとめて話す事にする。

そこで残る少數者の全社會に於ける配置を考へて見る。或者は會社や銀行の社長や重役になつてゐるだらう。或者は富豪、成金、大地主などとして知られてゐるだらう。或者は華族になり、或者は大學教授になり、或者は新聞の持主になつてゐるだらう。或者は政黨の首領株になり、或者は諸種の勅任官吏になつてゐるだらう。勅任官吏と云ふ中には、知事、局長、次官などいふ行政官もあり、判檢事などいふ司法官もあり、陸海軍の將官などいふ軍人もあるだらう。斯様にして社會各方面の最高の地位は、悉く彼等一味の間に分け取りされてゐる。但し彼等の中には、少年時代、青年時代から順潮に乗つて來たのでなく、高等教育を受けたでもなく、資産があつたでもなく、而も獨力で以て競争場裡に勝を制し、遂に能く上流階級の最高部に列する事を得た者もある

だらう。それらは固より非凡な才力を持つてゐたのだらうが、同時に亦た意外な好運にアツつかつたのだらう。

又、右に彼等一味といふ言葉を使つたけれども、彼等が總て必ずしも密接に親和してゐるわけではない。彼等の中、或者は甲の財閥に屬し、或者は乙の財閥に屬してゐる。又、或者は甲の政黨に屬し、或者は乙の政黨に屬してゐる。又、官僚と云ひ、軍閥と云ひ、學閥と云ひ、貴族と云ひ、いろいろの朋黨閥族が並び立つてゐる。そして彼等は互ひに、陰險な權勢利祿の争ひをやつてゐる。然し彼等は又、そんな争ひをやりながらも、其の權勢利祿の源を維持する爲には、常に能く一階級として團結してゐる。だから彼等は矢張り『一味』である。

(三二) 大財閥と政權

右に話す通り、上流階級の最高部の繩張が一味の少數者の間にキチンと出來上つてゐる。然し其の少數者の間から更に最少數の一味がすぐりだされる。そして國家の中心、社會の焦點が、そこに存在する事になる。

富豪中の大富豪、資本家中の大資本家、岩崎、三井を初めとして、安田、大倉、住友、古河など、二十家か三十家を數へなければ、それで經濟界の巨頭が盡される。そして大會社と云ひ、大銀行と云ひ、大商店と云ひ、有らゆる經濟界の大事業、大經營、大計畫は、總て彼等の勢力範圍内に在る。但し、これらの御大家になると、主人が自ら働らいてゐるのは少なく、實權實力は殆んど總て大番頭格の手中に在る。従つて『最少數の一味』を組み立てる人物は、即ち其の大番頭格の人達である。尤も、大番頭格の人達が、それ／＼に又、相當の富豪である事は勿論である。要するに、幾つかの大財閥が日本の經濟力の根本を握つてゐて、其の財閥の代表的人物が全國の經濟界を支配してゐるわけである。

次に政治界の巨頭がある。政黨政派の大首領、官僚軍閥の頭領、元老といふ者などがそれである。こゝでも矢張り、僅かに數人が數十人か、權力の中心になつてゐる。これらの大政治家は、必ずしも直接に右の經濟力を代表してゐるわけではあるまい。例へば、今の總理大臣たる加藤高明さんが、岩崎家の婿であるからと云つて、必ずしも三菱財閥の代表として内閣を組織してゐるわけではあるまい。又、西園寺さんが住友家の主人と兄弟であるからと云つて、必ずしも住友財

閥を代表して元老になつてゐるわけではあるまい。然し、國家社會の基礎根底が經濟に在り産業に在る事は云ふまでもないのだから、其の經濟界を大財閥が支配してゐる以上、大財閥の經濟力が政治上に現はれて、それが政治權力になるのだと見る事が出来る。

兎にかく今日の實際上、極少數の政治界の巨頭と、經濟界の代表的人物との間に、國家社會の全權が握られてゐる形である。そして其の周圍に、前記各方面の高級者がズラリと陣取つて、それで一つの大きな支配階級が形づくられてゐると見る事が出来る。

但し、前にも云ふ通り、彼等の間にも争ひがある。大財閥と大財閥とは常に大擄取の競争をしてゐる。大資本と小資本との間にも生死の戦ひがある。小資本は常に大資本から食はれてゐる。又、工商業と農業との衝突は前に話した通りである。それらの利害が色々に混雜し、種々入り亂れて、その結果、政黨政派の映畫を現出してゐる。そこで大財閥の經濟力が政治上に現はれて、それが政權になると云ふのも、實は大財閥と大財閥との争ひ、大經濟力と小經濟力との釣合、工商業と農業との衝突、及び全支配階級が被支配階級に對する手加減などが政治上に現はれて、それが政權の變轉となり、内閣の交迭になるのだと解釋して、一層正確な意義を生ずるわけである。

(三二) 政治と經濟、新藩諸政黨

こゝで多少し深く政治と經濟との關係を考へて見たい。

徳川の幕府が仆れて明治の新社會が生れた時、それは（前にも話した通り）封建制度から資本制度への變轉であつた。大名武士階級の政治が亡びて、資本家階級の政治に進む道順であつた。然し其の時、直接に幕府を仆した者は、資本家階級ではなく、諸藩の小ザムライであつた。資本家階級はまだそこまでの發達をしてゐなかつた。實際上には、町人階級の經濟力が可なり強大に發達してゐて、武士階級を亡びさせる根本の原動力にはなつてゐたのだが、それでも彼等は自分で直接に政權を奪ひ取らうとする程の氣力も準備もなかつた。そこで諸藩の小ザムライが中堅の實力となつて封建制度をこわしてしまつた。従つて明治の新政府は、矢張り士族の政府であつた。そして士族といふ中にも、薩州、長州、土佐、肥前などの藩士が、主として幕府を仆す力になつたのだから、明治の新政府は即ち薩長土肥の士族政府であつた。

所が、この薩長土肥の中、土肥が排斥されて、薩長だけが残つた。そこで土の代表者たる坂垣

退助は自由黨を起し、肥の代表たる大隈重信は改進黨を作り、盛んに薩長の『藩閥政府』專制政府』を攻撃した。それが即ち自由民權運動である。自由民權運動は、歐米の先例に倣つて、國會開設を要求し、立憲政治を希望するものであつて、其の本來の性質上、封建勢力（或は其の殘存勢力）に對する資本家階級の運動でなければならぬのだが、我が國ではまだ資本家階級の發達が後れてゐたので、右の通り不平士族の代表者に依つて其の運動が鼓吹され、商工業者よりも寧ろ富農と士族とが其の運動に活躍してゐた。

それから漸く憲法が發布され、帝國議會が開かれ、謂ゆる立憲政治が行はれかけた。經濟界には資本制度が次第に發達しつゝあつた。政黨には實業家の分子が増加しつゝあつた。その中に日清戰爭があり、日露戰爭があつた。日本は忽ちにして大強國になつた。産業が勃興した。成金が擧出した。資本制度が確立した。政黨は著るしく資本主義的色彩を加へた。自由黨は政友會と變じて、其の首が板垣から伊藤、西園寺、原にすけかへられ、改進黨は憲政會と化して、其の首が遂に加藤高明に歸着してゐる。斯くて藩閥と財閥と官僚と政黨とが混和し、政黨内閣（或は半政黨内閣）が出現しはじめた。これはいよく黄金政治の世の中となつた。

斯くて、士族などといふものは何時の間にか消滅してしまひ、實業家、富豪、資本家が『大紳士』になりました。富農も次第に銀行會社の株主になつたりして、資本家の性質を帯びて來た。然し地主としての富農の資格は、矢張りまだ動かす事が出来ない。そこで政友會は矢張り農民黨と云はれ、憲政會も『農村振興』を看板に掲げざるを得ない。然し(前に云ふ通り)政黨が資本家と地主との、兩方の利益を代表する事が非常に困難になつて來た。地主は輸入米に關稅をかけた米價を高くしたい。資本家は米價を安くして勞働賃金を下げさせたい。第一、そうした利害の衝突がある。それが一つの原因となつて政黨が動搖しはじめた。商工黨が新たに作られた。農民黨も作られかけてゐる。政友會、憲政會、皆な遠からずして分解作用を起すに違ひないと云はれてゐる。

然らば舊政黨は分解して資本家黨と地主黨との二つになるのかと云ふに、必ずしもそうでは無い。一方には明らかにそうした傾向のある事は右の通りだけれども、一方には又、前記の様な大財閥の發達と、それに對抗する小ブルジョア(小資本、小地主、中ブラ階級など)の立場と、及び新たに勃興して來たプロレタリア(無産階級)の勢力との關係などがあつて、又いろいろ變つ

た情勢を作りつゝある。

大財閥、大資本の間に競争のある事は前にも話した。然し甲の大資本と乙の大資本との間には只だ搾取の競争があるばかりでなく、産業の種類の違いから来る態度の違いがある。例へば事業屋と銀行屋との間（工業資本と金融資本との間）にも種々の差異があり、石炭屋、製鐵屋、紡績屋、船舶屋などの間にも、いろいろ利害の相違がある。一例を挙げれば、外國と戦争が起れば、鐵工業は忽ち大もうけをするが、紡績業は（原料の外國から來るのが止まるから）サツパリ駄目になつてしまふだらう。従つて紡績業者は平和主義になり、鐵業者は好戰的になるといふ差異が生ずる。

又、資本家階級は初め封建勢力（若しくは其の殘存勢力）に對抗する必要上、自由民權を唱へ、デモクラシーを武器として上に向つて戦つて來たのだが、既に資本制度が確立して、更に大財閥が發生して見ると、そして前に話す通り、藩閥と官僚と財閥と政黨とが混和して見ると、もう上を向いて戦ふ必要が全く無くなつた。そして同時に、下の方から頭を擧げて來る、無産階級のプロレタリア運動が厄介物になつて來た。そこで大財閥を背景とする諸政黨は、上を向いて戦ふ爲

に必要であつたデモクラシーの武器を棄てた。自由民権が忘れられて、自由黨が政友會になつたのは、即ち其の爲である。そして彼等は、更に下に向つて戦ふ必要上、次第々々に、保守的、專制的に逆戻りしつゝある。

所が、小ブルジョアの立場としては、大財閥の横暴な壓力を痛感して、頻りに小資本・小企業
の自由經營にあこがれてゐる。そこで彼等は昔しの自由民権を懐かしみ、その中途にして挫折
した事に憤慨し、更にデモクラシーの武器を以て大財閥に反抗するのである。彼等は大財閥から
押しつぶされる事を免かれる爲に、新興のプロレタリア階級に同情し、或はそれと提携し、或は
それを代表し、或はそれを代表する眞似をする。兎にかく彼等は自由主義の正統、デモクラシー
の奉持者として出現するのである。

以上の如き種々なる情勢が、色々に入り亂れ、様々にからみあつて、今後に於ける政黨の分解
と、改造と、新組織とを生ずるものと考へられる。今日までの政黨、政派、閥族などの諸關係、
及びそれから生じた政權の變轉、内閣の交迭なども、總てこうした諸事情の間から發生したので
ある事は、前節に話しておいたが、其の形勢が一層ハツキリと進展して來たので、もう政黨が昔

しのまゝの古い形體では持ちきれなくなつて來たわけである。

然らば今後、政友會、政友本黨、憲政會、革新俱樂部などが、實際にどんな變化を呈するだらうか、どんな離合集散をするだらうかと云ふに、それは恐らく何人も容易に豫言する事は出來ないだらう。只だ今後、明らかに大財閥を代表した、非常に反動的な保守黨が、一つ或はそれ以上、出來あがるに相違ないと考へられる。それが政友本黨を中心として、政友會、憲政會などの一部を包容した者であるか否かと云ふ様な事は、今から迎も豫測されない。そして一方には、それに對抗する小ブルジョア(ブルジョア急進主義)の進歩黨が、これまた一つ或はそれ以上、出來あがるだらうかと考へられる。近ごろ尾崎行雄氏等の間に『新政同盟』といふ團體が作られかけてゐるといふ噂があるが、それは即ち右に云ふ小ブルジョア進歩黨の一つである。革新俱樂部の一部、憲政會、政友會の一部なども、或はそれに参加するだらう。又武藤山治氏等の實業同志會(商工黨)は必ずしも小資本家黨では無いかも知れぬが、武藤氏が紡績業といふ平和主義の工業を生命とする資本家である所から見て、保守的大資本家黨ではないと考へられる。従つて尾崎氏の新政同盟と稍や近い者の様に考へられる。これらの新政黨が現在の成立(或は現在の計畫)のまゝ健

全に發育するかどうかは分らないが、何にしても新しい傾向を代表する、新しい現象である事は確かである。

それから最後に無産階級黨、プロレタリア政黨が発生するだらう。無産階級は、工業地に於いては労働組合を作り、農村に於いては小作組合を作つてゐるが、それらの勢力を中堅にして、無産階級が政治的に戦ふ爲の一大政黨が出来ねばならぬ筈である。現に、労働組合の内部に於いても、小作組合の内部に於いても、無産政黨組織の研究計畫が起つて居り、『政治研究會』といふ(同じ目的の)獨立團體も組織されてゐる。然し實際に於いて、この無産黨運動がどんな發展をするかは、今のところ豫測が出来ない。労働組合を中心とした労働黨と、小作組合を中心とした農民黨と、智識分子を中心とした社會黨と、三つに分れて成立するだらうといふ見方もある様だが、それでは無産階級の力が分裂して、強大なものに成り得ないだらう。どうかして、その三要素を包容した一大政黨を作りあげさせたいものである。名は無産黨でも、労働黨でもいゝだらう。然し、そうして出来あがつた無産黨が、いつまでも一政黨として存立し得るかと云ふに、そこには疑問がある。無産黨が可なり有力に つて来ると、其の中の右翼は小ブルジョア的に轉化する。そし

て左翼の純プロレタリア派と分裂する。現今ヨーロッパで、社會黨と共產黨とが争つてゐるのは、即ちそれである。然しそこまでの事は此の本で話してゐる暇がない。

三三 資本制度と帝國主義

明治の初から今日までの間に於ける、政治經濟の大體の變遷は右の通りであるが、こゝで今一度、改めて、世界に於ける資本制度發達の段取を檢べて見たい。

十八世紀の末、蒸汽力その他の新發明に依つて謂ゆる『産業革命』が起り、總ての産業が大仕掛の機械生産となり、資本制度がいよゝ本物になつて來た時、ブルジョアの紳士達（即ち資本家、實業家、工商業者）の間に行はれたモットー（合言葉）は、『自由競争』であつた。彼等は舊時代の封建制度の下に於いては、王や貴族から種々なる束縛や干渉を受けて、思ふ様に産業を發展させる事が出来なかつたが、今では其の束縛から干渉から脱却して、自由に産業を營み、自由に労働者を使い、自由に生産を爲し、自由に販賣を爲し、自由に利潤を得たいのであつた。經濟上に於ける此の自由の要求を、思想上に反映させたのが、即ち自由主義であつた。つまり自由主義と

は、只だ資本家の自由勝手主義であつた。労働者の側から見ると、成るほど、昔しの奴隷や農奴とは違つて、厭になつたら何ん時でも仕事をやめる自由を持つてゐた。又初から誰にも雇はれないでゐる自由を持つてゐた。然し、そうする事は、労働者に取つて、只だ餓死の自由を持つと云ふに過ぎなかつた。

然し自由競争は産業を發達させる動力であつた。多數の資本家がそれづくに産業を經營して、盛んに競争をやるのだから、自然に新しい機械力の應用となり、精巧な道具の使用となり、優良な製品の産出となり、而も其の價格が段々に低下する。従つてそれが結局、一般社會の利益幸福になると云ふわけであつた。實際、その點では、それだけの効果があつた。又アルジョアの紳士達は、労働者に對して自由を與へたいわけでは無かつたけれども、封建の勢力に對して自分等の地位を堅める爲に、盛んに自由主義を主張し、言論の自由、結社の自由等を要求した。そこで彼等が政權を握るに至つた時には、デモクラシーが確立して、立憲政治が出現したのであつた。

資本制度の發達の下には、確かにそれだけの利益があつたと云へる。

然るに激烈なる自由競争の結果は、實に意外な現象を生ずる事になつた。出来るだけ安い生産

費で、出来るだけ優良な品物を産出する爲には、出来るだけ大資本で、出来るだけ大經營をやるより外はない。そこで少數の大資本が多數の小資本を食ひ殺した。大經營の前に立つては、小經營は逆も競争しきれないのであつた。資本がドシ／＼集中した。合資會社が出来、株式會社が出来た。更に數會社の合同が生じた。或は、大會社が小會社を併呑した。斯くて遂に極少數の大資本だけが残つた。全國の同一産業部門が、極少數の人々の手に握られた。そこで『獨占』といふ新しい現象が起つた。全國の或る産業部門を自分等の手の中に握つた少數の大資本家達は、相談づくで競争をやめる事にした。彼等は互ひに打合せをして、或は提携をして、或は合同をして、全國の産業を獨占的に經營した。即ち彼等は競争の無駄を省いて利益を多くする爲、態と生産額を制限したり、無理やり高値を押しつけたりした。この獨占的の大資本を、トラスト、シンヂケート、カルテルなどと云ふ。つまり資本制度の發達は、自由競争から進んで無競争に到達したわけである。こうなつて來ると、産業の進歩は止まつてしまふ。現に、非常に有益な技術上の新發明があつても、トラストが其の爲に利益を得ないと見れば、直ぐに其の發明權を買收して、ジツト握りつぶしてしまつたりする事は珍らしくない。斯くて資本制度はもはや、優良な品も産出さ

せず、價格の低下をも生じさせず、そして生産力の發展を阻止する事になつて來た。産業は正に退歩時代に入つたわけである。

又、産業の種類について、紡績業から製鐵業への變化が起つた。自由競争時代の主なる産業は綿糸工業(即ち紡績業)であつた。イギリスで最初マンチエスタ市が工業都市として榮えだした頃には、紡績業全盛であつた。イギリスはアメリカや印度から原綿を輸入して、それを紡績して世界各地に販賣するのであつた。其の頃のイギリスは自由貿易一天張であつた。紡績業のイギリスとしては、優良の品を廉價で生産しさへすれば、世界中に幾らでも販路を見出す事が出来るので、關稅など拵へる必要がない。原料を買入れるにも、製品を賣出すにも、そんな不便なもの、無い方がいゝ。そこで自由貿易主義であつた。(穀物輸入税の廢止運動の事は前に話したが、あれも自由貿易主義である。)自由競争、自由貿易、自由主義、それが當時のイギリスの態度であつた。従つて又彼等は平和主義であつた。國際間が平和でなくては、彼等の商賣は立行かないのである。(紡績業が平和的な性質を有する事は、前にもチヨット話して置いた。)然るに十九世紀の末頃から、マンチエスタの繁昌がパーミンナムに移つて來た。パーミンナムは鐵と石炭の都である。

イギリスの資本制度は紡績業から製鐵業に進んで來た。と云つて紡績業が無くなつたわけではない。只、普通の紡績業は後進國に續々起つて來た。自分の植民地(自分の賣込先)たる印度にすら起つて來た。そこで先進國たるイギリスとしては、その精製品だけを生産する事になつた。そして、それと同時に、後進國や植民地に對して、新興の産業に要する機械類を供給する事になつた。一般に資本制度が發達して、産業がますます大規模になるに連れて、機械類の需要は非常に増加するのだから、先進國としては先づその生産供給に當るべき筈である。そこで製鐵事業が盛んになつて來た。機械類は殆んど總て鐵製である。又、鐵道が世界各地に敷設される事になつて來たのに對し、イギリスはその材料を供給する事になつた。又、製鐵事業は即ち軍需品工業である。小銃、大砲、刀劍、軍艦、皆な鐵業の製品である。イギリスの鐵業は自國の軍艦その他を製造すると同時に、亦た多くの軍需品を輸出した。

然るに、イギリスが斯様に紡績業から製鐵業に進むと共に、從來の平和主義が一變して好戰的の侵略主義になつた。それには色々の理由がある。多くの大機械や、鐵道材料や、銃砲軍艦などを後進國に賣りつけるのは、紡績品を賣りつけるのと餘ほど事情が違ふ。紡績品は個々の商人に

賣りつけるのだが、鐵製品は政府なり、地方廳なり、大會社なり、或は多分政府關係の大商人なりに賣りつけるのである。そこで只だ優良の製品を廉價に供給すればいい、といふ譯に行かない。そこには色々の政治的術策が必要になる。植民地の獲得も必要になる。勢力範圍の設定も必要になる。軍事的威嚇も必要になる。そこで植民熱が盛んに起り、軍備擴張熱が燃え立つて來る。又一方から見れば、軍備擴張熱を起させる事それ自身が、即ち鐵工業を盛んにする所以でもある。そこでイギリスが平和主義から侵略主義になつた。

こゝにいふ變化はイギリスばかりでなく、ドイツでも、フランスでも大體同じ事で、つまり資本制度發達の必然の徑路である。世界戦争以前、列國の中で、ドイツが一ばん侵略的であり、好戰的であり、軍國主義的であると認められてゐたが、當時、ドイツの鐵工業は非常に急速な發達を遂げて、既にイギリスを凌駕してゐた。又、ドイツとフランスとの反目嫉視は、要するにアルサス地方の鐵だとか、ザール地方の石炭だとかを、取るか取られるかの問題に外ならぬ。又、世界戦争に於いて、初めの數年間、ドイツが勝利を續け得たのも、偏に鐵工業隆盛のお蔭だと云はれてゐる。そして又、最後にドイツが負けたのは、アメリカといふ最大の鐵工業を發達させた國が

其の戦争に参加したからだとかへ云はれてゐる。鐵工業の威力は現時に於いてこれほど偉大である。鐵工業は産業界の太陽であつて、他の諸工業は其の周圍を回る大小の諸遊星に過ぎない。この鐵工業が産み出した所の、十九世紀末以後に於ける、諸大國の侵略主義的態度が、即ち謂ゆる帝國主義である。

(三四) 財閥寡頭政治

帝國主義とは、大工業國が中心となつて、其の周圍の農業地方を征服し、そこに商品を賣込んで利益を搾取する事だといふ見方がある。それで大體は當つてゐる。現に歐米の文明國は皆な工業國であり、その外の世界の大部分は後進の農業國であり、そして其の農業國の殆んど全部が歐米數國の屬國もしくは植民地になつてゐるのである。然し、右の如く、紡績業から鐵工業への變化及び紡績業の平和主義に對する鐵工業の侵略主義の優勝といふ事情を指摘して、初めて帝國主義の意義が充分明瞭となる。猶又、前記の自由競争と獨占との關係を之に考へ合せると、其の意義が更に一層明瞭となる。

獨占は競争を無くしたと前に云つたが、必ずしもそうではない。無数の小資本と小資本との競争は無くなつた。一國內の競争は無くなつた。然し全世界に於ける大トラストと大トラスの競争は無くなつてゐない。だから競争が獨占到變じたのではなく、小さい自由競争が大きな獨占競争に進化したのである。従つて競争は緩和されたのでなく、却つて著るしく激烈になつて來たのである。所で、斯様な全國的大トラストが、イギリスにもあり、ドイツにもあり、フランスにもあり、アメリカにもあるといふ事になると、今度はそれらの諸大トラストが提携して、國際トラスト(或は國際シンヂケート)を作つた。そして彼等の間に全世界の搾取地を分割する事になつた。それで一時的には収まりがつくけれども、彼等の貪慾には限りがない。彼等の獨占慾は矢張り自由競争である。彼等は分割の協定をしながら、内心にはそれ／＼全世界獨占の慾望を抱いてゐた。即ちイギリス世界帝國、ドイツ世界帝國、アメリカ世界帝國などの夢想があつて、飽くまで世界帝國の競争をたくらんでゐた。侵略主義、軍國主義、帝國主義が即ちそれである。そこで帝國主義とは、即ち獨占期の資本主義だといふ言方もある。

更に帝國主義の説明として、鐵工業と獨占との外、金融資本を擧げる事が出来る。金融資本主

義が即ち帝國主義だといふ言方もある。金融資本とは、つまり銀行資本の事である。其の説に依れば、銀行は初め只だ金を貸すだけの商賣であつた。何の事業にも直接關係しないのが其の本質であつた。然るに銀行の金力が次第に増加して來た。銀行は漸く産業界に侵入して來た。遂に自ら企業者となつて産業を經營する事になつた。全國の總ての産業が全く小數の大銀行に支配される事になつた。これが即ち金融資本の時代である。それから産業資本の時代には、種々の商品を製造して外國に輸出するのであつたが、金融資本の時代になると、商品よりも寧ろ資本そのものを輸出する事になつた。現に諸大國が外國に貸しつけてゐる資本は莫大な額に達してゐる。そして、そいふ情勢になると同時に、從來は大體、自由主義であり、立憲主義であり、平和主義であつたのが、急に保守的となり、反動的となり、侵略的となり、一面には其の大資本の力で外國を支配し、一面には内國の人民を壓迫する。それが即ち帝國主義と云ふのである。

然し、大銀行家の中にも平和主義者がある。紡績業などに關係の深い銀行家は、どうしてもそうならざるを得ない。だから金融資本の帝國主義と云つても、それは矢張り最も優勢な鐵工業の關係者の事を意味するものと解釋せねばならぬ。又この金融資本説を前記の獨占説と結びつける

と、大へん善く形勢が分つて来る。即ち全國的の獨占大トラストが出来ると云ふのと、少數の大銀行家が全國の産業を支配すると云ふのとは、同じ事實を指したものと考へられる。資本家と資本家との間、産業部門と産業部門との間が、大銀行に依つて聯絡され、そして其の銀行が次第に事業の經營に侵入して來るとすれば、つまり産業資本と銀行資本とが混和し、資本家と銀行家とが融合して、極少數の財政王、若しくは金融貴族が、本統の國家の支配者だと云ふ様な事になる。それを『財閥寡頭政治』と名づけてゐる人もある。表面上に國家を支配するは、もちろん政治家であり大臣であるが、それは寧ろ人形であつて、實權を握つてゐる人形使ひは即ち右の金融貴族だといふ見方がある。そこが『財閥寡頭政治』と云はれる所以である。

斯様に、各國に於けるこれら財閥の少數巨頭連が政治の實權を握つて、それ／＼世界獨占慾を抱き、それ／＼世界帝國の夢を見てゐるのだから堪らない。遂に先達ての世界大戰爭を引き起した。彼等は既に全世界を分け取りにしてしまつてゐるのだから、其の領分を少しでも動かさうとすれば、世界戰爭になるより外は無かつたのである。所が、戰爭の結果は恐ろしい事になつた。負けた方も、勝つた方も、大抵の國は、國內の經濟が滅茶々々に壞れてしまつた。それを何とか

して盛り返さうとモガいてゐるのが、現在の状態である。

何んにせよ、帝國主義は資本制度の最後の段階だと云ふ事です。そうすれば、もう此の上には行き處がない。大戦争をキツカケにして亡びるかと思はれたのが、兎にかく今日まで生き延びてゐるといふだけの事らしい。そして何處の國でも、勞働階級の勢力が著るしく増大して、其尻を狙つてゐるといふ有様である。そこで『寡頭政治』の連中、及びそれに使はれてゐる人形遣は、今正に最後の勇氣を振りしほつて、死物狂ひの荒れ方をしてゐるのだらうかと考へられる。一體、この始末は、どんな事になるのでせう。

(三五) 行詰りと死物狂ひ

そこで此の資本制度發達の段取を日本に當てはめて見ると、それが大體、前に云つた通りの事になるのです。然しいろいろ違つてゐる點もある。

日本では、何しろ資本制度が後れて起つたので、自由主義運動の時代が甚だ短かつた。日本に憲法が出來、議會が開かれた頃には、ヨーロッパでは最早や帝國主義の時代に成りかけてゐた。

そこで日本では、まだ立憲政治が本物になりきらず、デモクラシーがまだ底しきつぬ中に、早くも反動時代が来たわけである。従つて今日に至るまで、半封建的の藩閥勢力が残存したりして、頑冥固陋な軍閥や貴族などが跋扈してゐる。獨占の形はまだ歐米ほどに進んでゐないけれども、資本の大合同は可なりな處まで行はれてゐる。鐵工業は、鐵の産出が少ないので、大いに發達するわけに行かない事は勿論だが、何しろ日本が東洋第一の工業國として近隣農業地方を併合しつゝある事に明瞭の事實である。臺灣、朝鮮、滿洲、その他がそれを示してゐる。又、支那などに對しては、すいぶん資本の輸出もしてゐる。要するに日本の帝國主義は可なり發達したものであつて、それが古い藩閥の殘存勢力なる軍閥や貴族など、結びついて、すいぶん猛烈な反動主義、保守主義、侵略主義に落ち入つてゐる。金融貴族、財政王の發達も可なりな勢ひであつて、財閥寡頭政治の趣きも現はれてゐる。前の『大財閥と政權』の所を讀み返して下さい。

世界戦争については、日本は大へんな僥倖を得たわけで、其お蔭で一時、貿易が大發展を爲し、一般産業がたいへん興隆して、ブルジョア連中を有頂天にならせたが、戦後の今日では其の反動が現はれて、元來の行詰り状態がいよゝ／＼最後の行詰りに近づいてゐるらしい。元來、日本の産

業(主として紡績業)は、(前にもチョット話した様に)、労働者の賃金が安いのを第一の利器として外國の同業と競争して來たのだが、近來その労働賃金が可なり高くなつて來たので、競争が非常に困難になつた。殊に賃金の甚だ安い支那あたりで續々と紡績業が起つて來るので、もう日本は殆んどやりきれない状態に迫つてゐるといふ事だ。そんな事からして、彼等は(前にも話した通り)、どうかして賃金を引下ける事に一生けんめい骨を折つてゐる。然るに農民側からは米價引下の反對運動が起るし、労働者側からも一層深酷な反抗運動が起るし、財閥寡頭政治も途方に暮れてゐる有様である。然し彼等は容易にグズ／＼と屁こたれるものではない。彼等は一面に政黨を使い、一面に軍閥を使い、支配階級の全力を動員して、矢張り最後の勇氣を振り起し、死物狂ひの荒れ方をやるらしく見える。

少し話が前後したり、混雜したりして、大ぶん分りにくくなつたかと思ひますが、どうか前の方のあちこちと照らし合せて、よく考へて見て下さい。何しろ、こんなわけで、言論の自由もなく、結社の自由もなく、デモクラシーの確立してゐない處に、反動主義が無遠慮に荒れだすのだから、自由主義の正統を以て任ずる新政黨が出現しても、國民の大多數を代表する無産黨が生れ

かけても、中々容易な事ではないだらう。一體どんな事に始末がつくものか、國民としては、すいぶん不安なわけである。

(三六) 中等と下層の中年時代

ツイどうも話が小むつかしく成り過ぎて済みませんでした。あとはモウ總てらくな話ばかりで片づけます。

扱、中等連の中年の有様はどうかと云ふに、下廻り役として立身の出来るだけ立身して、どうにか可なりに一生を過す月給取もあるだらう。或は又、四十五でモウ老朽の部に入れられて、失業、半失業の憂き目を見つゝ、浮きつ沈みつの苦しい生涯を送るものもあるだらう。或は又、幸ひに首だけは引き續いて切られないでも、幾許の月給の上りもなく、それに子供はウヨ／＼とふえて来て、小さい火の車が廻しきれないものもあるだらう。それから又、小商人、小地主の類は、何とかしたら少し大きくなれるかも知れぬといふ、當にならぬ夢を見ながら、いつの間にかジリ／＼と小さくなつて、遂には下の段に落ちるのが随分あるだらう。又そこまでは行かないで

も、尻に火が附いた様な、一時もジツとして居られない様な不安な氣持で、とう／＼墓場まで行きつくのもあるだらう。只、少數の例外としては、すいぶん因業な陰險な拔駈振りで、善く云へば血の出る様な奮闘振りで、稍や上流の地位まで漕ぎつける人達もあるだらう。そして、そういふ立身の例外があるだけに、全體の人達の夢が覺めないで、『若しや、まさか』に引かされながら、自分は最下層の人間でないといふ、空虚な誇りを持ち続ける事になる。著るしい失敗者の事は後に話す。

然らば下層連の中年はどうか。これは全體が初めから失敗者で、青年時代から中年時代に入れば、それだけ體力氣力が衰へて役に立ちにくくなるだけの事である。失業、半失業の状態はいよ／＼多く、いよ／＼長くなる。熟練を積み、老巧になつて、それで賃金が増すといふ場合は甚だ少ない。この連中は立身の夢を見る事はないが、其の代りに又、アキラメをつけすぎてゐる。反抗運動をやるといふ元氣も、中年以後には滅多に出ないらしい。いよ／＼苦しくなればヤクを起して酒をあふるといふ位が關の山だらう。失敗者中の失敗者は勿論こゝにもあるが、それも後に話す。

(三七) 老年時代

上の上に屬する老年は只だ贅澤三昧で遊ぶ事に困るだけだらう。老人のくせに不善を働らく事も少なくないのは勿論だらう。然しそれだけならばまだいゝが、鬼かく其の身分や閱歴を種にして、餘計な出しやばりをやつて若い者の邪魔になるのがある。その最も顯著なのが元老といふ者だらう。然しブルジョア仲間、閥族仲間では、そんな者も矢張り何かの道具、擲取の道具、壓迫の道具になつてゐる。

上の老人には恩給だの、年金だの、利子だの、謂ゆる樂隱居の生活を送るのが多いだらう。これは結構な事ですと申すの外なし。然し官吏や軍人などだけが、どうして恩給や年金を貰ふのだらうといふ疑問が、どこからか出るだらう。勞働者だつて、事務員だつて、小商人だつて、それ相當、社會の必要に應じて、正直に働らいて老衰した以上、社會が(或は國家が)それを養ふだけの事はする筈ではないか。若し總ての國民に對し、老衰して働らきが出来なくなつた場合には、必ず社會の樂隱居にして安穩に殘年を送らせるといふ國家があつたら、どんなに嬉しい事だらう。

それでこそ初めて共同生活の國家といふものでは無いだらうか。

上の下や、中の老人の中で、恩給年金を貰ふのは、これは樂隠居といふほどの金高ではあるまいが、それでも、何んにも無い者に比べると、先づ／＼結構として置いていい。然し僅かの恩給年金で大ぜいの家族を養ひかねたり、或はそれを質に入れて先取をして使つてしまつたりするの、ずいぶんあるだらう。現に知事の古手や、少將の古手で、どうにも食へないといふのもあるそう。

中や下の老人で、いよ／＼働らけなくなつたのは、大てい子供に掛つてゐるだらう。上の下にも矢張りそれがあるだらう。總て子に掛るのは、子の暮しが可なりらくでありさへすれば問題でないが、そうでない場合には問題が起る。そして、そうでない場合の方が多い、それはズツと前の方に話して置いた通りである。一生を働らいて來て、もう働らけなくなつたといふ老人を、現在の我子に對して遠慮氣をせねばならぬ様な（或は子供に邪魔にされ、突き放される様な）境遇に置くとは、國家社會として何たるナサケない事であらうか。

中や下の老人で子供にも掛れない、或は掛る子供もなれば、彼等は結局、行倒れになる

か、養老院にはいるか、七十で首を釣つたりするか、といふ事になる。若し養老院といふものが、彼等が首を釣らぬ前に、行倒れにならぬ前に、總て容易に彼等を收容して、そして可なり見苦しくなく養つて呉れるのであれば、せめて少し氣の濟むわけであるが、實際には中々めつたに收容されないらしい。

(三八) 失 敗 者

中の老人の一部分や、下の老人の大部分は立派な失敗者であり、又下の青年および中年の大部分も矢張り失敗者なのだらうが、こゝにはそれら以外、特別の失敗者を考へて見る。

先づ病氣と死亡。これを上流について云へば、遺傳の結果、不養生の結果、偶然の出來事くらいに分類されるだらう。不養生は本人の不心得だとも云へるが、然しそれも人間として、或る程度までは誰にも止むを得ない必然の弱點だとも云へる。いづれにしても致方のない事である。只だ上流の人は、金の力で病氣や負傷を治療し得る場合が多いだけ仕合せである。それでも死ぬるのは、上流としては寧ろ只だ不運である。然しそれも、人生の競争としては、第一の失敗に相違

ない。次に中以下の人々としては、溝傳もあり、不養生もあり、偶然もあるだらうが、それらよりもモツト多い原因は、過勞と、營養不良と、空氣と日光との不足である。そして病氣になり、負傷をした時、治療の充分に出来ない事である。今日では醫學醫術が非常に進歩してゐるので、大抵の病氣は豫防され、治療される筈になつてゐるが、實際には中々そう行かない。例へば、種痘に依つて天然痘が殆んど全く撲滅された様に、若し肺病が殆んど全く驅逐されるなら、どんなに嬉しい事だらう。然し今日の有様では、過勞といふ事があり、營養不良といふ事があり、空氣と日光との不足といふ事がある以上、つまり此の世の中に貧乏といふ事がある以上、肺病を驅逐する事は到底出来そうもない。又、梅毒といふ恐ろしい病氣は、六百六號の注射で治療されるといふ事だけれども、多くの男子に早く結婚するだけの經濟力がなく、一部の女子に賣淫をせねばならぬほど貧困な者がある以上、梅毒の亡びる時はありさうにない。そうして見ると、病氣よりも貧乏の方がズツト恐ろしい事になる。四百四病のやまひより、貧ほどつらいものはないと、昔から云ひつたへてゐるのは、その事である。何とかして此の貧のやまひを治療する方法は無いものか。

失敗者の中、正直で意久地のない者は乞食物貰ひの類になる。然し、餘り彼等を馬鹿にしたり、憎んだりしてはならない。彼等は自分の働らきで食ふだけの意久地がないには相違ない。然し、社會の制度が無理やり澤山の失業者を拵へてゐる時代に、自分で食へないといふ人を深く責めるわけに行かない。彼等は自分で食へないから貰つて食ふ。それだけ彼等は正直である。若し彼等が正直でなく、そしてモ少し意久地があつたら、彼等は疾くにスリかドロボーかになつてゐるだらう。して見ると、意久地のあるといふ事を滅多に賞讃するわけにも行かない。我々の社會が乞食物貰ひの類を救済する事が出来ないで放つて置く以上、我々は彼等を馬鹿にしたり、憎んだりする權利はない筈である。

乞食になるには少し氣概があり過ぎ、犯罪をやるには少し良心があり過ぎると云つた様な人達が、いよ／＼食へない場合、多く自殺をする。これほど氣の毒な事はない。尤も、相當な職業に就けば就かれそうな人で、獨り深く考へこんで遂に自殺するものもある。然しそれは、世間並の職業といふものを一種の乞食と感じ、一種の犯罪と認めたのである。自尊心の深い人、道徳心の強い人が、今の世の中に對して、そうした考へを持つのは決して無理でない。實際、乞食に似てる

ない職業が何處に在るか。幾分の犯罪でない職業が何處に在るか。然しそれ程の人物なら、一つ大いに奮發して、この忌はしい社會を何とか改革するといふ考へを起しそうなものであるが、あいにく其の改革の希望を認め得ない人が、只だ一身を潔よくする爲に自殺するのだらう。その外氣ちがいじみた厭世觀、或はひどく深遠らしい人生觀などから自殺する人もあるが、それは恐らく、何か思ふに任せぬ色々の事件が實際にあつて、煩悶懊惱の末、それを未熟な腦髓の中で、變な哲學らしいものにデツチあけた結果だらうと思ふ。又、戀愛の遂げられない爲に自殺する人も少なからずあるが、これも氣に入つた職業がなく、良心の許す衣食の道が得られない爲に自殺するのと、大體おなじわけである。要するに此の人達は、氣が強い様で、實は氣が弱いのである。そして不純な戀愛や、不徳義な職業や、虚偽の生活に堪へ得ない正直者である。そして、その正直な點に於いて、今の世の中の失敗者となるのである。何かの過失、事業の失敗、多少の不正な點に對する責任を感じて自殺する人も、それだけ耻を知る點に於いて餘ほど正直だと見る事が出来る。それだけの人なら死なないうで居てくれともいふと思はれるが、兎かく有り難くない人物の方が餘計に生き残るものだ。

乞食になるには少し才智と力量があり過ぎ、自殺をするには餘りに不正直で、餘りに不まじめだと云つた様な人間が、場合に依つて兎かく犯罪に流れる。それも相當の職業があつて、可なりのお生活が出来れば、滅多にそんな事にもならないのだらうが、何しろ目の前に食ふ事が出来ないとなれば、何とかツイ『悪い事』をするより外はない事になる。スリ、カツバライ、恐喝、窃盜、強盜などやるのが皆それだ。そんな『悪い事』をしないで、ナゼまじめな稼ぎをしないのかと云つて、彼等を叱つても駄目です。若し彼等が、では『まじめな稼ぎ』をしますと云つた時、諸君はその稼ぐべき仕事を彼等に與へる事が出来ますか。それが出来ないとなれば、そんな『悪い事』をしないで、ナゼおとなしく餓死しないのかと云ふわけになる。さもなければ、ナゼ乞食をしないのか、ナゼ自殺をしないのかと、責めるわけになる。いづれにしても無理な話だ。そうすると矢張りドロボウをさせて置いて、監獄に叩きこんで、そして政府の費用で養つてやるより外はないといふ事になる。考へて見ると、すいぶん譯の分らない話であり、誠に困つた事である。

よく世間で、彼等がドロボウを商賣にしてると云つて罵るが、まともな商賣がどうしても見つからず、乞食商賣、自殺商賣もあんまり馬鹿らしくして出来ないとなれば、同じ馬鹿らしいにして

も、ドロボウ商賣より外に仕方がないのだらう。これは彼等に取つて、善いとか悪いとかの問題でなく、むしろ引きあふか引きあはぬかの問題だらうと思ふ。そしてドロボウ商賣は、一見した所、ポロイもうけの様であつて、實はすいぶん不引合な商賣であるらしい。スリよりも窃盜が馬鹿らしく、窃盜よりも強盜が馬鹿らしいといふ事だ。新聞など見ると、僅か二三十圓の金を取つた強盜で、五年も七年も放りこまれたりするのである。如何にも馬鹿らしいわけである。然し、商賣となれば是非もない、それでも彼等は危険を冒してやるのである。難船を恐れてゐて濱の獵師は出来ない。相場師は濡れ手で粟をつかむ事がある代りに、百萬長者から一晚で眞つばだかになる事もある。ドロボウ連もそれらと同じ様な覺悟でやつてるのだとすれば、それを咎めて見ても仕方がない。誠に困つた話であり、氣の毒なわけであるが、さらばと云つて何んとも救濟の方法がない。

泥棒よりも少し才智の多い連中は詐欺をやる。商賣として、詐欺の方は少し割がいいらしい。殊に其の中でも才智のすぐれた奴等は、尻のばれない様な詐欺をやる。それなら可なり引合ふに相違ない。然し詐欺師よりも遙かに才智のすぐれた人達は『まともな商賣』をやる。まともな商

賣と、詐欺との間の隔ては、ほんの紙一枚である。つまり、上手な詐欺は商賣であり、下手な商賣は詐欺になる、と云つてもいゝ位な場合がすいぶんある。怪しげな新聞廣告などをして田舎者を釣つてゐる商賣などは、大なり小なり詐欺でないのは無いらしく見える。又、堂々たる大商店、大會社でも、巧みに法律の網の目をくゞつた大小無数の詐欺をやつてゐるのが、幾らあるか知れないだらう。實際、多少の詐欺をやつてゐない商賣は無いだらう。それで無くては、商賣といふものは成り立たないのだらう。そうして見ると、詐欺や泥棒ばかりを悪人と見るのは、すいぶん甘い見方だといふ事になる。彼等は却つて無邪氣な善人であつて、本當の大悪人は外で大威張りをしているのかも知れない。おかしな世の中ぢやありませんか。

然し才智のすぐれた連中も折々失敗をやる。相場で大損をしたりするのは、自業自得でむしろ痛快だが、銀行會社の破産などで多くの人に迷惑をかけたたりするのは、すいぶんひどい遣り方だ。そんな責任を感じて自殺したりする人もあるが、自分の食ひ料だけはくすねて置いて、平氣で逃ける奴等もある。然しそくいふ失敗も、大金持がいよゝ／＼大きくなる爲に、小金持が亡ぼされて行くのだと見れば、むしろ氣の毒なわけでもある。それから中以上の人達に、賂賄、横領、詐欺、

背任などの犯罪が多い。これらは實に沙汰の限りである。ドロボウに憐むべき事情があるのとは違つて、これらは食ふに困るわけでなく、相當立身も出來てゐるのに、何を苦んで悪い事をするのであるか。然しそれも矢張り甘い見方である。世の中のからくりの底の底まで見透すと、總ての大成功者は悉く皆な、何等かの形に於ける搾取者であり、何等かの犠牲を取つて食つた人達である。それで無くては成功の出來ない様に、今の世の中が仕組まれてある。そうして見ると、少し立身した連中が、もう少し高い處に登る爲にヤキモキして、ツイ先輩の猿真似をするのに不思議はないわけである。彼等も矢張り才智の足らぬ、むしろ無邪氣な善人だと云へぬでもない。つまり總ての失敗する者には、どこかしらん、必ず多少同情すべき點がある。一ばん憎いのは、ぬくぬくと成功して、善人づらをしたたり、君子づらをしたたり、大政治家づらをしたたり、國家を双肩に擔つてゐる様な顔をしたたり、忠君愛國一手專賣の様な振をしたりする奴等である。彼等の中、實質上に於いて、詐欺、賄賂、横領、背任、窃盜などをやつてゐない者が一人でもあるか。

必ずしも自分一身の爲ばかりでなく、或は全く自分一身の爲でなく、親の爲、子の爲、家族の爲などから、本當に氣の毒な犯罪をする人達もある。罪人を拵へる事を商賣にしてゐる警察官や

檢事などすら、涙をこぼしたり、當惑したりする程の場合が屢々ある。そんなのこそ明らかに社會の罪ではないか。彼等はむしろ犠牲の精神から犯罪をしてゐる。折角の犠牲の精神を、そんな處に使はねばならぬ様にしておく、そこに社會の罪があるのぢや無いだらうか。又、父親が子を養ひかねて棄てたとか、母親が子をはぐくみかねて殺したとか、或はそれに似たような傷ましい事が毎度新聞に出る。これなども、ナゼ社會が知らん顔をしてゐたのかと云ひたくなる。子供が社會に入用でないのか。其の子供が丁年に達した時、社會は彼を兵隊にしないか。若し入用な子供であるなら、どうしてもそれを養ふ事の出来ない親達にばかり、ナゼいつまでも任せて置いたのか。子を棄てると云へば、如何にも親らしくないと聞えるだらうが、自分の手で子を殺すには忍びない、自分の目で子が餓死じにをするのを見るには忍びないと云へば、矢張りそこに美しい親心がある。又、子を殺すとは何たる鬼々しい心だと云ふ批評もあるか知らぬが、お前の子だからお前が育てろ、人の知つた事ではないといふ態度で、社會から突き放された時、そしてどうしてもそれを育てる事が出来ないとなつた時、そんな冷たい世の中に可愛い子を只ひとり残しては置けないと考へるのに無理があるか。自分の子だから自分が始末する、生きてゐる間は親子一緒

に生きてゐる、死ぬるにも親子一緒だ、そう考へるのに無理があるか。それを子殺しの罪で監獄に入れて何の役に立つか。

こんな事をいつまで愚痴らしく憤慨してゐても仕方がない。要するに今の世の中は、人を見ごろしにしてゐる。社會といふものが共同生活の團體だとは認められない。國家は大家族など、云つても、そうした實がない。こゝにいふ國家社會を、いつまで此まゝにして置かうと云ふのか。何んとか、せめてモ少し人間の生活らしいものに改革する方法はないか。

(三九) 女の一生

以上、ザツト男の一生を考へて見ました。男の一生は人間の一生の半分である筈だが、今の世の中では始んど其の全部である。だから、これから先、女の一生を考へて見るのは、此の本として、ほんの附録くらいなものに過ぎない。

小學校時代までは、何の點についても、男と女との間に大した差別がない。中等教育を受ける受けぬといふあたりから、大ぶん差別が出来るだらうと私は考へてゐるが、チョツト調べて見る

に、中學校の生徒と、高等女學校の生徒と、大體おなじくらしい數である。尤も、男の方には、中學以外の中等學校が大ぶんあるのではあらうが、それにしても、中以上の社會に於ける嫁入の資格が近來著るしく高まつたものと見える。只、男の方で『中』といふ處が、女の方で『高』になつてゐる。それだけ男女間の智識の程度が違つてゐるわけである。女の方の高等教育は、數に於いてまだ幾許でもないだらう。

そこで女の方は、高等教育、中等教育といふ階段の分け方をして掛つたのでは、どうも話が面白く行きそうにない。今度は一つそれを横にして、階段分けでなく、種類分けにして見たい。即ち、妻(或は女房)、職業婦人、勞働婦人、賣淫婦といふ四種類に分けて考へて見たい。

然し其の前に、大體に於いて、男に對する女の地位といふものを少し考へて置きたい。前に云つた様に、今の世の中では、女の生活は男の生活の附録になつてゐる。今の社會は男性中心の社會である。女性は只だ男性の爲にのみ存在してゐる。前に智識の程度が違つてゐると云つたが、智識らしい智識は殆んど全く男子に獨占されてゐる。女子は只だ男子の便宜になるだけの智識を與へられてゐる。それは丁度、勞働者が資本家の便宜になるだけの智識を與へられてゐると同

じである。猶、社會の仕事らしい仕事は殆んど全く男子の手に獨占されて、最下等の仕事だけが女子に任されてある。それは丁度、男の方で、最下等の仕事だけが勞働者に任されてあるのと同じである。近來、女子の仕事の範圍が大ぶん廣げられて來たが、それも種々の理由から、支配階級の便宜の爲だと見る事が出来る。猶その點は後に話す。又、財産の所有權といふものが殆んど全く男に獨占されてある。女子は、男の兄弟のない場合にのみ、相續を許される。その外では、女子が財産を所有してはならぬといふ法律は無いけれども、仕事らしい仕事が總て男子の手にある結果として、女子で財産を持つてゐる者は幾許もない。實は此の財産權が男女の地位に差別を生じた根本だと考へられる。男の方で、ブルジョア階級と勞働階級の差別を生じた根本も、矢張りそこに在るのと同じわけである。

(四〇) 女性中心説

然らば、昔の社會には、今と違つた男女關係が在つたのか。どうもそうらしい。何處の國の昔し話にも必ず女神といふものがある。そして其の女神が男以上に尊敬されて、社會の中心になつ

てゐた形が見える。現に日本の昔し話には『天照大御神』があらせられる。そこから考へて見るに、大昔しの時代はどうも女性中心の社會であつたらしい。又昔しの歴史には折々、何々媛といふ女酋（即ち女の酋長）が出て来る。すると其の頃では、社會が女に支配されてゐたわけである。男は女の下に服従してゐたわけである。

轉じて動物界を見るに、面白い實例がいろいろある。蚤の夫婦といふ諺がある。蚤の女は男よりもズツト大きい。蜘蛛の女は男の數十倍もある。そして男は、交尾の役目を終ると、直ぐに女に食はれてしまふ。或る貝類の男は、女のボケツトの隅に入れられてると云つた様な形で、寄生生活をしてゐる。蜜蜂には女王がある。雄蜂はそれと交尾して直ぐに死ぬるが、女王は長く生き残つて幾年も引續き澤山の子供を産む。つまり男といふものは、子供を拵へる便宜の爲に、女の附屬として作り出されたものだといふ説さへある。昔しの昔しの大昔しの、ほんの生物のはじまりである所の、粟粒みたいな動物には、それを學問上では單細胞動物と云ふのだが、それには男女の別が全くない。只だ一個體が充分成長すると、それが二つに分裂する。その分裂が即ち生殖である。だから其の時代の生物は女ばかりであつて、男といふものは無かつたとも云へる。次

に、其の母體から芽の様な物が吹きだしてそれが獨立して、子に成るといふ生殖の仕方もある。そういふ分裂生殖や出芽生殖があつて、それからズツと後に男性と女性との兩性生殖が起つてゐる。それが生物の進化の順序である。それから考へると、男性といふものは生殖の便宜上、遙かに後に發生したものであつて、前に云ふ通り、女性の附屬だといふ事になる。

又、高等の動物の中には、人間の男女の地位を逆にした様に見えるのがある。鴛鴦の男は大へん美しく、女には飾りがない。孔雀もそうであり、庭鳥もそうである。鶯の男は美しい聲を出して鳴くが、女は鳴かない。鹿の角は武器に相違ないが、裝飾にもなつてゐるらしい。そして其の角は男だけにある。女の特に美しいのは人間ばかりである。これだけでは餘り面白くないが、動物と人間との間に、男女關係の著るしい相違がある。動物では、男が女の機嫌を取り、女が男を揆みわたる。女が不承知だつたら男はどうする事も出来ない。そこで男どうしの間に強い力と美しい姿と、善い聲との競争が起つてゐるのである。人間にも、男が女の機嫌を取る事が無いではない。男どうしの間に男振りの競争や、腕力の競争が無いではない。然し人間の競争は主に金力の競争であらう。そして人間の女には、動物の女と違つて、男から獨立して食つて行く力が殆ん

ど無い。そこで人間の女は男に養はれる必要がある。従つて女が男に揆みわけられる。金力を持つた男は、隨意に女を揆み取りにする。そこで人間の女は、動物の女と違つて、美しくなつた。人間の女は美しいといふ事を誇りにしてゐる。然しそれは男の機嫌を取る爲の美しさである。

男に揆み取られる爲の美しさである。つまり、おもちゃの美しさであり、飾り物の美しさであり、媚びた美しさである。尤も、其の點では、孔雀や鴛鴦や鹿の男も同じ事で、其の美しさには、如何にも虚飾らしい趣きが現はれてゐる。然し人間の女は、兎にかく美しくなつてゐるには相違ないが、其の代り、動物の女が持つてゐる様な、男を揆みわけるといふ權式を失つてゐる。これが女としての墮落だと考へられる。女は種族の母として、種族を向上させる爲に、男に對して慎重な揆みわけをする本能を持つてゐる筈である。然るにそれが今では、殆んど全く失はれてゐる形である。それが墮落でなくて何だらう。

然し人間の女も最初からそうでは無かつた。人間にも動物と同じ様な女性中心時代があつた事は前に云ふ通りである。只だ或る時代から以後、財産權が男性の手に握られ、それから遂に男性中心の社會が出来あがり、従つて女性は男性の附屬に成りさがつたわけである。

こういう風に考へて見ると、今の世の中に於ける女の地位のなさけなさ、しみじみと痛切に感じられて来る。何も大昔しの生物の様に、男を女の附屬にしなくてもいゝだらう。現に男は、非常に強い、非常に有力な動物に發達してゐる。それを今更昔しに跡戻すわけには行かない。けれども、何とかして女の墮落を救ふ法は無いものか。女性中心でもなく、男性中心でもない、眞に男女の平等な、新らしい社會を作りだすわけに行かないものか。そこで前記の、女の四種類について、猶ほ少し委しく色々考へて見る事にする。

(四一) 妻

　　女は男の妻として、子を産み、子を育て、家事を務めるが天職だとしてある。男は外、女は内と極められてある。家庭は女の天地だと云はれてゐる。妻は夫を天として敬ふべしと『女大學』には書いてある。今でも大體に於いて其の思想が行はれてゐる。

　　上流階級では、妻は令夫人(若しくは奥様)と呼ばれ、一種の裝飾品および玩弄品になつてゐる。子を産むだけの任務は果すに相違ないが、其の子を育てる事は殆んど總て他の婦人に任せきりで

ある。家事はもちろん總て人任せである。社交上の儀式的任務を果すが、令夫人の唯一の家事なのだらうが、そこに主として裝飾品の性質がある。殿様、御前様、若しくは旦那様に姫を呈する場合、即ち玩弄物的性質の發揮である。

この階級では、家柄の關係、身分の釣合などいふ事がやかましいので、女が戀愛で結婚する事などは最も六かしい。大概は家の事情を主として遣つたり取つたりするのである。甚だしいのになると、貧乏華族のお姫様が、大富豪に買はれて行つたりする。又、場合に依ると、前に男の結婚について話した様に、富豪大官などのお嬢様が中流出身の秀才を婿として引きあける事がある。これは、お嬢様の氣に入つたのを撰むとすれば、よほど戀愛的だと云へない事もないが、然し根本から云へば、其の一家一族を優勢にする爲の、術策の結果である。矢張り政略結婚の一つである。そこで、これら令夫人の間から、運轉手と墮落する者、役者買を以て有名なる者、或はヨーロッパ中世紀の勇俠なる騎士でもあるかの様な若い戀人の手に依つて、赤銅御殿から救ひ出されたりする者などを出だすのは、少しも不思議のない事共である。

中流階級の奥様は蓋し最も幸福な地位だらう。これも半裝飾的な、半玩弄的な高等奴隸だとも

考へられるが、然し上流階級ほどの虚偽がなく、又それほどの無理がなく、そして經濟上の不自由がなく、女中を使へば家事の面倒もなく、子供を育てるのも苦勞心配よりは樂しみと遊びが多いといふ事になるのだから、先づ申分は無い筈である。然しこゝにも矢張り家族關係、身分關係などの面倒があつて、澁々ながら笑顔を作つて見合をするとか、涙を白粉で塗りかくして結婚式を擧げるとかいふ、厭な事情がすいぶんあるだらう。尤も、それだから一生涯、遂に夫婦の間に少しの愛もないと云ふわけのものでもあるまいが、それにしても可なり詰らない一生を送る人も少なくないだらう。又この階級には、夫が外で善く遊ぶと云つた様な事で、奥様の苦勞の絶えない場合も多いだらう。然し『天』の遊ぶ事だから仕方がない。

中の中から下の階級になると、こゝでは、これこそ本當に一ばん幸福な人達だらうと思はれる様な戀仲の若夫婦などを見かける事が少なくない。然し、こゝには多く經濟上の困難が伴つてゐる。それで子供でも大ぜい出來たり、其の外の家族でも多かつたりすると、折角の奥さんが盡なしになつてしまふ。奥さんと呼ばれる程でない細君連、おかみさん達に至つては、猶更の事、全くの臺所奴隷になつてしまふ。御飯たき、おかず拵へ、床のあけおろし、裁縫、洗濯、掃除、

子守、その外に亭主の機嫌も相應には取らねばならぬ、年寄でもあれば其の世話もせねばならず、迎もやりきれるわけのものではない。もうそうになると、戀も愛もあつたものではない。幾ら女は内だと云つても、幾ら家庭が女の天地だと云つても、月に一度も外出らしい外出は出来ず、丸で蝸牛のように小さい家をしよつて、朝から晩まで眞黒になつて働らくのでは、『女の天職』が聞いて呆れる。尤も、そういふ苦しい境遇に深く同情して、夫が飽くまでも親切に痛はつて呉れるといふのも無いではない。それだと、苦しい中にも勵みが出て、働らき甲斐があるのだが、然し大抵の亭主といふものは、幾ら貧乏しても矢張り男だけの我儘氣を出して、女房をコキ使つて見たり、小道樂をやつて見たりするから堪らない。こゝにもまだ幾分か『天』が残つてゐる。

若し世の中が變つて、家の持ち方、生活の仕方が、今とはズツト違つたものになつて、例へば今の百軒の家が集まつて、一つの大きな臺所を拵へるといふ事になつたらどうだらう。御飯たきも、おかず拵へも、總て大仕掛で一緒にやつて、皆が大きな食堂で一緒にたべるといふ事にしたらどうだらう。どんなに儉約になつて、どんなに手數が省ける事だらう。その外、洗濯でも、裁縫でも、掃除でも、子守でも、總て大仕掛の設備をして、分擔でやるとか、順番でやるとかした

ら、どんなに便利で、どんなにらくな事だらう。そうしたら恐らく、毎日三十人も働らいたら用が足りるだらう。若しそうだとすれば、毎日七十人の細君達が休んで居られる事になる。若し又、皆が毎日働らくとすれば、三時間づゝとか、五時間づゝとかの交代で用が足りるだらう。若しそうだとすれば、總ての細君達が毎日の大部分をらくに暮す事になる。そんな面白い世の中を、皆が作る氣になつたら作れそうな氣もするが、どんなものでせう。そんな事にでもするより外に、臺所奴隷を解放する道はない様だ。

それから下の階級。こゝでは中の下の有様が一層烈しくなると云ふだけで、別に變つた事はないだらう。酔つばらひの亭主野郎にはりとばされたり、餓鬼をひつちよつたまゝで其の亭主野郎にむじやぶりついたりする光景は、蓋し主として此の階級の特徴だらう。『奴隷の奴隷』といふ言葉がよくこゝに當てはまる。

妾と呼ばれる一種の妻がある。中には、法律上の妻でないといふだけで、實際上には全く妻になつてゐるものもある。妻と相並んで、只だ少し低い地位に立つといふものもある。妻に内證で圍はれてゐるものもある。謂ゆる日蔭者である。日蔭者の中には、存外氣樂なものもあるらしい。これら

は總て變態に相違なく、いろいろ不快な事もあるに相違ないが、どうせ女の境遇として、例の『天』のなさる事を、どう仕様もない。

(四二) 職業婦人

中以下の男の生活が苦しくなるに連れて、職業婦人が次第に増加する。親や兄がいつまでも娘や妹を養つて置く事が出来ないとか、或は嫁入仕度を拵へてやれないとかいふ場合、其の女は何かの職業に就いて多少とも収入を得ようとする事になる。又、一體に男の婚期が後れるので、(即ち女房を養ふだけの収入が若い中には容易に得られないので)、女の婚期も自然後れる事になり、或は過剰の婦人が出来る事になるので、そこで其の婦人達が何かの職業に就いて自活する事になる。然し之を雇ふ方の側から見ると、女は給料が安くて済むし、それに柔順で使ひやすくもあるから、それで婦人の職業を奨励する事になる。志望者があるから採用するのでもあるが、奨励されるから志望するのでもある。それが相持で職業婦人が次第に増加する。そして其の結果は、男の失業者を益々多くし、或は男の給料を安くさせて、更に職業婦人の供給を多くする事になる。

そして雇主が獨り物かに喜ぶ事になる。『女は内』などいふ道德は、こんな場合には全く無視されてゐる。

職業婦人の第一の困難は、結婚のしにくい事だらう。結婚が出来ないから職業婦人になるのだが、職業婦人になると更に結婚が出来にくくなる。誠に困つた話だけれども、仕方がない。そこで多くの獨身婦人が出来る。オールド・ミス（老嬢）といふ奴が出来る。そうした婦人達が堅く獨身を守つて、冷たい一生を寂しく送つて行くのは、見るに忍びない心地がする。然し永い間には、彼等の身の上にも多少の情事の起つて来る場合がある。それは誠に自然の事である。彼等として、せめてもの慰めである。然るに、そういう情事は、多くの場合、社會の道德から責められる。そこでそれが『醜聞』として傳へられる。彼等はそれが爲に職業を失ふ。又、場合に依つては、彼等は其の事實を隠す爲に、犯罪におちいる。彼等は職業を失ひ、名譽を失ふ事を恐れる爲に、刑事の罪人となつたりする。何といふ氣の毒な事だらう。こんなのが折々教員などの中に現はれる。

然し彼等の中、結婚の困難でない職業の者もある。或は、彼等が收入を持つてゐるが爲に、其

お蔭で結婚の出来る場合もある。女房を食はせるだけの器量はないが、共稼の女房なら欲しいと云ふ男とブツつかる場合が、即ちそれだ。斯くて共稼きの夫婦が續々と出来る。共稼きはチヨツト都合のいゝ生活と考へられるが、自然又それに伴ふ色々の難儀がある。第一、女の方には、勤め先の仕事と、家庭の仕事と、二重の働らきをせねばならぬといふ難儀がある。尤も、中には、夫婦がジャンケンで飯たきをすると云つた様な、面白い家庭もあるにはあるが、大抵は矢張り女の方で、幾分か女房らしくせねばならぬ事になる。一體、結婚するといふ事は、見様に依つては女房業に就職する事を意味する。だから職業婦人は結婚がしにくくなる。二つ職業を持つ事は無理である。けれども、職業婦人も女である以上、男が欲しくなる。そこで共稼きの結婚をやる。無理と知りつゝ、二つの職業を持つのである。二重の働らきをせねばならぬ理由がそこに存する。然しそれも先づ善いとする。所が男の方で失業する。勿論、いつでも男の方に失業の機會は多い。すると自然、男が飯をたいたり、洗濯をしたりせねばならぬ事になる。場合に依つては、男が子守をしながら毎日女房の歸りを待つといふ事になる。それには双方に苦痛がある。男としては、如何に失業してゐるとは云へ、男の體面上、どうしてもそれを耻とする。女としては、如何に自分

が稼ぎ人であるとは云へ、亭主を子守にしては餘んまりだといふ氣がある。然し又、女としては亭主の意久地なさがシミぐゝと感ぜられる。そんな事からして、自然、仲が悪くなつたりする。

又、女の職業が獨立の仕事(例へば女醫、産院など)であつたりすれば、男の方で其の仕事の『内助』をやる事になる場合もある。又、女が文士藝術家などであつて多少有名になつたり、多少世間に持てたりすると、其の結果、何んとなく男の光が薄れて行く場合がある。それらの場合、矢張り双方共に少なからぬ苦痛があるだらう。『つばめ』を持つ事なども、働らきのある職業婦人として誠に自然の成行ではあるが、これにも矢張り種々の困難と苦痛が伴ふだらう。

事務員などの中には多少の美貌を條件として雇はれるのがある。勿論、醜いよりは美しい方が何につけても善いに極まつてゐるのだから、それも仕方がない。そして、鬼かくそういふのが上役のおもちやになつたりするそうだが、それも月給をあけて貰つたりする一策だとすれば、仕方のない事かも知れない。

(四三) 労働婦人

（少し紙數が超過したのと、脱稿の日取が後れたのとで、これから先は大はし折りにします。）
職業婦人と労働婦人とを分けるのは、本當は間違ひです。然しこゝでは假りに、世間並の用例に従つて、中流階級もしくはそれらしいものを職業婦人とし、労働階級らしいものを労働婦人として置く。細君連も家庭労働婦人であるのだけでも、こゝではそれも別にして置く。

扱、先づ女工。これが何と云つても第一番の労働婦人です。今日の資本制度は、女工がなくては立ち行かない。紡績女工、製糸女工、その他いろいろの工場に働らいてゐる女工、彼等があつてこそ日本の資本家は富んでゐるのである。彼等はそれほど安い賃金で善く働らくのである。彼等はそれほど都合よく搾り取られるのである。其の代り、彼等の大部分は肺病になりつゝある。彼等の中には折々堪りかねて逃げだそうとするのがあるが、大抵は巡査につかまつて引戻される。一ばん役に立つ者が一ばん虐いたけられてゐる。それが今の社會の實狀なのである。然し彼等も追々労働組合を作つたりしかけてゐる。彼等の間から強い力が湧きだして來る様な時節は無いだらうか。

次に女中。これには色々種類がある。家庭の女中、料理屋宿屋などの女中、そしてそれにも上

下の等級がある。上級に属する者は可なり収入もよく、後々相當な家持になる便宜もあるだらうが、下級の者は總て隨分な奴隸である。『下女』といふ言葉によく其の境遇が現はれてゐる。これも西洋では組合など作つて雇主と對抗してゐるといふ事だが、日本ではいつまで立つてもそんな事は出来ないのだらうか。

女給は女中の一種でもあり、又事務員の一種でもある。兎にかく新しい労働婦人に相違ない。女車掌も近來めつきり多くなつた。これらは總て新しいだけ、少しはシツカリした運動が出来さうなものだ。

農家の労働婦人は、家屋奴隸と農業奴隸とを兼ねたようなものである。鑛山の労働婦人が、はだかで眞黒になつて坑内から出て來るのを見たりすると、ちよつと人間とは思はれない様な氣がする。然しこれらの婦人達の間からも、ストライキや爭議の時に、隨分チキパキした働らきをする人が出る様だ。

交換手や、看護婦や、タイピストや、事務員なども、自ら労働婦人として労働運動に加はるといふ傾向が見えだしてゐるのは、少し頼もしい氣がする。女教員の組合の様なものが出来るとも

面白い。女教員だつて勞働婦人といふ氣持になつていゝ筈だ。

『新しい女』といふ言葉は、もう大ぶん前から行はれてゐるが、本當の新しい女はこれから出るのぢやないかと考へられる。これまでは、中等階級らしい智識的の婦人だけが『新しい女』と目されてゐるが、それは只だ新しい女の先驅に過ぎない。本當の新しい女は新式の勞働婦人の間から出る筈だ。

(四四) 賣 十 婦

娼妓、藝妓、酌婦、私娼。私娼の中には色々な種類があるだらう。女優の或者も高等賣淫婦と見ていゝだらう。事務員の中にもそれと目していゝのがあるさうだ。

然し彼等が賣淫婦であるからと云つて、それを嘲り賤しむ權利を持つ人が何處にあるか。男は總て彼等を買ふ人として、彼等を賤しむ得る筈がない。女は『貞操』を守る正しい婦人である限り、彼等を汚れた者とし、自分等を清い者と信じてゐる様だが、其の人達が果してそれほど清いのだらうか。泣く泣く嫁入した奥さん、實は厭々ながら笑顏を見せてゐる細君、疾くの昔しお互

ひの愛情は消え失せてゐながら、色々の事情に引かされて夫婦關係を續けてゐる人達、それらが果して『貞操』を誇り得るか。一體『貞操』とは、婦人が自分を男の持物として、其の所有權を認めたまふ言葉ではないか。少し誇張して云ふなら、男は其の金力を以て、生涯の妻として良家の婦人を買ふか、一夜の慰みとして賣淫婦を買ふかである。然し互に深く愛しあつてゐる夫婦は、こんな言ひ方に反對するだらうが、賣淫婦とお客との間にも、すいぶん深く愛しあつたのがある。現に心中する程のが澤山あるぢやないか。

賣淫婦の中でも、上級の藝妓などは、上流男子の玩弄品で、どうかすると令夫人に成りすますものもある。令夫人とまで行かないでも、相當な奥さんに成れる機會は少なからずある。美貌を持つた婦人が此の立身の階梯を踏むのは當然な事である。いつぞや、女學校を卒業した婦人が藝妓になつたと云つて問題になつた事があるが、藝妓になるのと、女子大學にはいるのと、どちらに立身の手筈が多いか分りはしない。

下級の賣淫婦は、賣る者の方でも貧乏からの事だが、買ふ者の方でも同じ事である。女房を持つだけの働らきのない人が、止むなくそこに出かけるので、必ずしもフザけた沙汰ではない。むしろ

ろノツピキならぬ悲惨な現象である。そして賣る者の方では、極めてまじめな、糊口を凌ぐ爲の勞働である。總ての勞働が若し神聖ならば、性慾勞働と雖も、矢張り神聖な筈である。

總てこゝした『賣淫』といふ悲惨な事實、及び正當な夫婦をさへ賣淫類似の關係に墮落させる事が、皆な食乏の爲であり、或は一部の男子のみが金力を握る爲であるとすれば、何とかしてそ
ういふ社會の病根に斧をおろして、婦人を救ひあける方法はないものだらうか。

(四五) 残る婦人問題

女の一生涯の問題について、右に言ひ漏した處々を少しづつこゝに拾つて置きます。

女は結婚すると男の苗字を名乗る。これはすいぶん不見識な事だと云ふので、近來では、法律上の夫婦にならないで、女が何處までも元の苗字を名乗り通すといふ流義も大ぶん行はれてゐる。成るほど一見識に違ひない。然し男が自分だけの勝手な都合から別れたいと云ひだす時、これに反抗する爲には、矢張り法律上の夫婦になつて置く必要がある。然し其の代り、例の『貞操』といふ責消具が生じて來る。

女には姦通といふ罪があるが、男にはそんなものがない。貞操は女だけに責められて、男には御免である。男に對する姦通罪を拵へさせると云つて、男だけの議會に請願したりする迂濶な婦人達がある。それ程なら矢張り議會に請願して、男の財産權を取りあけるといふ。

女は夫に死にわかれると『未亡人』もしくは『後家』といふものになる。男は後家にも未亡人にも成らない。男は死んだあとにまで、女に對して所有權を持つわけである。然しそれも、男の残して行つた財産、若しくは收入、若しくは恩給などを貰つたりするからで、そんな物をアテにさへしなければ、未亡人など直ぐに廢業して自由な女になる事が出来る。けれども、自由な女も金が無くては矢張り不自由だから、結局、金の力に縛られて未亡人になつてゐる事になる。

子を産む事と、其の子を育てる事とは、何と云つても女の天職に相違ない。然し其の天職を盡す間、誰からか衣食を運んでくれなくては困る。普通では、それを夫がやつてくれる事になつてゐる。然し、どうかすると、夫にそれだけの働らきのない場合がある。或は夫に逃げられる場合がある。そんな場合、女は進退きわまつてしまふ。男は妻子を棄て、逃げる事も出来るが、女は母親として子を棄てるには忍びない。止むなくんば一緒に死ぬるまでである。女は母親として、

それ程までの心で天職を盡すのだから、社會はそれに對し、衣食を給するだけの事をしてよい、わけでは無いだらうか。

近來では、大ぶん世間に避妊が行はれてゐるらしい。貧乏世帯に子供が出来ては迎もやりきれない。殊に三人も五人も七人も續々と出来ようといふ場合、それを何とか防ぎ止めようと考へるのは誠に自然である。又、餘りたくさん子供を産んで、それが爲め母親の體が續かなくならうといふ場合、好い加減にそれを制限しようと思へるのも當り前である。然し世間には、避妊反對論がある。女が子を産む事を避けるのは、天職の遂行を避けるわけで、甚だ不届だと云ふのである。然し、社會がそれほど天職を女に責めるなら、前に云ふ通り、天職遂行の期間、社會は女を養つてやるべき筈ではないか。社會が其の方の義務を盡さないで、天職の遂行だけ責めるのは無理だ。のみならず、場合に依つては、社會は又こんな事を云ふ。あの人は無責任に結婚して、子供ばかり拵へるから、貧乏するのは當り前だと。子供を産んでも叱られ、産まないでも叱られるのは、女は實際やりきれない。私等が聞く所では、社會はたくさん子供を欲しがつてゐる。子供がたくさん無くては國が亡びる。安い賃金で善く働らく労働者がたくさん無くては、國の産業が繁

昌しない。又兵隊になる青年がたくさん無くては、戦争に勝つ事が出来ない。だから子供がたくさん入用だ。けれども、社会にはそれを養育する力がない。だから養育はそれ／＼の親達に任せしておく。お前達が産んだのだから、お前達が育てなさいと云ふ。そして親達が貧乏の苦しさを訴へると、それには社会が僻易するので、それはお前達が勝手に子供を産んだ罰だと、ツイ叱つて置いたりする。然しそれで親達が用心して、子を産まなくなると大いに困る。そこで今度は、女の天職で責めつける事になる。社会といふ奴は、ずいぶん勝手なものさ。

近ごろ婦人の参政権を要求する運動が起つてゐる。男の方では、もう普通選挙が行はれる事に極まつたのだから、今度は女の方でやりだす筈だ。然し男の手に財産権が握られてゐる限り、女に選挙権があつても、何程の役にも立たないだらう。そこで其の男の財産権を取り返す爲の運動に、其の女の選挙権を使ふわけに行かないものか。そこまでの意氣込がなくては、婦人参政権運動も面白くない様な氣がするが、どんなものでせう。

大昔の社会は女性中心であつた。今日の社会は男性中心である。それが將來は、眞に男女平等の社会になるだらうと、前に話した。然し女は天性、男に比べると、遙かに劣等なものだとい

ふ説がある。其の點はどんなものだらう。私の聞いた所では、そんな事は決して無い。成るほど今日の女は殆んど總ての點に於いて男に劣つてゐる。然し、何千年來、奴隸の奴隸として抑へつけられ、夫を天として敬ふ様に教へこまれた女が、男に優れよう筈がない。尤も、女は妊娠分娩の爲に多大の精力を費すのだから、其の點から男と競争が出来ないと云ふ考へ方もある様だが、それはおかしい。前にも云ふ通り、女が妊娠分娩の天職を盡すのに對し、男は衣食住を作りだす爲に働らくとすれば、それは只だ兩性間に於ける自然の分業であつて、少しも優劣には關係ない筈である。だから將來の新しい社會に於いては、男と女とが本當に平等の交りをして、女らしい女など、いふ、柔弱な、男に媚びる様な女性美が無くなり、一方には又、男らしい男など、いふ、野蠻な、女を抑へつける様な男性美が消え失せ、男女双方とも、強健な、質樸な、清楚な、温和な人間美を發揮する事になるだらうかと考へられる。

一體、そんな夢の様な事が本當に實現されるのでせうか。いつ、どんなふうにして實現されるのでせうか。それを實現させる爲に、我々は何をどうすればいいのでせうか。

（四六）最後の疑問

扱、いよ／＼これで私の話はお仕舞になりました。男の一生、女の一生、總て人間の一生を大體にわたつて考へて見ました。疑問のありたけ、不安のありたけを並べて見ました。そして其の間に甚だしい失望を感じ、又將來の希望をも認めて來ました。然し今こゝで更に全體を振返つて考へるに、失望と希望とが半々になつて、疑問に對する解決があるかと思へば、又その解決に對する疑問が湧いて來て、結局、充分な安心の出來ない不安の状態に在る事になる。

そこで今一度、社會の極大體について大づかみに考へて見る。總ての問題の根本は、要するに我々が食へるか食へぬかといふ事に在る。つまり今日の社會は、（といふよりは、話を日本だけに限るとして）今日の日本の國には、我々六千萬人を養ふだけの力があるのか無いのか。無いならば仕方がない。それは即ち我々の力が足りないのだから、餓ゑるなり、死ぬるなり、するより外はない。けれども、皆が腹一パイ食ふだけが無いなら無いとして、薄い粥だけでも、皆が一緒に同じ様に吸ひたいではありませんか。一方には、贅澤の限りを盡してゐる者があつて、そして一

方には、國力が足りないのだ、國富が足りないのだと云つて、多數の者にひもじい目を見せて置くのでは、どうも承知が成りかねる。

日本の國家は、共同生活の大家族だと我々は聞かされてゐる。共同生活の間に貧富の大懸隔があるのはおかしい。一大家族の間に、見殺しにする者と、される者があるのはおかしい。學者や政治家や宗教家や道徳家は、そこをどう説明して呉れるのか。

今日の財産制度は、永劫の昔から在つたものではないと云ふ。大昔しの世の中は總て共有の制度だつたといふ話もある。そして社會は絶えず進歩し變化してゐると云ふ。そうすれば、將來の社會は一體どんな事に成りゆくのだらう。

今日の社會に悪い點の多い事は誰しも認めてゐる。そこで社會事業だの、改善事業だの、慈善事業だの、いろいろ提案され、いろいろ實行されてゐる。然し病人の出来る源を塞がないで、出来た病人にばかり、藥を飲ませてでも仕方がない。そこを何とか、根本的に、全體的に、社會國家を一くるめにして、治療する方法は無いものか。

前からの話の中に、資本家と労働者との争ひ、地主と小作人との争ひ、ブルジョア政黨とプロ

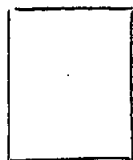
レタリヤ政黨との争ひなどが出て來たが、あんな争ひの結末はどうなるのだらう。資本家側や政
府筋では、えらい勢ひでビシ／＼とそれを叩きつける。すると一方では、たくさんの犠牲者を出
しながら、それにも屈せず跡から跡からと勇敢な運動者が現はれる。其の行先を考へると、本當
に恐ろしくなつて來ます。然し、それも浮世の様で仕方が無い。戦ふ者をして戦はしめよ。勝つ
者をして勝たしめよ。我々の疑問と不安は「いつか其の間に消え去るであらう。

—(終)—

きかは便郵

東京市小石川區
小日向臺町二ノ一九

文化學會出版部 行



愛讀者カード

住所

氏名

(件 用)

No.

(現代社会生活の不安と疑問)

當出版部では、社会問題叢書二十四巻を初め、種々有益なる書籍を續々發行します。そして著者と發行者と讀者諸君との間に親密なる關係を保つために、當出版部で發行するパンフレット、リーフレットの類を無代又は割引して差上げたいたと思ひます。そのために愛讀者カードを作つて置きたいと思ひますから、此の端書に御住所御姓名を明記し早速御送り下されたくお願ひします。

大正十四年一月十日印刷

大正十四年一月十五日發行



著者 堺 利 彦

東京市小石川區小日向臺町二ノ一九

發行者 島 中 雄 三

東京市京橋區山下町一

印刷者 望 月 清 矣

東京市京橋區山下町一

印刷所 英文通信社印刷所

東京市小石川區小日向臺町二ノ一九

發行所

文化學會出版部

振替口座東京七二八〇番

現代社會生活の不安と疑問
(社會問題叢書第一篇)

定價壹圓

